川物核



No. 683

菊澤小松園追悼号

四月号

1川協加盟

菊澤小松園追悼 本社五

月句会

大阪市天王寺区石ヶ辻町19 電話06 地下鉄谷町9丁目,近鉄上本町下車東南

会 B

場

時

5月7日(月)午後6時開場

772

はなし

兼

題

尼緑之助川柳句文集

生かされ 定価二〇〇〇円へ送料二五

橘高薫風著 この

旬

大矢十郎還曆記念句集 《近日刊行》

数/野村太茂津

会

費

柳

塔

社

席

題

各題3句、締切7時

構造社出版 第12巻 川柳全集 第二集

★川柳塔社にてお取次ぎ致します

萬 愚 節

尾

栞

西

四月一日、エープリルフール、四月馬 愈よ四月の言葉も、こんなことでお茶 萬愚節

を濁さなければならなくなった。

九年に書かれた泉鏡花の「六の巻」に出 いという日が紹介されたのは、明治二十 この四月馬鹿という、嘘をついてもい

編の川柳歳事記には、 のである。 てくるから比較的早く日本に上陸したも 昨年、創元社より発刊された奥田白虎 ヨーロッパから伝

> 来した風習で、巧妙な嘘であればある程 書かれている。 る。特に青少年男女間で盛んである、と たたえられ、かなり一般的に行われてい

四月馬鹿受話器を置いてから分かり 少し面白い句を上げてみると、

兄弟で父をだました四月馬鹿 四月馬鹿から急速に恋すすむ 四月馬鹿切符二枚買うて待つ 三面鏡あけたら四月馬鹿がいる きんや 由起子 亥三郎 界 堂

人が顔色を変えて伝えると、菊五郎はニ た。その報らせがあった時、 ていた六代目菊五郎の茅ヶ崎の家が焼け 昭和二十一年四月一日、帝劇に出演し 劇場の支配

> て、見舞う者がいたが、そのたんびにと 日だよ」と言った。ほかにもそれをきい ヤニヤ笑って、「ダメダよ、今日は四月一

ゆくと、その店の主が「どうも大変なこ 前の自転車をあずけてある茶店に入って り合わない。 夜、湘南電車で茅ヶ崎まで帰った。駅

で笑ってつぶやいた、「みんなぐるになっ ていやがる」。 とになりまして」というと、菊五郎は鼻

よろこんで片棒かつぐ四月馬鹿 四月馬鹿祖母も一役たのまれる 四月馬鹿同じ鼠の祖父が居る 四月馬鹿本当であったあわてよう 四月馬鹿ぐるの一人とみられたり



川柳塔 匹 月 号 目 次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

川柳塔 萬愚節 なつかしい書簡…… 秀句 ■連載 自選集 水煙抄 ■川柳太平記 鑑賞 誹風柳多留廿六篇研究(十五丁) 同 -同人吟 人吟) 水煙抄 (71) 《川柳の群像》 田中五呂八 本 西 * 東 西 橘 黒 111 田 高 尾 沢 尾 砂 紫 恵 薫 大 白 暁 = 香 栞 闻 朗 選 汀 明 選 八 選 栞 : 34 1 57 30 4 2 54 33 38 36

菊澤小松園氏を悼む

58

なつかし い書簡

本 田 恵二朗

中の二、三をお目にかけることにしよう。 書簡集として整えたらと思っているが、 和み励まされるのである。いずれ機を得て、 跡や温情は今尚生々しく甦って来て私の心は はそれぞれ薄茶色に変色しているが、その筆 かしんだことである。昭和二十七年頃の書簡 に取って読み返すひとときをしみじみとなつ 存しているが、久し振りにそれらの親書を手 いたご書簡の数々を私は宝物として大切に保 太郎師、椙元紋太師、其他先輩お歴々から頂 故麻生路郎、 葭乃両師をはじめ、 故川上

時は山陽新聞東京支社長として八面六臂の活 後の山陽テレビの社長さんであるが、 居にて路郎と達筆のペン字である。満年氏は あるが、三人の寄せ書きとなっているから 声を走らせておられた。そこで葉書の文面で 躍をされていた新聞人であり、 て活躍されていて、 昭和二十八年十月十九日付の葉書、 夫人の茶々さんも優れた女流川柳人とし 五円切手、 おしどり川柳人として名 東京都目黑区藤本満年 川柳人でもあ

薄っぺら、

若い頃の思い出・岩本雀踊子/60 小松園50句/61小松園さんを偲ぶ・西田柳宏子/59 吊辞・西尾栞/58 先生と"たけはら"・山内静水/59

若い頃の思い出・岩本雀踊子/60 小松園50句/61

各地柳壇 柳界展望 初步教室 奥山弥山人さんを偲ぶ 香川酔 「光背」とちぎり絵 路集 々句集 似 都 武 (佳句地10選/里小路選) る」…… 10 器」..... 「光背」を読んで 中国詩 本 両 福 野 斉 西 大 \blacksquare 呂 III 本 藤 中 英 右 = 洋 īE 近 + 朗 選 選 選 子 兀 幸 坊

編集後記…………

薫風・鬼遊・史好…(89

76 72

68 67 66 66

私

の句

おっさんと言うなよ今日はモーニング

土

居

耕

花

座右の句

地にかえるうれしさを舞うぼたん雪

恵二朗

層に楽しく嬉しくなったことを思い起こして

『昨十七日路郎師をお迎えし、今日新橋演舞場で猿之助・八重子の名演技「花の生涯」を観る。そして今僕の家では川柳一家のように楽しい雰囲気だ。(満年)』

63 62

65 64

いずれ十二月に会って詳しく。(路郎)』

「久し振りに先生にお会い出来て足が地に にご案内して頂き、渋谷の電車乗り場でさま い、上から地下まで先生を引っぱり廻して かぬほどおろおろしています。浅草を先生 つかぬほどおろおろしています。浅草を先生

見ているほどにあざやかに浮かんで来たので見ているほどにあざやかに浮かんで来たのでまで私にはテレビ(その頃は無かったよ)でまで私にはテレビ(その頃は無かったよ)で

、次は昭和二十九年六月十七日付の葉書で次の文面である。『下津井に暑中休暇とのこと が、のっぴきならぬ用が多く、出かけかねて が、のっぴきならぬ用が多く、出かけかねて が、のっぴきならぬ用が多く、出かけかねて でいます。下津井には是非一度行きたいと思っ ています。せめて二、三日でも海岸をブラブ ラ出来たらどんなにゆかいでしょう。今日も 早くから机に向っています。近頃はよく疲れ ます。路郎』―近頃はよく疲れますーで結ば れているところが私の胸にひっかかってしよ うがなかったことを今も思い出している。



杉 浦 婦美子

及ばない愚痴は言うまい のうすさは に似た人想う日向ぼこ 血 0 沈 薄 丁 花

やがいも

金のため茄子もトマトも旬忘れ津軽三味アイヤー根雪はまだ深い物差しを人と比べて生きる智恵教理ひとつ片付けにゆく品を選り 根雪はまだ深い n

玉 置

善受一青作人書病春業

息災 書

あ

りがたいと思わね

ば <

く墨たっぷりとすって置

は兵歴

年捕

虜 1

四年

服

好

きな社長

ある人気

曜

でい

つも残っ

たくじを引く

-ヤでも買うか税金還ったぞの過疎が不思議な街の鳩

重 人

忌

2

明

けてあれこれ

思い当る節

III

上

渓

水

陛下よりお先にごめんダイヤ婚 お 頑 ヘソクリの場所へ 二ン月 強が取柄字も下手口も下手ソクリの場所へ鼠が逃げ込んだ みくじ ても 0 は大吉の縁なぜ離 の安らぎ遺影の げる速さよ亡 下に寝る いずこ 婚

ト無邪気なランドセル 新宮市 12

原

独

仙

共学 かが小銭貸してる方は忘れな、稼ぎ淋しい日記を児に書かせ Ľ 0 飯食べて差のつく皮下 ぎへ 後を切れない義理もある スター 当てた易者を疑 間 らしくない い日記を児に書 都会が

嘘定同た

尾 栞 選

几

プレゼント貰う本人連れて買う二度落ちぬ保証は持たぬ被爆都市いとはんの気儘が悲し春琴抄いとはんの気	他人の死流す涙は少しある時負ついた女に返事しぶられる時のにないの方時計	育勅語古い男と言うなかれ正のある故郷の雪だより	カマボコの板を捨てるに忍びない風邪引いたことも言わずに小鳥死に動物園が閉まりキリンの首伸びる春霞八尾にもあった飛行場むつかしいお顔暦は四月だよ	を交す	巣立ち行く息子にふり向かせはさせぬ高砂やしかと息子を渡します 結婚する息子の或るお母さん (3句) 岸和田市 一
Л		10000			高
		本		垣	橋
弘、		雀踊		史	操
生		子		好	子
雪降るにまかせて地蔵雪の中 老人ホームまだ男です女です 太	夕刊は家へ帰らぬ終電車大根が食べたくなって雪を掘る大根が食べたくなって雪を掘る	1 9	インタホーン神のお告げを売りこくるキオスクの土産を抱いて子は眠りトイレットペーパーのミシンが切れと光背がさくらに替わる猿芝居	妻に歩を合わせて春の道を行招待券一枚妻とは違う趣味招待券一枚妻とは違う趣味居酒屋へ親娘で行って羨まれ居がらみれば道草だった恋まれい。	鼠には嫌われる訳わからな四分の一は自分に似てる孫
の中大阪市西森	を掘るこまれてしまう	ラード を	告げを売りこくる いて子は眠り のミシンが切れと言う のミシンが切れと言う	i	ない。 「食敷市 野 田
版 西	を掘るこまれてしまう	遠	言高	i	合い
西 森	を掘るこまれてしまう	遠山	言高	;	合い合い

古いものが弱い年なり鏡台も 友ありて竹二句集を贈られる 校婦ひそひそ株の話する	ければなどと思わぬことにして料理夫婦の意見合いすぎる大阪市大阪市	覆く靴を並べを知らぬ魚になり、これを立めりの魚になり、これをかりの魚になり、これをおりている。	一億の一人に命預けます陽気な娘送り話題のない夫婦のない生活を不満な妻である。	笑うギャルに信じられているラス1を信じてきた夫婦房にあの日も雪が降りしきり忌にあの日も雪が降りしきり	雪空がどしんと落ちたような庭 関職の割に場所取る大太鼓 関職の割に場所取る大太鼓
	小		小		1
	出		野	J	
	智		克	Ž	交
	子		枝	í	É
冬の空鳥の世界も低くなる落椿雲が迎えに来てくれる茶婦のどちらかにある不発弾気に入りの茶碗は早く叛きだす	一転したいとおもう布団干す手の温味へだまって従いてい	臣 つむりつ	されいごとで終らなかった雪の罪 バレンタイン素敵な過去もありました毛糸だましずかに踊り外は雪	っくりと時計が廻る独りの日は黙って次の出会いを待っての橋にいくつの訣れがあったの橋にいくつの決れがあったの橋にいくののまれがあったの橋にいくののまれがあったの橋にいくののまれがあったの橋にいくののまれが	Part
		Α.	数		西西
		100	XX.	1161	1
	木 千	_	兆代賀	橋夕	弥

父と子の門札ならび春がくる	わがままですまぬすまぬを口癖に	艮	い違い見	おいしいと食べても瞼には描けぬ	んなと	妻だけは指の動きをみんな読む	音だけでもう踏みこめぬ世界地図	島根県 堀	遠出する合せ鏡も春なれや	気いつけて帰れひとことだけの父	七人の敵骨抜きにする笑顔	君も歳ひとの腑抜けが笑えるか	御法話に頷く修羅場を越えた皺	悔いすべて消え去る時が浄土かも	平田市 久	冬眠で見過ぎた夢は貘にやる	永住を決めた黄色い冬帽子	沐浴の女の背から子守唄	地平線までも地蔵の視野が伸び	お棗は千の指紋を重ね合う	洗面器卑しい笑い消せるかな	米子市 林	日めくりをみつめて少し生き急ぐ	銀行通帳見るとたしかに割り切れる
	Ž							江							家							448		
	支							正正														瑞		
	于							山朗							代仕男									
竹原市	早春の枝に小鳥の餌をつるしま社方前かに語る花箸	さ とこか こ きょう こう こっプ 酒 妻は 留	花言葉かるいおだてに乗ってみる	人情すすりラーメンすすり話きく	意地かけた男の潮路へ陽が昇る	神戸市 上	夢のまた夢だったのか二人傘	い モナリザの微笑が今日は気に入らぬ	きまぐれも通してしまう自動ドア	行間にこぼれた不平不満聴く	消し壺でまだ消したくはない慕情	しぐれても晴れても続くひとり旅	和歌山市	ストーブの油が切れたまま回想	n 松の刺円く包んで雪の愛	釣り合いが破れ出てゆくのは夫	父ちゃんは優等だったという疑問	匿名で吾が身告発したくなり	兄弟の血液型がなぜ違う	伊丹市	一揆にも似てひとときを妻の愚痴	枝 孫なみに機嫌とられて七十三	月の暈疑い深い目で見られ	春うらら人魚気どりの仕舞風呂
小						中							西							樫				
島						村							Ш							谷				
蘭						ゆきを														寿				
幸						を							幸							馬				

字 柳 伸	追いつ追われつ仲間の風を温める甲板で命の軽さフト思い甲板で命の軽さフト思いはないます打ち寒い風になる立ち読みの佳境で肩をたたかれる立ち読みの佳境で肩をたたかれる	日い手を振りきる勇気なかったからくりの外は陽炎生きているからくりの外は陽炎生きている血統書すてて野犬の身のかるさ	間す か円っ立	タしすまして元日のご挨拶 要の友達に頭を下げておく 妻の友達に頭を下げておく 大阪市 津 松とれて去年のとおり続くみち	オリンピックで負けた男が好きになる遅れてる時計が鳴っている春よ
中		藤	本	守	
子の自慢負けずに自慢市場かご 和歌山市 松 原 約束へ春の鏡が澄んでくる やっぱり女愛の積み木をつみ続け 逢えたのに心はいつも遠回り キャンドルの蒼い炎へ鳴る鼓動 振り向けば慕情へ疼くコンパクト あなたの掌に移して逝こう火の言葉 朝の雪都会の音を吸いつくし 女すぐ正義の旗を振りたがる かなしみを編み込みバラの花とする ブルジョアの気でいる暖房きつ過ぎる 悪役が黙れば政治空回り 極江市 舟 合理化がまたも足場へ手抜きする ブルジョアの気でいる暖房きつ過ぎる 悪役が黙れば政治空回り 松江市 舟 久原さの心の中を風が吹く 支線ばかり走るわたしの列車です 出 楓 5の弱い人と知ってるサングラス 気寒さの心の中を風が吹く		春	は	柳	
自慢負けずに自慢市場かご 自慢負けずに自慢市場かご へ春の鏡が澄んでくる へ春の鏡が澄んでくる へ春の鏡が澄んでくる へ春の鏡が澄んでくる へ春の鏡が澄んでくる へ春の鏡が澄んでくる 一年 一年 一年 一年 一年 一年 一年 一年		子	るみ	伸	
出 木 田 原 楓 与 み 寿	ばかり走るわたしの列車さの心の中を風が吹く弱い人と知ってるサング	かみもあるのでうるさいブルドーだから張り扇の音高くするが黙れば政治空回りが黙れば政治空回り	空にシーソー明日が重くなるなしみを編み込みバラの花とするなしみを編み込みバラの花とするなしみを編み込みバラの花とするながまとの出来ぬ窓だが開けておくがことの出来ぬ窓が開けておくが、	本なの掌に移して逝こう火の言葉の向けば慕情へ疼くコンパクトッ向けば慕情へ疼くコンパクトッのがは、 のはり女愛の積み木をつみ続けっぱり女愛の積み木をつみ続けっぱり女愛の積み木をつかれた。	の自慢負けずに自慢市場かご
楓 与 み 寿	THE		加	央	化
(M) カ カ カ オ	25	4)	+	ш	ret.
	出	7)			

要注 政何も 遠 ち 子 億札 情 T 隙 子 勝 のびた靴ひと 鹿 10 80 > 捨 杯 0 守 H は 宿 た靴 残り 折衝 の酒 ない かも K H 意 0 以て大臣 などつくれば袖下によからん は 唄 さと引 りし てて一たす一 な 春 50 居 虫 涯 0 馬 聞 心の 口 13 看 に途 で倫 続 ね ひきず 0 ポ 女を口 鹿 な フグ取引きに似た握手 臨 時 40 て育 むり フやっ 3 好 板生きる静けさよ 0 資産なんぞをみたくなし 調 同 1 換えにした身軽さか 鍵を外すべし 嬉 か 方もない K に 理が消えてい 1 男は勝負 海 れてい してるあ 3 H 口葉を選 しさとロ 頼る不甲斐なさ 説いて見 で呑める酒がある 0 本語 0 職の とお を三にする たこと忘れ 鳥翔んで る悩 笑 かる 虫 訓えねば ぼえた頃に逝 3 一で居る 惜 たく 0) 4 春 男 1 2 しさと 和歌山市 なる 兵庫県 桜井市 県 若 H 回 河 岩 宫 原 合 文 武 2 茂 0 3 衛 雄 雄 花屋から 寒い 何も 泣き羅 П 年 勘私思 友逝 息子 葱坊 地球 花 あ 7 老妻を看 年た の出出 定 などは気にせぬ 4 1 ぼ たか 金のまだかんしゃくも持 + + きぬ ま 彼 夫婦 主そんなに 儀 えに老母ひとりの 0 ヒー たんの色を愛し 腰 字こころ 女ご が窓 に胡瓜もん も隠 可もなく 0) ち 漢よ私も笑 いに とは のここら 中 昨日 から にし 0) って疲れ 出る夫婦 る婦人科 ic L 馳走様ですみ ひとつ のら ゆかねば た雪 書 消し の氷とけ 笑 たら気不 0 混 < くろ 4 耶 当 ネガに 古希の 浴 孤 た 1 7 の手品 もろうて来る たヌー に ŋ Vi なら別れまい じる事は に飢えて 独 Vi な 相 は なら まだ若 へさっと入り 10 てなどお る自 ぬまま 顔 春 味い別れ 済 殴 10 色 炬燵 ので淋 イヤリング 師 ドショ まず 褪 n 2 乃ち合わ 今日 0 虐 7 な た せず 富田 10 Vi 岡 n 以林市 田 る 際 山県 しかろ D 0 市 # 靴 岩 藤 士. 村 居 美 耕

代

花

女

菁

居

鶴

丸

do

4

正

敏

別々に ラス 少し暇あると出たがる鯨尺のれんから雪を見つけた左 着飾 未完の絵に彩が足せない都落ち 仕 足 二つ目の矢印に来てけつまずき ラカ まな 合 号を待 がもうそこ迄きてるチョコレー 7 せ トチャンスへ硬貨が足らぬ赤電話 んから雪を見つけた左利き の絆が伸びてゆく尾灯 い仮説少女は鶴を折る の椅子棒に振る知恵袋 0 0 お 0 1 V 塒 あと何キロを聞きわける 服 客 欲し 女の いつか一人になってい が続いています無 た姿態おとなになる寡 負ける饒舌だってあ 毬へ日長をもて余す 0 があって離婚せず 2 带 てる犬 花咲く便り来る 持てばマーチの足になる 嘘 10 を聞 がポ 女は柩に遠く居る と犯 きあきる ンと鳴る す人 袖 和歌山市 3 た 大阪市 美祢市 默 呉 市 F 安平次 本 福 林 間 本 野 弘 満 英 甦 津 子 道 子 光 大雪へ蛙の眠り深く 片 ピー マンネリへひやりはっとが多くなる 古 聴えたら一つ二 宿 雪化粧されて前栽美しい 死なれても悔いない 二人きりなのに一人で居たい 先に逝く逝 すみれにもバラにもなって差し向 単身赴任親切すぎる女が 人事課で第二の故 すこしだけ飲んでみようか春 一人きり犬が会話を聞い 目 T 10 六も負けずにチョコを貰うてくる 病息災八十の 人きり山 左ちがう 絵 h ずつ ナッ へ蛙の眠り深くなる 来る靴磨 花 だ親子にきっ が見える三叉路右 かわり ツの IÍI 0 かぬで揉める二人きり 横顔もっ 宿命 向うを信 を下 43 ば 一つは歌 誕生 とく に似 鄉作 んこに眠れたら げ と時がくる 音梅 ように愛さねば てい 春 いたし 6 がく じよう て二人きり てい 句う にとる 居 れる る 寝屋川 n 日も 松原市 0 3 大阪市 宵 市 10 北 江 神 夏磯 野 道

子.

子

度

見事に生きるライバルの面がまえ男手のほしい日もあり母子家庭	ゃんと受話	寝屋川市	口だけが達者になった坐りだこ	OLに安い飲み屋を教えられ	ネグリジェ二人の城ではばからず	小児科の漫画離さぬままで診る	四月馬鹿本気になった女の瞳	春の画廊出れば風に色がある	尼崎市	はきだめの鶴の孤独がよくわかる	月にゆく約束ちょっと思案する	天国に結ぶ約束などしない	着ぶくれて情がうまく出て来ない	白い髭に貰うじいんとするはなし	訣別の手紙短く書くかしこ	尼崎市	一日へ手形が落ちたうるう年	雑踏の流れを変える笛を吹く	つっかいのなさけに伸びる豆の蔓	下車駅の出会いへはずむコンパクト	ほころびへ錆びてはならぬ母の針	明日は晴れる空の青さを信じよう	米子市	七人の敵に好かれる定年期
		稲							西							春							雑	
		葉							村							城							賀	
		冬							かす							年							美	
		葉							すみ							代							世	
涙もろうなったと思う古希の酒 縄電車先はここでも女の子	雪	京都市 松	とまり木の女男を憎まない	水かけてかけて地蔵に過去をわび	謙虚なる落目謙虚に受けとめる	茶一ぷく貧しい心に灯をともす	掌を合わす心でうまい茶をよばれ	今治市 越	共存へ活路求める目が欲しい	元気なが俺の宝として生きる	近頃は矢切の渡しに妻はコリ	感謝こそ人の任務と思いたし	銃よりも私はペンを武器にせん	倉吉市 奥	ニューリーダー言われて久し中二階	線香の腰にむせる罪もあり	からぶきに力が入る姑と居る	冷静になればなったで憎さ増し	ロボットが酒一合をあてがわれ	点滴も酒の滴に見えて来る	浜田市 佐	ときめきを止めて下さい帰り花	今日一日を耐えているカレンダー	ひとりでは見上げたくない明日の空
		Щ						智						谷							々			
														-							木			

水

弘、

朗

裕

杜

的

真夜中の夜光時計にからまれる	荒磯にきたえ抜かれた貝柱	モナリザの微笑が好きなおとこだが	ドラフト一位さすが駈け引き見事なり	島根県	いい男見つけて来いと勤めさす	すんなりと尻に敷かれて恙なく	仕舞風呂妻は明日を考える	老人会入会署名捺印す	一飯の恩義野良猫離れない	奈良市	わが手足右と左は協調す	立春やわが心にも春が立つ	甲子冬三寒ばかりの日がつづき	襟足の後れ毛もなく生え揃い	宗教は年寄りのものそれでよし	綾瀬市	義理一つやっぱり身内に気を使い	言い負けて朝がすっきりする女	ネオンの灯間違いおこす色である	栄光を夢見る男はピエロかも	プライドはとうに捨ててる戦友会	中支戦友会(一句)	藤井寺市	白旗は左手にそっとかくしとく	を
			9.	小						宮						大							児		
				砂						П						Ш							島		
				白						笛						٢							与呂志		
				汀						生						金							立志		
堺市	天麩羅の衣のような肩書で	モナ・リザを見つめ貴族の目と出会う	背伸びした暮しの底に霜柱	左遷地で耳を疑うことを聞く	親馬鹿を見つめた少女の黙秘権	倉吉市	弱みがあってストーブに遠い席	談笑をしていて先ゆきふと思い	故里は遠くになりぬビルが建ち	みのむしの揺れて候天の朝を知る	丹前に着替えておちつく雪見酒	東大阪市	要領のいいのが騒ぎの前に消え	商人に不向き理性が先に立ち	しんみりと聞かせ無心を匂わせる	不用意な一言悔いをまた重ね	カーテンを替えてほのぼの春に座す	大田市	チラホラの白髪宝と思う日も	宝などない私にも四季の知恵	無為徒食のびるに任す爪がある	伸びてきた寿命へボケの泣き笑い	芽の出ない男が抱いてるカイロ灰	鳥取県	雛段で化けものたちの胸さわぎ
大)				渡						森						藤						Ш	
道						辺						下						田						崎	
美乙女						独						愛						軒太						秋	
女	29					步						論						楼						女	

積年の鬼も仏の父と化し年寄りの気転は蛍光灯に似て		寒気団と橋の真中でぶちあたる	雪女消えると松の雪バサリ	雪こんこん働けぬから寝てしまう	降る雪へ飛び出し少年になる	ある慎怒それから日本海が荒れ	倉吉市 渡 辺 菩 句	ショックだと笑って言えるのもショック	良妻賢母の型にはまったねんねこで	七十の青年七十の句を創る	妻だけが知ってるおれの泣き所	文学のぶの字も知らぬ妻強し	岸和田市 福 浦 勝 晴	地下街に真昼の影を盗まれる	表札の中に帰ってとげを抜く	雛あられ父の無い子は十になる	茶の花がいっぱい八尾に住みなれる	因習をめでたく結ぶ袋帯	八尾市 納 糸 葉	竹とんぼとばした頃の空を恋う	わが子にはないと思った反抗期	父の血をひいて曲げない主義主張	振りむけば見送る母が小さくいる	寡婦の夜半ひとしおわびし窓の雨
降る雪に詩あり旅の子を想う地に還る枯葉に北風鳴り止まず	別の命を飾る四季の	初孫が親子の距離を近くする	大阪市 江 城 修	黙って折り返すででむしを真似るだけ	コレステロールが着きすぎているタカ派	素直な人ばかり見ているレントゲン	犬の散歩は欠かせない氷点下	雪は積もるにまかすままなり無人駅	松江市 小 林 孤	労ってくれる娘がいて呆ける	老いてまだ女が匂う白髪染	絵のように降って悩ます春の雪	片道の切符で老いの坂に立つ	ゲートボールまだ老人になりきれず	松江市 恒 松 叮	般若心経だけが写経の対象か	寒がりに散髪日和がやって来ず	ショーウインドウ入れ歯にうまそうなものばかり	大臣の食べた給食うまかった	池の水温まず鯉も動かない	高槻市 傍 島 静	ミスポリス胸に警笛はなさない	野心家の策に乗ってる踊ってる	やりくって来たと上手な嘘をいう

叮

紅

静

馬

修史

眼をつむって開く間の命なる点滴のしたたり落つる命なる点滴のしたたり落つる命なるまさして故郷の山河射落さんをつむって開く間の命なるの君と僕とで話そうやいる。	明くる日は噂に尾鰭つけ加え気分屋の妻の顔色今日は晴気分屋の妻の顔色今日は晴	() に首相もひとりに に首相もひとりに をいの息切れ刻ん をいの息切れ刻ん() おいの息切れ刻ん() おいの息切れ刻ん	さめている心に風よ何故尖る 鳥取県愛と憎一緒に住んでいる大地 受と憎一緒に住んでいる大地 が家 りさんがおしんに見える日の我が家 りさんがおしんに見える日の我が家 りさんがおしんと沁み込む古農具 もういいかいまあだだよと土の中
高	鈴	稲	斉 清
橋	木	H	藤水
千万	村諷	豊	三 一
方子	子	作	四 保
女家 晴怖つ	言腹 来却	お縄霜人 盃も或	年三 季風ハそ多
女房の買物俺は脇役荷物持ち晴れやかに胸のリボンも春のもの晴れやかに胸のリボンも春のもの味早市ではい波吹きよせる倦怠期に入りない。	言訳も上手に孫は切り抜ける腹へったへったとデートから帰り脚へったへったとデートから帰り柳井市来し方の月日に赤と青の色柳井市	大会H x D レ な	年金でちょっぴり春を買いに出る を分気になってるところを誘われる その気になってるところを誘われる を節風せんたくバサミの責任感 が風船にきのうの息がまだ残り 屋和田市 とかっと着る
房の買物俺は脇役荷物持ちれやかに胸のリボンも春のれやかに胸のリボンも春のれたかに胸のリボンも春ののましく大人の恋として別	日に赤と青の色日に赤と青の色のたとデートから	日ふと小さな刺が堪らな 春を持って帰った幼稚園 真顔で受けている二十歳 智が神へちょっかい出し 智が神へちょっかい出し	を女造花に水をやりたがる気になってるところを誘われ気になってるところを誘われにきのうの息がまだ残りにきのうの息がまだ残りにきのうの息がまだ残りにからべいからである。 単れたくバサミの責任感 単和田・ 単和田・ 単和田・ はなってるところを誘われる。 はきのうの息がまだ残り にきのうの息がまだ残り にきのが見をやっと着る。
房の買物俺は脇役荷物持ちれやかに胸のリボンも春のものれやかに胸のリボンも春のものれやかに胸のリボンも春のものがからい波吹きよせる倦怠期	日に赤と青の色田に赤と青の色柳井市ったとデートから帰り	日ふと小さな刺が堪らない 春を持って帰った幼稚園 野が神へちょっかい出したがり 踏めば心の傷の音 踏めば心の傷の音 で受けている二十歳 神戸市 仲	な女造花に水をやりたがる気になってるところを誘われる 気になってるところを誘われる にきのうの息がまだ残り にきのうの息がまだ残り 単和田市 岸和田市 学の形見をやっと着る
房の買物俺は脇役荷物持ちれやかに胸のリボンも春のものれやかに胸のリボンも春のものがかに胸のリボンも春のものが、	に孫は切り抜ける 柳井市 弘 のたとデートから帰り 弘	日ふと小さな刺が堪らない 春を持って帰った幼稚園 春を持って帰った幼稚園 野が神へちょっかい出したがり 智が神へちょっかい出したがり 智がは心の傷の音	でちょっぴり春を買いに出る 気になってるところを誘われる にきのうの息がまだ残り にきのうの息がまだ残り 単和田市 植 学の形見をやっと着る

悦	田	飯	八尾市					福耳の男へ通じぬ二枚舌
			老醜を曝す路肩に黒い雪					宝船仏頂面に寄りつかず
			一ミリが縮まらぬまま冬に入り					又一歩踏み出す春の一区切り
			やみくもに走る噂が乱反射					喪の庭に一番似合う枇杷の花
			望郷の念など知らず地に埋もれ	子	花	垣	石	米子市
			新芽萌ゆ自信揺がず冬木立					ふりむいた途端相手もふりむいた
_	末	時	岡山市					不作法な足が炬燵の中にあり
			モンタージュ写真×がある安堵					通勤の距離短かくて妻の視野
			緑生む雨しとしとと昼間から					どさくさに紛れて交す裏表
			呼鈴を押せとは書いてないが押す					かといって反旗かかげる気になれず
			苦労性旅で気付かう家のこと	Ξ	忠	本	松	笠岡市
			これだけの事拝観料不満					七曲りして峠の風にあう
早	村	西	島根県				で	コマーシャルごときに人間負けそうで
			銀世界カラスは黒を主張する					万葉の心も知らず石舞台
			友の訃へ僕は生きている年賀					八重桜モラルが少し足りませぬ
			路地裏で猫が泣いてる名残雪				出し	伊予柑を食べるとマドンナしゃべり
			大雪に追憶があり橋に佇つ	步	静	原	羽	守口市
			豪雪へ列島北から沈みそう					人情のうらを見てきたアドバイス
里	幡	小	倉敷市					脇見などさせてくれない棒グラフ
		す	就任のあいさつ手きびしさただよわす					月給日妻へ感謝のメッセージ
			聞く人の胸を突き差すことばじり					進学へ予算オーバーの日がつづく
			精いっぱい生きる姿を子に見せる					決心を急かす吹き矢がとんでくる
			孝行のどこが古いと憤り	スエ	カズ	田	森	奈良市
			発想の転換できぬ石頭					美容院から女春になって出る
庸	井	河	大阪市					露天風呂さらし首に似て並び
			チギリ絵の指先和紙と妥協する					もの頼む時だけ会長さん会長さん

苗

佑

風

郎

灯

り火が演歌の中でゆれているをもらう約束をして花あげる富田林市	流れ矢も受ける落目の友装箱過去を問うまい炎となる舞扇	びを覚えて積木はか	みが解	仮面とる両手が友へ距離をおく	兵庫県	古傷を見つめ男の嘘を聞く	同伴のときは虚栄の彩も塗る	減税も響かず子等は食べざかり	陽を閉ざす日本海へ雪やまず	自治会へ敬遠されるほど頑固	米子市	残尿検査する看護婦無表情	正常なヘルスメーター疑われ	神様も苦笑絵馬の誤字当字	孫よりも娘の肥立ちまず案じ	傘寿万才十人目の孫は男の子		定年の父のドラマがまだ続く	耐えしのぶ女が燃えるシクラメン	石を積むひとつひとつにある怨み	共稼ぎ家計簿赤字になりたがる	協する対話
藤					辻						小						Ш					
田											西						村					
泰					文						雄						映					
子					平						Q						輝					
黒真珠つけて二人の軽い嘘見つめれば見つめられてる瞳に出逢い言い得て妙はたと膝うつ置炬燵	りに半こうらいまつ	体の一部に入れ歯な	だ一つ選ぶ未練の福袋	う時迄しまい	目もくらむダイヤ愛したことは無い	誠実な夫の肩が止まり木で	岡山市 川	貰うより上げる喜び老母の顔	アホになれ阿呆になろうとようならず	物好きのように言われている幹事	雑草の意地を知ってる冬の土	平和な世結構ずくめへでる不満	和歌山市内	堅焼きの煎餅かめる歯に感謝	側面から攻めると弱い母の愛	三日目もまだ雪残る河内です	目白来て赤い実無くす此処も亦	雪景色見てるだけなら美しい	河内長野市 竹	人間愛男女の壁がない	アルバムの中に人間進化論	時差時計私を少し若くする
	田						端						芝						中			
	真						柳						登志						綾			
	砂					1	子						心代					9	珠			

#7	
母	
0	
死	

0 鳴 むせ 33 0 花

留 子

大阪市 藤 H 頂

両年運親だ命 各 下 10 n どの 一度いたずらして見たい チャンネ ル も主 婦めあて

だけで人見ずことわる求人さん の夢いっぱい にランドセル

親より S かく知ってた記 者のペン

肉

野 党は 部 落にもあ り改選 期

与

老兵は敢て語ら ルサラの 意地地下 ず過去未来 街 の隅に 生き

一脱 言を吞みこみ作り笑いする

別室で練っ たプランを吊し上げ 和歌山

市

浦

咿

和

子.

フランスの小

、咄得意なアイシャドウ

吹田市

儿

111

景

子

0

卍巴へ雪しきり

愛憎 わたしへの挑戦スパイス変えてみる スタートはあなたの彩に染まります

い錯覚解かぬ方がよい

n 愛を求 めている寒さ

市

面

Ш

洋

17

切 0 n 僕とも ぬ日の子狸が母を恋う 知 らずビラをくれ

あ年化賛あ金け成 フィクサー のくらしへ軍備恐く 疑惑の渦の中で果て 、聞く

生の虹織る糸がまたもつれ

壺の梅私

の思

心いに似

て咲かず

.7

コに

0

雪シンシン今日一日を猫で居る コマーシャル妻にダイヤをねだらせる いとしさに抱きしめた猫にひっかかれ

わたしのコンピューター

にあなたの

手の温み

京都市

Ш

本

風

を男抜けられず

露

林

杖

初恋を追う夢がある柩まで 紐で生きる運命

当り 屋の女に髭がついてい る

素 b しい美人で大人にはなれ X

ファ ンデー ション原語で「枯葉」うたい 出 す

香水瓶留学生と恋におち 気配りのすすめを読んでるマニキュア

伝説をたずねて春のけもの道

ーするコー ト春 でも 脱がせない

寝屋川市

カバ

側 面 ーメディ ŀ を押すとトイ ボー ル当面 ア側 夫婦 面にあ レは花の園 の目 る機能は 標に

十二歳まだ編んでますとふみ届 ツ人形 わた しも資格あるかし 岸和田· 市 b 島

临

冨 志子

九

逢 瀬を ち切られ

寝屋川 宮 尾 あ

13

き

18 -

という嵐くる になっておく になってはない にあってはない にあってはない にあっている内は人生悟った にって聞く になってはない にあってに対応の種も カマクラの子にメルヘンの カマクラの子にメルへンの カマクラの子にメルへンの カマクラの子にメルへンの カマクラの子にメルへンの カマクラの子にメルへンの カマクラの子にメルへンの カマクラの子にメルへと いって聞く にないまな にあってはない になってはない になってはない になってはない になってはない にない にないはない にないない にないはない にないはない にないはない にないはない にないはない にないはない にないない にないない にないはないはない にないない にないはない にないはない にないはない にないはない にないはない にないはないはない にないはない にないはないはない にないはないはないはない にないはないはないはないはないはないはないはないはないはないはないはないはないはな	ム亶へ言葉を 雨の音春の心	アンデルセ	粉雪はサラー	のずき	た麗	雪しんしん!	空に逃げ	退屈な炬燵友幹うて来た夫な人を選り上	職一筋そんな夫に	我が家にも適は
野 こ う 正月の花屋季節の声がない つまみ食い又耐えている総入歯 辞書今日も繰りボケに対処する 庭石の形に添うたまるい雪 屋石の形に添うたまるい雪 目標はふる里捨てた意地があり 古稀すぎて人生すごろくまた見つめ 内生に誤算があった赤信号 冬眠へ年輪ひとつまた重ね 島根県一期一会甲子にまた出合い 呼び捨てにされる教師にある人気 降りつづく雪に対話の種も尽き カマクラの子にメルヘンの灯がともり かで 大等去んで二合で足りる米をとぐ 地下街で迷い出てから又迷い 島根県 野うている内は人生悟った気 島根県 自動を はん	かけて一日留守になって聞く	んでやる長い	サラサラ二人の無言劇で又雪となり灯を入れるの雪にとまどう大都会	島月根	の空虚は埋めらとこだけ見てし	温味を聞く受話哭言うて丸く老い	の身を案じ	呼ぶ電話口に素直になっておげている音痴	趣味の旅岸和田	齢期という嵐く
ス とり で	村	母		楠		ī	古		清	
に	7	7		原		9	野		野	
祝餅配る家宝の重箱で 時る雪へ野良猫追いし悔いに佇ち 正月の花屋季節の声がない つまみ食い又耐えている総入歯 辞書今日も繰りボケに対処する 庭石の形に添うたまるい雪 目標はふる里捨てた意地があり 古稀すぎて人生すごろくまた見つめ 降る雪へ過去の古傷かき立てる 人生に誤算があった赤信号 冬眠へ年輪ひとつまた重ね 島根県 一期一会甲子にまた出合い 事年の主張農を継ぐと言い かマクラの子にメルヘンの灯がともり か下街で迷い出てから又迷い か下街で迷い出てから又迷い か下均寿命過ぎて鉢巻締め直す				秀		t	V		٢	
供配る家宝の重箱で 高雪へ野良猫追いし悔いに佇ち 青今日も繰りボケに対処する 書今日も繰りボケに対処する 書今日も繰りボケに対処する 書へ野良猫追いし悔いに佇ち に誤算があったまるい雪 島根県 に誤算があった赤信号 に誤算があった赤信号 に誤算があった赤信号 に誤算があった赤信号 に誤りつづく雪に対話の種も尽き マクラの子にメルヘンの灯がともり 方ている内は人生悟った気 島根県 島根県 に迷い出てから又迷い 下街で迷い出てから又迷い 高根県				子		8	で		う	
	均寿命過ぎて鉢巻締うている内は人生悟了他で送い出てから	下街で迷い出てから又迷い等去んで二合で足りる米をとぐ	マクラの子にメルヘンの灯がともりりつづく雪に対話の種も尽き	び捨てにされる教師にある人年の主張農を継ぐと言い期一会甲子にまた出合い	眠へ年輪ひとつまた重ね島根県	生に誤算があった赤信号る雪へ過去の古傷かき立てる	稀すぎて人生すごろくまた見つめ標はふる里捨てた意地があり	石の形に添うたまるい雪島根県書今日も繰りボケに対処するまみ食い又耐えている総入歯	月の花屋季節の声がない。島根県は一番の花屋季節の声がない。	餅配る家宝の重箱暦へ真すぐ歩む影
村田森織			1		1			A .	Tritt.	

孝

華

清

泉

文

子

はじめ

では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	生きた証しの向疵 生きた証しの向疵 生きた証しの向流 生きた証しの向流 生きた証しの向流 生きた証しの向流	艶のないリンゴ両手でかじりたい	米子市 野 坂 な み	慟哭の山しんしんと雪積る	お地蔵の仲間になった雀の子	櫛笄亡母の宝はそのままに	決心へ冬空凜とさえてくる	若芽萌える風の冷たさ言いながら	米子市 青 戸 田 鶴	目が覚めて両の目じりに濡れたあと	かるがると入れたポストが気にかかり	いまの時誰がトイレに立ったかな	謎いっぱい寝棺の花で隠します	怒りんぼ花屋の彩にすくわれる	米子市 田 中 亜 弥	謎ときが下手で真ん中歩きます	笛の音に近づきたくて月仰ぐ	笛の音にひかれて辿る姑の道	流氷の音がねさせぬ漁夫の妻	石笛に埴輪の夢を聞いてみる	米子市 菅 井 とも子	束ね髪衿の白さにふと魅かれ	真実の愛稔らぬまま終り	みだれ髪心のすきを唆かす	風なぶる髪ひとすじの想いかな	裏道を歩いて温い風に会い	
	久 義 モ み	草に生きた証しの向	題に沿うて我が家の植樹	の岬に塔の土台組む(川柳塔からつ結成)	市浜	松の緑はしかと冬に耐	が短所みているような子	木屋が喜ぶ雨の日曜	ロック塀猫恰好の	暦の女房釘を打ち	浜	h	雑音があの一言で遠く消え	の中ふしぎに亡夫とすれ	焼けの夢を見ている青い	ばれた絆子言をよせつけ	澤	沢なお茶でいくさを振りか	雪だるま一夜で肥やす雪の嵩	の緑にこころ変りは許され	いても足りぬ母の	カロンがじわじわ効い	寺	に謎かける言葉を撰っている	の情ねごい言葉と知ってい	古戦場あれは確かに笛の音	

なくだけは泣いて茶漬の湯をわかすなくだけは泣いて茶漬の湯をわかす 時空壕いま蝙蝠を住みつかせ 時で壌いま蝙蝠を住みつかせ 馬店日粗品進呈百名様	油注ぐ発言とも知らず切りをつける勇気を子に習いに鈴つける勇気を子に習いに鈴ったの音がのかる。	も音がの を 指もく 試庭	コアを飲むと子供の顔になを打つ豆トラックに積んで・大田の雪は水割り携げて来るを打つ豆トラックに積んでを打つ豆トラックに積んでを打つ豆トラックに積んでを打つ豆トラックに積んで	通帳母の苦労が染
森	森	木	田	
田	田	塚	П	
布	熊	素	虹	
堂	生	石	江	
三百六十五頁の喜がいて遠き転居がいて遠き転居がいて遠き転居がいて遠き転居がいる。	テストテス 結納の指輪 対目当て嫁	庭 成 酒 灯 兎 ほ 功 飲 も 小 め し ま 消 屋	梅行耳ド書	
三百六十五頁の喜怒哀楽の書き初め縁遠くなる顔で寝る旅づかれ縁遠くなる顔で寝る旅づかれけ焼いて遠き転居の子を想うがないではいるらしいウロウロと影も慌てているらしい	といって は店の知恵で決め は店の知恵で決め おって村続く た親の育てもテスト	る眼も出来る眼も出来のおり、	芽ぶくれ野鳥見逃ずがくれ野鳥見逃れる。	
夏の喜怒哀楽の書き初め 動れ庭に春 富田林市 中 富田林市	ト親の育てもテト親の育てもテといって村続く	る眼も出来セールス板につきなぬ客で接待骨が折れるぬ客で接待骨が折れる。	野鳥見逃さずのせいでなしとなる波紋となる波紋となるがないでなし	鳥取
	といで他人になる早さいで他人になる早さいで村続く おって村続く おって村続く 西宮市とアストされ	岡見き	野鳥見逃さずとなる波紋となる波紋となる波紋となる水でなしのせいでなしまれてなり	鳥取県
中	ト親の育てもテストされ ちゃく で他人になる早さいで他人になる早さいで村続く	岡県横	野鳥見逃さず で絆を深くする となる波紋 となる波紋 七尾市 松	鳥取県金

ロボットに咳払いまでさせられぬ 高棟の窓にそれぞれ戦の灯窓開けて星まで続く風に逢う 西宮市 林	成年に売らぬと言わぬ販売機 十坂故郷へ虹をかけたがり 十坂故郷へ虹をかけたがり	を を 大阪市 郷 が が が の の の の の の の の の の の の の	の果ての決めては神に任せべるだけがたのしみになるべるだけがたのしみになる	アベックの顔い神様聞きもらしアベックの顔い神様聞きもらして 大阪市 欄 で はいらずカレー食う
は	J	原	П	
つ	İ	静	公	
絵	Ĩ	香	子	蘭
急ぐまい先の見えてる下り坂ろえた挙句やっぱり煙草吸う考えた挙句やっぱり煙草吸うを療費の控除申告すると決めて気予報当たって今日も雪が舞う	まで続くわたしのかくれんぼ鏡嫁を見る目は別にもちのかくれんぼ	これからをゆっくり描きたい絵具皿おんな橋七福神に逢いにゆくおんな橋七福神に逢いにゆくおんな橋七福神に逢いにゆくおんな橋七福神に逢いにゆく	固さの中から父の愛の鞭 切れよく豆かむ音の祖父達者 切れよく豆かむ音の祖父達者	真ん中の暮しでちょっと呼気生 真ん中の暮しでちょっと呼気生 動染めない風が後から追うてくる 動染めない風が後から追うてくる 動染めない風が後から追うてくる
	堀	鈴	長谷川	妹
	端	木	Л	尾
	Ξ.	筋	春	春

蘭

江

子

男

まっすぐに立つと幸せついてくる 教沢な悩みだろうか独りになりたい日 歌の日は雨のリズムでミシン踏む 肌を上げよ風は南へ変ったぞ 岸和田市 芳 がんだい は かんでも話しかけても 海だまり	を は で で で で で で で で で で で で で で で で で で	脚行李ひとつで嫁に来た話 神戸市 山 が表しく老いたい心を大切に が洗むでの糸ほぐれぬままに陽が沈むでの糸ほぐれぬままに陽が沈むでの糸ほでれぬままに陽が沈むである。	民生委かなしい過去もきいて去にほどのよい湯加減ひとふしうなろうかほの気の休まるねぐらはどこにある母の気の休まるねぐらはどこにある。 出雲市 吉
地	木 部	П	岡
狸	歳 久 关	美	きみえ
村	栄 子	穂	え
通うて来た余韻深紅のバラを活 を巻に母は情けを包み込む を巻に母は情けを包み込む 脛がじり父より太い腕を持つ 松!一個時までも子供でいたい鬼の面 松!	食べて寝て文句の言えるよい身分食べて寝て文句の言えるよい身分食がなりと事が運んで物足らず武器となる言葉が欲しい日の寒さ離婚率子はかすがいと言ってない離婚率子はかすがいと言ってない離がでいる	要淑子周忌 (三句) 虚しさがじんわり妻の一周忌 悪妻でよかったんだよ逝きし妻 はからずも妻の命日啄木忌 雑用で一日過ぎる家事無限 会議から帰った夜の琥珀色 尼	焼きものの誇り焰の彩となる猫娘笹のみどりに映える彩猫娘笹のみどりに映える彩がある
のバラを活けのバラを活けを持つ松原市	洒落二つ三つ洒落二つ三つ	色 限 忌 し 妻 尼 崎市	さる る言い
の雪 つ を	つ三つ で ない を を を を を を を を を を を を を	1. 忌	さる る る 言い 田
の	三松 な寒ず身の市	尼崎市	豊市市
の面雪松原市本	三 な 寒ず 身分 佐	足崎市奥	豊市

東稼ぎ母の重みにする感謝 大東市 亡き母を偲ぶよすがの四姉妹 大東市 でき母を偲ぶよすがの四姉妹	思が内知られ	通勤のよみは美人の席継がん書き過ぎかヒソヒソが見え社内報書き過ぎかヒソヒソが見え社内報書を過ぎかヒソヒソが見え社内報書の過ぎかとソヒソが見え社内報書を過ぎかとソヒソが見え社内報	t:	路地裏に石蹴りの音残ってた真正面見つめる癖が直らない
土	立	竹	r	野
岐	田	内]	中
F 2	実	紫	ę.	御
ト ク 子	男	錆	Î	前
8.				
水炊きの鍋 芸者を軽く おが話まと	楽しみはおしまた若いつもまだ若いつもまだ若いつも	ぜ白粕街春 ん棒汁に分 そのへ住の	指孫柱り	電話 ロックの
きの鍋から幸をつまむ箸話まとめる苦労してつかれを軽く見過ぎて世におくれを軽く見過ぎて世におくれを軽く見過ぎて世におくれずりである苦労してつかれずりである。	やれおしゃべり食で歩き りへ成人病の影 りへ成人病の影	を 東大阪市 崎田 でんそく へ花粉気になる春の風 おけへキンピラひじきというお昼 おに住み焚火一つもままならず 街に住み焚火一つもままならず おんそく へ花粉気になる春の風	五十路を確かいる親族多過れない	ロ蝶よ花よの孫の声 和泉市 西 和泉市 西
鍋から幸をつまむ箸とめる苦労してつかれく見過ぎて世におくれく見過ぎて世におくれくのある苦労してつかれ	やれおしゃべり食で歩き りへ成人病の影 りへ成人病の影	東大阪市 日本	大阪市で五十路を確かめる で五十路を確かめる で五十路を確かめる	・アワー独り貴方と唱和する ・アワー独り貴方と唱和する

美

酔

子

近

お人好しとのん気な嫁で仲が良い 老梅の一枝老いの部屋豊か 男一人銀色の風に魅せられる 雪どけの音ポトポトと枕打つ それとなく友の見舞へ遠くいる (ガンの	東日済んで社務所も餅が焼けっ金を鬼に見立てて鬼はそと	公務員バキューム係と書いてなし見目形似ても異国のまずい魚風上に立つと男は炎えてくる出雲市の居が好きな女で話し好き	心まで凍てる二月へ計の続く初日の出今年の喜劇の幕が開く高知県高知県	に夢を賭けると馬鹿になが家とはいいな汁かけ飯勤の妻にカイロを振らさ勤の者にかる日を振らさ
开发	行	板	赤	松
上	天	垣	Щ	岡
喜	千	夢	菊	三
西华	代	西华	野	吉
環暦だ少し冒険してやろう 長火鉢明治を語る祖父といる 大峰の神にきびしく躾けられ 行平のお粥の味も忘れかね 大阪市 大阪市	役を斬って汚職の捜査終えい訳と黙否を妻は使い分けい訳と黙否を妻は使い分けどタイ盛って温泉宿のビラビとタイ盛って温泉宿のビラビとタイ盛って温泉宿のビラ	ノフールの画を長)をいこ人喜い家一酸化炭素の憂いなしい障子残した茶の間人が寄り曜の朝はすぐに十時打つ曜の朝はすぐに十時打つ	勝負ごと勝ってる方の咳払い、生生狂言所詮添えない人とみる、そくりがあります宝石見て歩くないんとみる。	と ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
		_		
大	Щ	Ξ		橋
大 野	Ш T	三宅		
大	Щ	Ξ		橋

が飼い主に似を知らぬ表のルを守る稽古れが自分とな	世母の歳またいで元気な顔で老い 一世の歳またいで元気な顔で老い 大草も越後方面手が出せず で政道守らぬ教育改める 最新の機器の威力も人次第 最もない大臣	退院に心安まる居間の顔 連康になりたい薬飲んで寝る 連練を知らぬ女の長話 を調を知らぬ女の長話	では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、
吐	岡	津	田
田	井	川	崎
公	やすお	冬	あき
-	お	子	き子
簡箋先ず豪雪の見舞かられいな人とセールスの彩貝ににじんでいる支店の彩貝ににじんでいる	念入りに結んで手品ぱっと解きななるま湯に浸る女のマイペースやしくて受話器の温みが欲しくなるでしくて受話器の温みが欲しくなるおしゃべりが寒い心を措いていくおしゃべりが寒い心を措いている	というでは、 を対して芸能人は箔をつけ を対して芸能人は箔をつけ を対して芸能人は箔をつけ を対して芸能人は箔をつけ を対して芸能人は箔をつけ	標め手を衝く作戦は除けておく 東石になって不倫が許される カタカナの間に日本語が少し 水槽の魚泳いだままキープ で極の戦にルールなどはない 姫路市
杉	矢	園	大 岩
本	野	Щ	原 井
智 慧 子	生雲	多賀子	葉 本 香 棒

白襷して名工の彫る観音年輪の彫りの深さに光る芸年輪の彫りの深さに光る芸年への道遠くなり		れんぽうっかり咳をしてした子へ従う母も年をとりな人のあくびを見てしまう	ららが解けるのにまりと酒の	ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト ト り ま り ま り ま り	男と女ただそれだけの夢芝居 出雲市 石 倉追いつめて雪は冷たく土に還る 出雲市 石 倉	井吉野ふくらみ亡母の忌がめぐるランスが大事と威張る中の指点下今年は雪の当り年
	軍	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,		輝		
		わ		Back # 440	芙	
F	1	ゑ		水	子	
磨いたら光る心をみんなもち客変り話題も変える散髪屋	病式出てまするにと言う浮電話時々声を手でかこい	脇役が背中を流したのも演技転落の詩集にさせぬ気定年後転落の詩集にさせぬ気定年後	栄転も左遷も無くて社は赤字居直った寡婦が口紅濃ゆく引く	籍料がないので 黙の金が得意で 黙の金が得意で	職安へ油の切れた靴を履き がスターが溢れ豪端芽ぐむものポスターが溢れ豪端芽ぐむものポカーが高い時計に慣れて堕ちてゆく	の無い所へ当る宝くじ
	中		岩	中		片
	西		道	Щ		上
	兼治		博	幸		明

ようやっと入学したが山岳部	大阪市	雪の中花見の話して帰る	うどんやで親しくなった鼠年	美しく泣けぬハンカチ折りたたみ	コーヒーが飲みたくなって逢いにいく	哀しみを分つ人なし花を買う	島根県	ドラが鳴る海のロマンを描きたくて	スイッチオン踊り続ける雑兵か	親に似る未完のドラマ持つ悩み	耳底に父の口ぐせまだ響き	つば吐いて雑兵らしく腹を立て	岡山市	今はもう点滴だけに賭けている	年金をもらいに母の独言	失言をうまくのがれた舞扇	缶ビール缶ジュースで二人旅	横顔が玻璃を横切る春の宵	兵庫県	法律で働く歳をちょん切られ	幼小中塾高浪大卒無職	釣り合わぬ血液型で仲が良い	釣書には血液型も書いておき	髪染めて冒険心は隅に置く	藤井寺市
	Щ				,		松						行						藤						中
	根						本						吉						後						原
	5						文						照						実						比呂
	つを						子						路						男						志
年越しの豆の矛盾にこぼす愚痴	一人者帰れば茶漬の箸を取る	岸和田市 吉	遠足の弁当母は勝つつもり	弁当の数正しくて民主主義	沈黙は金弁当の出る会議	弁当に罪なき顔で整列す	唐津市 仁	小寒大寒立春過ぎて冷酷寒	思い出を残し十八センチの雪消える	雪遊び北陸育ちの子がリード	旧部下が今年も定退した通知	羽曳野市 佐	遊んではいません万歩計が証拠です	売上げが万歩計に笑われる	に忘れた	旅に出て自分の性分垣間見る	加賀市 細呂	済みませんただそれだけで済むものを	伸びきって男の弱さ知らされる	幸せの予感梅は一輪ずつ開く	老いの身に旧正いまだ生きている	玉野市 小	手の相も変れば変る浮き沈み	夫婦でも二三歩置いて行く明治	磨かれる火花のなかで耐える鉄
		水					部					野					木					谷			
		照					四					白					魯					仙			
		江					郎					水					木					山			

山も福祉の世にて花	冷凍の野菜を戻す冷蔵庫	伝統の家風を嫁が変えてゆく	姫路市 丁	勉強も炬燵ですると眠くなり	着ぶくれて無我のひと時浮きつくる	初春に受章を祝うクラス会	雪	枚方市	お見舞に行けば元気と比較され	春を呼ぶチラシが冬を安く売る	ひとことの嬉しさ夫の背見つめ	寒波で人も灯油も小走りに	交野市	湧き清水掬うて美味いけもの道	売店の訛りに呼んだ土産物	オフィスに愛を求めて職につき	残雪は日影に咲いた白い花	奈良県	風化する歴史も絵馬も色があせ	不精ひげに脱サラの友その後見せ	折角の休み除雪に疲れはて	陸海空瀬戸内までも豪雪禍	岡山市 :	商人と分る物腰にこやかさ	明日は明日今日一日の手を合す
								稲					Ш					宮					井.		
			坪					葉					本					Ш					上		
			サワ子					星斗					テルミ					古都路					柳五郎		
3	義理欠いで寝付かれず	笑えない腹上死	人前は夫立て	岡山県	あやまればいいのと亡母は三途から	今年もか続く今年も又赤字	替否問い数も呼ばずに多数決	背に腹を替えられないと二級のむ	兵庫県	しんしんとやさしさを積む雪が降る	泣き虫の少女待ってる春の椅子	犬から見れば限りない猫の卑しさ	水中花昨日の愛はふり向かぬ	松江市	人間の力を笑う雪の舞	遠い山雪の深さを知らずほめ	厳寒に逆撫でされた文化都市	みちのくへ雪見に出れば江戸は雪	岡山県	八つ当り受ける覚悟の腹すわる	労働が難なくさそいこむ夢路	柏手を打つ手で虫を殺してる	ぎりぎりを生きる灯りに嘘はない	和歌山県	孫のまく豆に心の鬼を追う
				直					梅谿					竹					荻					天	
				原					矩庵					内					野					満	
				七面山					朝翁					すみ子					鮫虎狼					三千代	

自選集

寒いなとぶっきら棒に言うて過ぎ貴男なら許せる様な瞳をくれる旅暮れるまだ泊るとこ決めぬまま	量級と重量級でご円満の松北風の号泣聞いてやりを呼ぶ風に耳たぶちぎられるの主張がポッカリ浮いて	土俵ぎわ無理難題のように負け 1 ではきれいな絵に描かれ 1 ではきれいな絵に描かれ	百姓が愚痴言う時は天を向き唇に敵意ありありコンパクト
黒		本	月
JII		田	原
紫		恵二	宵
香		朗	明
とんどの火斜めに走り春の音 追うて来るはずの靴音待っている 尼	潮騒の音を湯船で聞いた宿 キープした瓶に夫婦で逢いに行く オープした瓶に夫婦で逢いに行く 若	崩れた築地から終目はるが覗いて居 古信楽すなおな心で観なければ 黒幕の顔がチラチラして消える を解いて男は爪を切る	春ですね蟻がせっせと動き出す
<i>6</i> 3.	柳		本
緑 之	潮		水
助	花		客

4000		505	***	500	~	****	وهجوه	~N.S.	74.547	وهمود	545	1000	وجهو	5455	450	95K	×44	***	ولامون	~	F45-F4
思い上がると揺さぶってやる縄梯子	自負持たす為なら手綱弛めとく	毒舌で固い男を揉みほぐす	愛の鞭育てる驕りふと思う	驕りかも知れぬフィクサー押しつける	野	スケジュールない連休の良さを知る	条件がどうのと約束反故にされ	働いて来たんやチャンネル委しとき	亡父に似て来た有難さ情けなさ	先生との対話ハイより記憶なし	大	ゴム毬もしぼんだまんま寒の冴え	苦も楽も百年生きるワケでなし	棺桶から余生は首が出てるだけ	目の上のたん瘤となる防衛費	軍拡の愚を宇宙まで打ち上げる	I .	化学の粋しっぺ返しの顔向ける	もやしでも翔んで走って雄と牡	信心も過ぎて極楽通り越す	機械化に土の感触見失い
					村						矢						藤				
					太茂						+						甲				
					及津						郎						吉				
1	坮	鱼問		事	薬	院		存		모	宏	純	'ar	+-		去	٠,	自八	21	+	
よろこびが走る片ちんばの歩幅	抱擁の影の長さへ星が降る	鯛焼きを待つ間のひとつずつの顔	水	素面なら大事にいたる口を聞き	義理一つ果せず雪におおわれて	庭下駄をかがます春がそこここに	人間はまだ止められぬ句帳買う	褒めといてじわじわ何か言われそう	米	景気上向く物価は上昇中	家族の輪ひとつ欠けてるのを探す	減塩をせよと血圧おびやかす	寒波居坐る耐える心を試す冬	太陽の笑顔遠のく長い冬	藤	幸うすき六十路の妻のスケジュール	おさえてる笑いの中にある安堵	船点となるラバウルにつづく海	引潮へ戦さを知らぬ稚魚の群	まっとうに生き抜き八手のような掌よ	Щ
			粉						沢						井						内
			千						暁						明						静

朗

水

明

翁

腑に b たく 落 ち 82 踊 顔ご破算で願 る笛 なら吹きまし ます しよう

ほとけ 花 1 3 n る歳 時 記 知 B 如 菊

一金の

1)

ズ

ムは

万步

計

3 II

安をつ

けるだけ

て

13

用

0

間 歩

は

孤 H

独

から

逃れ

時 盆も暮もな 間息子に頼 6 れる 金 井

文

秋

場 没 食 子.

市

出 П 天 なり

W

きに

かてず小意地を引込 に出してるかくし

め

3 新

妻は妻なり

老醜

0 0 0

カ 情 F

バ

1 A

帽子もその

0

脢

心

報

E B

が違う

暦

かい

僕

0

哉

3

全日本川柳大会

五四二

大阪市南区谷町

七丁目

二三九

第8回 投句先

宿題

第

当日

出句

一替口 É

座

大阪7

3 5

7 5

(06) 768-2622

日本川柳協会大会係

若森い 部

鏡

選選選選

当日出席者の会費は二〇〇〇円 各部各題共 鳴る 一句宛、 未発表作品

母さん

が

後

で手 一人暮

を

打

ち

嫁 老

何

1

かも捨てて都

会

潜

り込み きまり 40

まあ

まあ

0 0 げ

L

0 む

0

知

恵

U

しとけ

6 80

雑 す

草

な を

摘

樂隠居

病

13

峠

0

越

堀野 口口居 (昼食記念品代 に限る 北初哲 斗枝秋代

本 III 柳 協 会

H

日時 大ホール 島根県米子市皆生温泉グランドホテル 昭和59年6月24日午前10時開場 米子駅より送迎バス皆生温

泉入口 5月末日締

部 (そら (事前投句、

切

艷

待つ

×18センチの句箋

3.5

額小為替、現金書留)同封、

5月末心着のこと

封筒に住所氏名明記し、投句料金一〇〇〇円(定

奥 田

句宛記入、 無記名

泉山 白淳 宗道 虎夫郎 選選

32 -

新谷町第二ビル二〇六号

同 人 吟

句

前月号から一

* 暁

明

大根が満足そうに煮えている

になりたいものである だ満悦であろう。人間もこう見てもらう大根 こう感じとられた句主の顔も笑みをふくん

横文字を訊ねる友が一人いる

勢の中にあることを思うと「一人いる」が光 ぺらなものでない。人間感情の複雑な社会情 一人いるが句の命。単に友情だの言う薄っ

民芸の窯の野性を撫でている

ともいうべき「火」による焼き上り(野性を) 撫でる心。それは生きものとの対話だ。 民芸の中でも独特の味と魅力がある。魔力 どんたく

十日すぎいやいや届く年賀状 Ш

春

度

日本に藁が生きてる注連飾り

カーテンの柄しみじみと寝正月

正月の句として引き立てていて面白い。 ンの柄、それぞれ新しいとらえ方、感じ方が 抜いたとてどうにもならぬ錆刀 瑞穂の国の藁。いやいやと擬人法。 道 カーテ

ることを信じよう。 く、己を見つめた反省でもあろう。研げば光 錆刀は自分とも考えたい。これは哀れでな

つき放す愛情だってあった筈

「雪の別れ」を思い出す。 つき放した母の愛情、近江聖人中江藤樹、

妻静かこんな夫とあきらめる 児 島 与呂志

でない馬鹿に徹すればよい。味のよいもの。 台本にない人生の通り雨 妻はあきらめて貞淑で夫に仕え、夫は馬鹿 しあわせはハイハイ妻に馬鹿でいる

出会いがあり転回を生むことであろう。 であるだけ通り雨がいい。そこにはいろんな 子の運転へ控え目に話しかけ 人生はドラマだ。しかし台本のないドラマ

子は宝積木くずしの子も宝 子よたまにゃ笑えるニュースきかせぬか

Ш

野

怒鳴ること忘れた父の背の丸し

の思慕、父よ長寿を保ってと祈る心。 後に子宝の目にうつる怒鳴らなくなって父へ 願い、どんな子でも「宝」と思う。そして最 運転する子の気くばり、笑えるニュースを

手作りを添えて小さな礼をする

次の曲り角に私は賭けてみる こんな処世術も心得ねばならぬ世相か。 参考にしますと上手ものの嘘 手作りが光る。これに優るものはない。

与党から意外な問いをされた汗 人生あくまでもこの手が大切。 Ŧ. 里

吹き出され見合写真と言いそびれ 皮肉ながらもユーモア、やれやれ。 男

水

歯科医院天井きれいに貼ってある 誇張がよく効いて成功句。

聴診器いと簡単に酒は駄目

笑いと、くすぐりと、柳味ひしひし。 人

厄介をかけぬお方で水くさい 鳥が野におりて来てから野の寒さ

水

小春日の寺へ手袋つい忘れ П かすみ 37 生

JII 柳 太平記 JII 柳 の (71)群 像 Ŧi. 呂八 東 野 大八八

似た川柳人であった。

似た川柳人であった。

似た川柳人であった。

もに正式に結婚した。

血筋で、次俊は小学校から中学を経て札幌農 ルであった。父は益蔵、母はみな。二人 県土族であった。父は益蔵、母はみな。二人 県土族であった。父は益蔵、母はみな。二人 県土族であった。父は益蔵、母はみな。二人 県土族であった。父は益蔵、母はみな。二人 場上族であった。父は益蔵、母はみな。二人

年、問題の人妻尚子が離婚を認められるとと

人妻と恋愛関係に陥ったため、同大学を一年大入学まで首席で通した。しかし四歳年上の

明治公債旭川支店に勤務し、

生活から考えほほえましいものがある。笑味から始まっているのは、後年の彼の川柳は世間なみに伝統川柳の持味にふさわしい可

彼の川柳趣味は剣花坊の「大正川柳」には

で中退、

をもじってつけたもの。彼の川柳のスタートをもじってつけたもの。彼は中学時代 『聖人』のニックネームをつけられる程の模範生だったが、胸を病み二年間の療養生活中にがらりと性格が一変、酒とせていたが、やがて尾山夜半枝(旭川川柳社主宰)と面識となり、結婚生活に入った大正主宰)と面識となり、結婚生活に入った大正主宰)と面識となり、結婚生活に入った大正主宰)と面識となり、結婚生活に入った大正主宰)と面識となり、結婚生活に入った大正主宰)と面識となり、結婚生活に入った大正主宰)と面談となり、

彼の川柳生活の一大転機を意味した。 せの川柳生活の一大転機を意味した。 はの川柳生活の一大転機を意味した。 はの川柳生活の一大転機を意味した。 はの川柳生活の一大転機を意味した。

柳社を結成し機関誌「氷原」を創刊した。 大正十二年二月、彼は沈黙を破って小樽川

「実際において川柳界の内実を覗いたものは誰しも感じるが如く、何等の主義も識見も 思想らしい思想の一つも持たずして戯作的川 脚を永く食い、川柳の唯一の源泉たる江戸産 柳の古川柳を如何に多く考証し、消化したか によって柳界の第一人者にもなり、権威者と しなり、選者にもなり先生にもなり得たので もなり、選者にもなり先生にもなり。 ある。(中略)全くもって怖ろしい話だ。馬 鹿らしい話だ。

川柳家それ自体の罪が大半であることは否まだらない常識家になり、通人に堕していったでいい、対談認されてきたのも、敢えて川柳そのものの罪ではなく、そうした生活態度をもって川柳を弄ぶことによって、知らず知らずくて川柳を弄ぶことによって、知らず知らずくの罪を決し、甚だしきは、というない。

鋭く試み、こう結語している。 ・ の後書の一部である。ここで彼は中央 月刊)の後書の一部である。ここで彼は中央 月刊と絶縁したことにつき、こう自己反省を が壇と絶縁したことにつき、こう自己反省を がった。

「私の川柳過去帖を繰る。何んという生活の屑の羅列だ。何んという自己表現の低劣さだ。何んという模倣の他律的関文字だ。私の自己否定は、自己発見の苦悩に目覚め、私の自己否定は、自己発見の苦悩に目覚め、私の自己創造はやがて柳壇への批評となり、遂に既成柳壇に対して叛逆の態度すら確立するに至ったのが私一個人の小さい川柳革新運動で至ったのが私一個人の小さい川柳革新運動である」

められたのは、北京で和田黙然人から贈られて、全国の川柳人から大きな反響を呼び、こで、全国の川柳派をひっさげた北辺の田中五呂八の存在をクローズアップさせたのである。八の存在をクローズアップさせたのである。

大「新興川柳論」だった。若い私は一読忽ちた「新興川柳論」だった。若い私は一読忽ち 無縫自在のその評論ぶりに完全に圧倒された というのがその時点での感想であった。加え て五呂八に傾到する黙然人が、この三三〇頁 の快著を踏まえ、若い私の柳観の洗脳に躍起 だったその熱意の程は今もって忘じ難い。

や『新興川柳論』によってあきらかであるが、なる追悼文を書いている。この稿同書からなる追悼文を書いている。この稿同書から「一略一田中(五呂八)が新興川柳史上に果たした役割と業績が、まさに抜群の光りを果たした役割と業績が、まさに抜群の光りを果たした役割と業績が、まさに抜群の光りをいっていることは、彼の労作『新興川柳論』によってあきらかであるが、や『新興川柳論』によってあきらかであるが、

心を寄せられる向きは同書の精読をおすすめ本稿もこれに拠っているが、両者について関刊)は五呂八と鶴彬を描きつくした好著で、

指導力によることに多く負うていると僕は思八のあのすぐれた批評的才能と高邁精力的な所のあのすぐれた批評的才能と高邁精力的ないれいに批評を試みたり、また川端康成やていねいに批評を試みたり、また川端康成や

れ、といって批評を軽蔑することによって、れ、といって批評を軽蔑することによって、れ、といって批評を軽蔑することによって、比闘争記録であると同時に、また新興川柳発展の歴史的文献である。その鋭い、高い広い展の歴史的文献である。その鋭い、高い広い展の歴史的文献である。その鋭い、高い広い展の歴史的文献である。その鋭い、高い広い程が自立とではラクタどもを百ダースあつめても及ばぬ価値を持っている。—(略)」生前の五呂八と激越な川柳理論の応酬を重生前の五呂八と激越な川柳理論の応酬を重なた鶴彬だったが、この追悼文にはライバルを痛惜する友情の深さがよく酌みとれる。—毒草と識らず毒草咲き誇り 五呂八一人間を摑めば風が手に残り "

★次回は「和田黙然人」

類杖のいつか雀になっている

誹 風 柳多留 廿六篇研究(+哥)

石 Ш 成 黄 佳 大 石 屋 田 六 郎 南 八 木 敬 得

小野真孝・本多

IE.

範

多

田

光

故岡田甫

目薬の看板眉ハ入らぬ事

多田

岡田

石田成―本句と同想の小咄に、

246

247 もうくける斗とさかすたはこ入

一服しよう」というところではないでしょう は客が遊女に三会目にやる床花の返礼として は客が遊女に三会目にやる床花の返礼として とたばこいれとどうもうまく結びつきません。 とたばこいれとどうもうまく結びつきません。 とれるものときまっている。しかし、くける とたばこいれとどうもうまく結びつきません。

サ、あれはめぐすりのかんばんじゃ」「ソ

こではなの薬を買いたふござる」「ナニ

「こなたは何を見てござる」「サレバこいなかもの馬島が前に立ってゐるゆへ

目ならば、まゆ毛の下にくすりとあらふ」レデモ目の下に、くすりと書いてある。

(『聞上手』二篇、安永二)。

五二八

か。

目薬を瘡の看板かと思ひ目薬と鼻のあたりへ書て置き

多田=大屋説とは思うのですが、現代でもまり。

気になる。一般の奥様や嫁さんでいいのか。鈴木―一服となると、煙草をすう女性が一寸

岡田=大屋説に賛。

248 又帯をかせかと河岸の姉女郎

な長屋造りの女郎屋が建ち並んでおり、従っ見世の外に局見世、一名切見世と称する下等生門川岸、西は西川岸と呼ばれ、ここには小生門川岸、西は西川岸と呼ばれ、ここには小生門川岸、西は東は羅

てそこには枕代百文の河岸女郎とよばれた卑

又帯をかせかとほどくあね女郎

句は平生はろくな衣装も持たぬ故満足な帯 安四·礼5

偶々遊客があり、あわてて姉女郎から帯を借 も締めずだらしがない恰好をしている女郎が

りて、その場を取繕ったことか。

どうであろう。 八木=「偶々遊客があった」場合というのは

で、そんなのんびりした状態ではない。しか このような安い見世では、数でこなすわけ

を払ってゆっくりして行く。すると賤娼とは いえ女は女なので、改めて帯もしめたくなり し、たまには馴染客がいて、二倍、三倍の金

本多=帯を借りる場合ということになると、 小野一どうも状況がはっきりしません。 姉女郎に借りに行く、というのではなかろう

多田=よくわかりません 八木氏説と思います。

岡田=質草として借りにくるのかと思ってい

249 ました。 たもとからちろりを出してくらわされ

> 銅、真鍮、錫製の筒形または角形で鉉または 石田成―「ちろり」は、酒の燗をする器で、

敬して、仲間にたしなめられたか、主人に見 把手が付き注ぎ口がある。これをちょいと失

つかりくらわされたか。

居酒屋でちろりを飲んでくふていやつ

げひた奴ちろりの蓋をおっことし 八六:4

八木=賛。店の主人にくらわされたのであろ 明二・梅る

う。

岡田―同 多田—赞

250 足の木像を足袋屋ハ持て居ル

型どった看板が掛っていた状景をよんだもの 石田成―本句は、単に足袋屋の店先には足を 踏付ヶにした看板を足袋屋し ニ六・12

八木―賛。「木像」は「木型」ぐらいの意味 ではなかろうか。

本多=「木像」は看板をさすのではなく、八 木氏の言う「木型」の意

の柳句もあれば、足袋の木型を使用したのが 先ッ初手ハ足袋木像をはかせて見 ○四・30

岡田

同。

色気の全然ない者を木像と言うが、この意を 型を指すのであるが、本句の面白さは、まだ 通わせたところにある。 わかる。従って本句の木像は足を型どった木

多田―賛

分・十文……というように種々の木型がある。 岡田―同。木型です。九文・九文半・九文七 それが幾つかに崩せるようにしてある。一個

251 目がさめてあゝきなく喰ふ粟の飯 だと、製造過程に際し出し入れに不自由

から枕を借りて寝ると、立身出世をし長年の 中国の邯郸で盧生という少年が道士の呂翁

石田成=一炊の夢の故事を詠んだ句

あった。 盧生はそれによって人生の栄枯盛衰 飯がまだでき上っていないほどの短い時間で は彼が眠りにつく前に呂翁がたきかけた栗の 栄華を楽しむことができた夢を見たが、それ

目かさめてあわのまんまがまづいなり

の果無さを悟ったという。

大五・義2

いいゆめを見てあわめしかまづくなり

20



III

選

高 杉 Ŧ.

突っ

張って妥協許さぬ

な親で鶴がまだ折

羽れ

織ぬ

無器

用

ま精っ一

ぱい生きて続編

とうな暮しへ開く春の

開く春の辞書

招

か

n

て季節にはやい

苺篭

有

働

芳

仙

指ひとつ鳴らし完敗だと思う

逢える日は虹がきれいに見えてくるよみがえる記憶貧しいことばかり ひざ枕 0) 重みが愛を深くする

金少し 摑ませ心ためされる

炎 にもてあそばれ る孕み 猫

陽

夜もすがら母と語らう旅まくら白紙委任朱肉の中にある信用釘ひとつ夢がひろがる青写真 お茶漬を京都訛 りで誘われる

られ x > の薔 た 毬が弾 一薇に迷 h いたい日も だ空を恋う

負早カ忘

春ル

n

前 JII T. 賀

近江八幡市

紀 市 郁

栄

尼崎市 田 中

晴 7

け大の 0 雨 は のボタンがひとつ落ま 林 林 春 落ちて 0) る हों 13

3

空仮炊振面事

脱ぐと涙がにじむお

りの

バ

ット 空気

を斜

に切り 人好し

けてまだ良縁に恵ま

美しく

沈む夕陽に嘘

決めて

飯場

0 がな

灯

になじみ 10 おしゃべりがとても楽し

還暦の「川柳塔」へ四股を踏

投げやりな言葉だけれ

ど温

か

Vi

き出し

43 to 寸

地

妻

小

Ш

悠

泉

お

隣

0

暮

しを女測り合

-38 -

根棄散る山道行けは鳩か寄る サングラス下に掟の顔がある 静脈がピクピク動く好奇心 ポンと帯叩いて女戦う気 温いタコ焼持ってお隣へ 和歌山市 休日へこころも軽く花ばさみ	をなっ 1 直示 大の行く道は銀 で見れば女房 でそっと囁く すっと囁く	等をした もった もった もった もった もった もった もった もった もった もっ	金魚ボせ
中	升	林	高
尾塚	下		野
まめ、五	玉	荒	宵
み島	子	介	草
マネキンの帽子に恋をした雀ロールキャベツ一部始終を喋り出す 思惑はみんな消えてく春の庭 悪惑はみんな消えてく春の庭 書道展墨のかすれなど誉めて 熊本市 宇 野 一番 まかれとしゃべってみたいうれしい日 かいれとしゃべってみたいうれしい日 かい でんな でんな でんとの をになる	まじないエヘンプイプイ母の指針の土も売ってる種屋さん かましくなり おりが かましょう で空飛 ぶジュータンほしくなり おり	寝屋川市 平 が でパートの隅拒み続ける花ことば すこし名が出て見知らぬ縁者訪れる すこし名が出て見知らぬ縁者訪れる でパートの隅拒み続ける花ことば	しかしたら愛かも知れぬ詩を織る の馬車鏡の中へ消えてゆく と女恋はわたしの憧れで
野	藤	松	渡
昭	正	かす	杏
代	子	2	花

雪化粧我が家の庭も名園に 伊丹市 樫	文字の針ことばの針で快く嗤う	税金をはじく電卓にも罪か	ふるさとに未完の詩がまだ埋もれ	白無垢を春まで着せて野の仏	鳥取県	華やいでいますピエロになりきって	よき友の一人に加える広辞苑	春うらら日曜画家と釣人と	待っていてくれたチャンスに礼を言う	藤井寺市	満月に祈る老婆は満ちたりる	楢山に矢印のあり葛かずら	坂道にかかると喘ぐ万歩計	おとことの出会いに弾むカレンダー	平均寿命だけ人並みに生きている	名古屋市	車庫入りの寒さを積んだ回送車	春風に鬼が梯子を踏み外し	妖精が来るなら窓を開けておく	風鈴は冬の風では音出さぬ	バス停で一円玉がふるえてる	尼崎市	3	気がつけば夫婦の歩幅ずれている
					中					赤						越						春		
谷					原				61	木						村						城		
郁					諷					和						枯						武庫		
子					人					子						梢						坊		
恋序奏しずかに沈む角砂糖受話器軽く撲たれて今日は四月馬鹿	名古屋市 藤 井 高 子	昔話のありそな妻の古い櫛	坊主枕でねると悪女になり切れる	まだ距離を置いて女は城にいる	今年しゃいい春から嫁が来る話	岐阜市 市 川 鱗 魚	金庫の目盛り合わない日のあせり	宝石に縁ない祖母の指が好き	生きてゆく自信方言持ち歩く	停年の夫の丸みが愛おしい	熊本県 大川 幸 子	バレンタインデー チョコが有るから買うてみる	終い風呂シャボン飛ばして見るゆとり	相性がよいから仲よい嫁姑	兄弟の和を保ってた父が逝き	京都市 松 川 芳 子	公団の芝生でゴルフ真似る子等	梅の花天神様は生きてはる	打ちあけてしもたら酔いがまわって来	仏飯に湯気の立たない朝の冷え	高槻市 竹 内 花代子	白銀の世界にあった落し穴	馴れた道雪のあかりを一人ゆく	氷雨降る夜は哀しく人恋うる

農を継ぐ子に車や家を買い 人間の子まで生ませる試験管 作文は親の喧嘩で二重まる 新婚の二人になって出る疲れ 竹原市 胃袋にたまった嘘をかみしめる 気のいい鬼が節分の豆ひろってる] 9 智	鏡間うあなたのどこを写そうか雪だるま目鼻ないまま水になる風花の庭に米撒き雀よぶのの帯似合う着物も着れる年の帯はいまま水になる。	シルエット伸びて別れが切り出せずコロコロと美女が落した便秘薬目の鱗みたいに外すコンタクトパンジーが揺れてやさしい人を恋うパンジーが揺れてやさしい人を恋う和歌山市	ばんざいのポーズ蛙も定年か結び目に想いがゆれている絆
市	等 安	井	福	
田	奇 田	上	井	
鈍	 志	照	桂	
舟	津	子	香	
大レンターます十二月まで練って見る校長が楷書のような話する 婆さんと娘は俺を馬鹿にする 公園のいつもの椅子で待っている のとり言老人ホームの夜が更ける 家の灯をみんな灯してなお孤独 主義主張保護色にして世を渡り	通る猫と目が会う猫嫌い 通る猫と目が会う猫嫌い の鯛に塩を	無事らしいけれど便りがなさすぎる	関猫に男は鈴をつけたがる真ん中に君が居るとは限らないプロポーズよせばいいのに四月馬鹿	陽だまりを追いかけてゆく冬の鉢
永	川	丸	満	笠
H	田	Ш	仲	嶋
俊	保	よし	き く 子	恵美子
子	蔵	津	子	子

寒いので手紙も来ない昨日今日なれぬ雪都会ため息つくばかりなれぬ雪都会ため息つくばかりコマーシャル半信半疑で買わされるコマーシャル半信半疑で買わされる。	飲み屋街ネズミぶくぶく良く太り下を見て人を和ます花もある下を見て人を和ます花もある運命に暗示をかける虹の色	肩書きのついた名刺を焼き捨てる チョコくれた女の尻に敷かれてる がある猫撫で声の姉の顔 に動かれてる に動かれてる	縄電車一人転んで笛が鳴るめし惚け妻に小遣い貰ている格の真ん中に来て気が重くなるなと孝の本出番を待っている	ぬくもりのさめたあなたにしがみつきあの声に骨の髄まで吸い取られ中之島私の過去を知りつくし、似りズのような女も意地で生き紙クズのような女も意地で生き
福栗	萩	鈴	古	広
間谷	谷	木	永	田
芳 春	ま	良	伊三	小
枝 子	8	征		菊
孫 早留守かたった。 大人 諸 口	打帰天話	妻 ハ 爪 の の か 艶 を	デ猟省智	積雪 恋 御 雪 士 出 て
た姑の仕草にいつか染み しら一応ブザーを押してみる は行かぬ夫の服選び 寝屋川市	れてから知る妻のれてから知る星の	守継解きのし残し	ランス急に若返区の札は鳥にもの色なく反省会	に精一杯の竹の愛 に精一杯の竹の愛 に精一杯の竹の愛 新潟県
祖母ちゃんもうギブアッからもれる台所寝屋川からもれる台所寝屋川の仕草にいつか染み	てから知る妻の位置まで箸と待たされるまので	展して春を待つ残して春を待つのして軽くなり	ス急に若返るから困る 人間 おいましん スカー 年を無沙汰する	林の竹の愛 がも見ず父米寿 がも見ず父米寿
祖母ちゃんもうギブアップがらもれる台所寝屋川市がらもれる台所寝屋川市のは草にいつか染み	こから知る妻の位置 まで箸と待たされる まで箸と待たされる	展して春を待つといり、別れ白く振るとい別れ白く振るといりであるが、といいのでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	ス急に若返るから困り ス急に若返るから困り 一年を無沙汰する	林の竹の愛 がも見ず父米寿 がも見ず父米寿
祖母ちゃんもうギブアップ 行かぬ夫の服選び にいつか染み	このでは、	解きをする台所 尾崎市 児 返して軽くなり	ス急に若返るから困り 出雲市 落 不急に若返るから困り	林の竹の愛 城も見ず父米寿 切も見ず父米寿

まろやかな老師二人と語る幸テレビ見て一人居の女高笑い姫路市	世辞という不快指数にむせかえる	ここいらが潮時やろか笑ろてみせ	ストレスが溜って鎖が干切れそう	旗色が悪そう補聴器外しとこ	兵庫県	春雷が今年の豊年しかと告げ	化粧廻しの紋様殿に叱られる	反対に曲った南天生かし生け	白砂青松虹の松原わが誇り	唐津市	よく切れるナイフを研いでいる美人	忠告が忘れた頃に効いてくる	下敷の傷みへ嘘など書けません	振り出しに戻る釣書を書き直す	和歌山市	コーヒーの香りを盗む一人旅	ランドセルひょいひょい歩く一年生	さくらさくら一年生という笑顔	春だものねないしょ話が楽しいよ	竹原市	孫の話させればきりのない上司	煽てては操縦すると猪口才な	木守り柿鳩が食べてる雉子鳩が
人					脇					浜					寺					岩			
見					田					本					田					本			
翠					米					ち					裕					笑			
記					朝					ょ					美					子			
孫だけはきちんとくれるチョコレート顔出せば向いの犬も顔を出しどれが本音女の話見栄と卑下	八尾市 宮 崎 シマ子	寒い夜水道局の広報車	サラエボの聖火は雪によく映える	霜の上雀落書きして帰り	ふたり連れお化け屋敷へ吸いこまれ	尼崎市 矢 萩 貞 子	福耳だそれで大声だすのかね	嬉しさは手塩にかけた紅梅ひらく	日めくりは一日ずつの春を待つ	名画展ときめくような絵に出会い	大阪市 古 川 美津江	これだけは自分で磨く優勝杯	盆栽を話題にしてる屠蘇きげん	夕焼けの中でふってる小さな手	お話がすみ安心して孫眠る	寝屋川市 堀 江 光 子	春が来たラインダンスの揃うこと	冬の海流れよるもの何もなし	風邪引いた上司がやさしくなっている	時計屋は自分の好きな時計見る	守口市 森 川 まさお	薬漬けにされるがいやで葛根湯	雨宿り宿場思わすあぶり餅

止り木で曲げた心を悔いている	和歌山市	書き出しに恋しいとある古手紙	青年に任す一番きつい役	凧あげる子に寒さなどない荒日	羽曳野市	その日から洗濯物がぶら下り	ドレミファと今年も氷柱垂る社宅	この女と居て残高がゼロとなる	弘前市	受話器置く夜のしじまがもどります	紙吹雪舞って一組結ばれる	粉雪舞う友と逢瀬の柚子の郷	高石市	たてまえも本音も知っている総理	どうしても許せぬ記事が今日もある	まだまだと稼ぐ気持が早寝させ	鳴門市	ハンカチでねずみを折って待っている	運転手の顔をうかがう無料パス	笹舟のここから先は波まかせ	尼崎市・	嫁の荷を路地の雀が値踏みする	根性悪みたいな雨に合うデート	日曜をゆっくり漕いでる渡し舟	寝屋川市
	神				麻				田				浅				八				大				立。
	平				野				中				野				木				江				床
	狂				幽								房				芳				かね				晴
	虎				玄				叶				子				水				子				風
それぞれの口調で電話かけくる子	ごめんねとなんとも素直憎めない	涙ひとすじ嬉しいとも悲しいとも	和歌山県	約束をしてから肩がこりはじめ	おもしろい夫婦と言われて仲が良い	天牛で織田作の本買ってくる	羽曳野市	住宅の知識を積んでまだ買えず	インフレへ半端な貯金もて余し	街育ち銭湯に親しみ生い立ちね	大阪市	物言わぬ川柳ですね写真帳	妻という字に絡まれて動かれず	米量る日に三合の世帯でも	島根県	雪掻きの出来ぬ朝ほど寂しそう	寒の室暖かくする妻が居る	大雪が故郷らしくしてくれた	弘前市	不自然な愛にも素直に花は咲く	民衆の声はあぶくを立てるだけ	鬼ヶ島鬼のお城が多すぎる	岡山県	明日に向くだけが男の道標	風車口で回している孤独
			Ш				田				日				喜				真				松		
			田				中				阪				島				喜内				本		
			久				隆				秋				1				1.1				元		
			子				=				子				ブ				實				江		

所の鏡が噂選り分け	程外からの親切身に沁みる番の大きな欠伸見て通り	る十歩早いだけくのマントにくるむたぬ女秋波で悩殺	帯きりり女虫りの意也通す 不器用な夫婦で植える柿の種 福耳を信じ通した妻の影 福耳を信じ通した妻の影	光り漬物石に過去があり園を斜めに抜けて三角形園を斜めに抜けて三角形	りだから前ばかり見て母さん小さく成って可母さん小さく成って可	歳月が小石の波紋消した海美しい言葉で逃げた他人事
=	渡	佐	吉	松	田	佐
宫	辺	藤	JII	本	中ゆ	藤
山	伊	美	素		きさとう	令
久	津志	代子	美	郎	5	子
買物に千円札のねうちなさ象がめの島に生きぬく青い草懐石のゆり根にあわい京の味	和な日何故か軍歌が聞えり前の事の言える嫁がい	銀世界小さなダルマ門にある銀世界小さなダルマ門にある	をごから屋寺さながらる英念舌 であれた孫が書いてるパパの笑顔 であれた孫が書いてるパパの笑顔 が原市	お年玉見せあい満足したらしいお年玉見せあい満足したらしい	祝う予算は先に取りも失せて童顔よみがえる	人生を生きぬく妻がそばにいる一日の疲れ知ってる靴をぬぐ
	東	飯	石	索	森	結
	田	森	原	ιŢī	Щ	城
	文	泰	淑	よ し 子	春	君
	子	世	子	子	子	子

父さんの誕生日だろう子の電話 雪国のゆきはくらしの中で降り 雪型でいつも気苦労抱いている 鳥取県	粗大ごみひどいよ僕は資源ごみ嫁姑川柳になると弾みだす。三輪山を拝んで我家の朝が来る桜井市	子の進む自信へ歩幅そえてやり 関状から跳ねてでそうなこまねずみ のでの袋へ入れてすて	込み入った話にお茶の冷えたままハンカチを乗せて女の崩す膝灰皿はないかと客に見廻され	病窓の視野の街並みな憶え石鹼がすり減り女肌匂う西宮市	温かい風が待ってるネオン街病んだ時ふとこれまでかと思う夜火吹竹持つおしんに亡母をふと思うの山県
古 武	前	矢	後	草	千
Н Н	吅	野	安	XIJ	原
比 照呂		Ш	静	鲢	理
子 子	恵子	人	香	駄	恵
着ぶくれて肩がこりますサローを表が入れて肩がこりますから見事に嘘が言え	雪め、光でで、	長生きをしよう月まで長生きをしよう月まで	中曽根の理路整然が気にほかほかの弁当売れて主	都会に負け故郷で勤都会に負け故郷で勤いる。	屋から一足早い舂を寝かせさあて家
1も喋らされを引き 岡山県	波往く 水戸市	にいる苦労 にいる苦労	気にいらず 高知県 高知県	で勤めるパチンコ屋芸に燃えるもの芸に外来です	ない ない ない ない ない ない でい でい でい でい でい でい でい でい でい で
ンパ山され	往くの旅水戸市上	いる苦労 いる苦労	の内輪みせ 扇知県 曽	燃えるも	買うがろが
ンパス	往くが旅水戸市	大和高田市 大和高田市	の内輪みせ 高知県 曽 我	めるパチンコ屋燃えるもの	買う 薄ひろげたり 西宮市
ンパス戸	往く水戸市上鈴	大和高田市 岸	の内輪みせ 扇知県 曽	めるパチンコ屋燃えるもの	買う 西宮市 朝

雪の朝一人一 美しい波紋で 美しい波紋で 手を病んでこ	どんぐり, 負け惜し、 白い杖音	山陰線一、 男湯へ帰っ	金のない式 内職へ小な	寡婦一人編 旅づかれカ	怒りっぽ 寒行の太神
一人一人を送り出し 一人一人を送り出し 一人一人を送り出し 「兵庫県	どんぐりがポトリ初冬の音で落ち負け惜しみ六法全書をまだめくり白い杖音と暮して五十年	陰線一と駅ごとに雪深く 雪に降りこめられたと骨休め 湯へ帰る合図の子が走る 大阪市	のない話お茶飲み良く笑い 職へ小休止する電話鳴り 陽と瞳が会いやる気湧いてくる 米子市	編針動かす部屋広しれは優しく握手するれは優しく握手する出雲市	っぽい父もヌードににっこりしの太鼓が知らせる寒の入り
野森	長	大	足	小	
瀬脇	尾	塚	立	玉	
昌 和	つか	節	由美	満	
子 子	た子	子	子	江	
時どきは負けてもくれる友を持つ をよならの文字に浮かんだ春の人 不精髭海の男にある魅力 羽曳野市 自信持つ男は隅の席にいる おいでおいでと戸を叩く	橋少しの未練にまだゆれて雪ショッピングカーにもチェンいの表来にまだゆれて	門出する桜吹雪が追ってくる背信を知って手術を決意する	オ媛のさすが隙ない話しぶり一日のドラマが聞ゆ壁一重	無造作に脱いだ度胸の良いポーズ企業進出アパートも建つ過疎の町開店の花輪議員の名も揃い	寂しさにインターホンを手にしてる
天	声り	植	森	江	北
崎	H	松		副	Щ
只	静	慶	敏	二	_
士	江	子	子	牛	進

	9					
春寒くストール派手に若返る冬を舞い春を招んでる牡丹雪病む人にのぞき加減の梅の花島根県	抗の平和難民救のなかに包めば	昼の月より近い富士今日見えず 覇道いま伊豆に散らばる苔の墓 修善寺方面旅行	肩書だけの父になる日を恐れ 樽樽はんなに漬物食えるのか	のとり者と知ってか世辞が多すぎる がとり者と知ってか世辞が多すぎる 節くれの指がかくせぬ宿浴衣	協と いな を なが持ち はと なが なが はい はい はい はい はい はい はい はい はい はい	
東	本		早	小	山	奥
原	吉		Щ	林	本	
福	宗		清	妻	玉	礼
子	光		生	子	恵	子
廃城にのぼって石に腰おろす 老人の惰性を叱る牡丹雪 の目が止まる	降ってくる火の粉払えば敵が出来障子開く叱言が先に飛んでくる	招かざる客追いはらう男下駄酔うたふりして本音をちらつかせからないの自由求める真っ裸	雑音は耳のくぼみに溜めておく句にひかれ出会えば人柄に尚惹かれ老いらくの美しい出会い妬く雀	地下街をやっと抜け出て深呼吸歯吹けど踊らぬ子らの頼もしさ	午後三時鏡台にらむ子連れ寡婦 共嫁ぎ子無し夫婦の道険し	芦屋市
板 里		杉	森	野	大	上
東本		本	Ш	々 口	H	田
倫 た か		つゆ	英	ゆう	4	佳
子 し			子	也	さと	秋

華やかな都会の夜が淋しそう	春よ来い小さな靴も待っている	守口市	氷柱に偽りの華埋めてある	どっと湧く笑いに存分咳も交ぜ	鳥取県	オランダの医学に日本救われる	勾玉や埴輪古墳は御陵かも	奈良朝の文化大仏殿遺す	吹田市	持ち駒を揃えたままの負将棋	天井に野心が写る眠れぬ夜	妥協してライバルと飲む温い酒	倉敷市	ソゾ汁の餅に句友の味が沁み	セーターを見本に貸したままで春	馴れている雪に見とれる積りよう	鳥取県	金の事になると焦点ぼけてくる	焦点を外れたとこで幸拾う	いつからか心の底で燃えている	岡山県	草疲れて八方美人に変身す	小染逝く洒落にもならぬオチつけて	陽だまりに寄れば赤子も伸びをする
		中			羽津				横				赤				福				=			
		原			川				Щ				沢				田				宗			
		好			公				青				沢の				あや				吟			
		恵			乃				果				藤				子				平			
高知市	酒ぐせの悪い男に先酔われ	蜜蜂が造花に色気出している	和歌山市	戦争放棄玩具売り場に武器が増え	耳成山の裾まで都会がおしよせる	大阪市	宴会へ酔わぬが一人恐しい	青き僧明日の野球に出る話	川西市	恋人はないが義理チョコ買うて来る	喪服のポケットにある核ボタン	大阪市	忙しい時の亭主は粗大ごみ	ほのぼのと母が自慢の粥の湯気	大阪市	お年玉やって子供に値ぶみされ	人の目を背中に感じている落目	岡山県	あらそいのなりゆき猫が見た部屋の隅	つぶやきの本音を風が聞いており	兵庫県	吾が恋へ半吉と出た初詣	ひとりものズボンの裾に塵を貯め	守口市
北			玉			田			野			上			Щ			行	rea		円			結
Щ			井			中			村			田			原			本			増			城
竹			豊.			節			静			柳			章			3			貞			敏
萌			太			子			雄			影			久			わえ			子			夫

着ぶくれで医師は聴診待たされる	大阪市	鉛筆で書いて母から召集状	山本有三をもう若者は知らず	大阪市	地吹雪で腹の底から冷えて来る	ダンプカー今朝も雪山置いて行く	青森県	新車買う心子供に似て嬉し	井の蛙それでも小さな空は見え	出雲市	懐かしのメロディー心の傷に触れ	雪知らぬ鉢の梅だけ早い春	岡山県	ジョーカーが親子の仲もつ冬の夜	教養をカルチャーセンターへ買いにい	神戸市	退院へスリッパの音弾み出し	盗み読む気配へ嘘の日記書く	和歌山市	北国に一人住む母呼ぶ切符	詫びるのも叱られるのも母の役	岡山県	お若いとまるく言われて気をゆるす	六十年瞼に溜めたネガを選る
	Ш			堀			波			竹			池		<	岸			桜			伏		
	脇			П			た			治			田						井			見		
	正			欣			だ			ちか			#			脩			千			すみ		
	之			-			お			L			仙			_			秀			れ		
待つあいまミス行員を選ってみる		吹田市	歯にしみる水で五色の薬飲む	他人ではすませぬ義理がからみつき	守口市	志立てて都会で皿洗う	手を入れて子の描く絵を駄目にする	大阪市	野仏に花一輪のたのみごと	野仏は伏目で恋路見てなさる	大阪市	ブレーキがきかぬ女の長話	皮算用はずれて悔いがのこるだけ	鳥取県	豪邸の門があいている何かある	お歳暮の鮭も二度目はもてあまし	箕面市	静寂に慣れて心を洗う旅	伝説と民話が眠るダムの底	和歌山市	夫が病みリズムが狂うている家計	明るさですぐにとけこむ転校児	和歌山県	案の定受話器の向うカゼの声
		西			長			大			渡			松			坪			Щ			森	
		岡			谷川			倉			部			本			H]1]			-	
					11			圭			さと			み			紅			克			三枝	
		豊			司			介			と美			をき			葉			子			子	

いまの時間どうしているかと社を思ういまボクのゆとりは窓に陽が当る機原市	幻想か森林浴のエァロビクス老いの話題ゆきつくところ安楽死大阪市	子育ての娘妻と同じ面かぶるはしたない話聞くのも世渡りか大阪市	日曜日することのない淋しさよ都会でのその日暮しに故郷を恋う和歌山県	縦横の糸が織りなす詩の友あっさりと言われて少し拍子ぬけ島根県	不景気へあの手この手のチラシ攻め流氷が見たい道北無人駅泉佐野市	かす汁のおかわり過ぎて酔わされる我が家にも潤年生まれが一人居り守口市	埋立に雑草一本冬枯れず・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
武西	白	北	西	堀	真	岸	大
田 本	石	山	村	江	崎	野	ı
帆 保		悟	重	百	浪速	+	静
雀 夫	潔	郎	彦	代	子	3	子
還暦になると打算が消えてゆく 年金で晩酌一本それでよし 大阪市 大阪市	ハイヒール階段昇るに知恵がありマナーにも色々あってヤァー一語	逃腰の男に煙草の火をつける 句会でもポケットベル鳴る奴がいる	めでたさのフラッシュ浴びて初仕事一年の計も振舞酒で酔い	大恐い妻に付添い回覧板を立ちのロードマップが遺書と成り	連日のしばれ心も鍛えられ常識の無い女でも色気あり	愚痴言わぬ小指だなやみ聞いてやる腰伸してもう一きばりきばらねば	笑わして余韻に逃げの策があるコーヒーを搔きまぜ視線にある思い
稲	長	松	松	前	Ш	島	藤
本	岡	本	下	田	П	田	瀬
凡	居	た だ	蕉	広	高	昭	比沙
子	太	Ĺ	路路	幸	明	治	子

株へくる孫は対立とは別に おみくじと相撲の星は白がいい 島根県	4	親娘して同じ買物してかえり殺人鬼ぞっとするほど泥を吐きな人鬼ぞっとするほど泥を吐き大阪市	「手 らな	自分との戦いきびしく今日を生き 自分との戦いきびしく今日を生き 福は内妻にレールが敷いてあり 手造りの茶碗が待ってる春炬燵 唐津市 コーヒーの香り息子と認め合う
高	山	野	前 松	松 北
尾	本 本	H	山 尾	高川
よ し	争 炉	君	と み 右	
子	子 斉	枝	え 子	子 子
************************************	雪園の雪ふる友のまどいかな今日此の日会社平常我定年最行強盗もう反応の無い茶の間	だんだんに妻の白髪が気にかかり齢だけは聞かれぬ人にまた出会い	年費が表質元気かとはうれし年質が表質元気があるは、兵庫県北新地昔の面かげ何もなく兵庫県では、大庫県のでは、大庫県のでは、大庫県のでは、大庫県のでは、大阪のではないが、大阪のではないのでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のではないのでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のではないのではないのでは、大阪のではないのでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のでは、大阪のではな	八尾市 戸籍からみんな脱け出て一人ぼち 犯罪は推理作家の知恵を借り 島根県 値上げならお酒をやめて焼酎だ 雪道を往診の医師さりげなく ま成だまたようによった。
豆宮	権	塩 /	小	岡 園 葛
原本	安	田	用 用	Ш Щ
千 佳 代 女	達	新	幸雅	すせ幸
代 女 女 男	郎	郎	泉 子	れ似子

常備薬亡父の棺に入れたとて 兵庫県 奥 野 テ ル	降灰の信号もある桜島 新宮市 船 越 正		大阪市 平井 露 芳吹き曝し水子地蔵も寒の入り	フインヤソニオッてら髪と臭いでみられ、山 凡 太	ストーブへ遊んだ尻っぽ温める初対面見合は親も子も疲れ	広島市 望 月 晴 彦	離婚という言葉を武器にする女アメリカの大豆が鬼打つ節分祭	大阪市 町 田 竜 子	シャツぬいで空気の旨い秋日和客長居箒を立てる箒なし	八尾市 椎 尾 公 子	へりくつに論理を曲げた小胆者 冴え切った時の思いは行き過ぎる	岡山県 笹 井 小安芸	いま電話宅急便がもう届き腕白をほこりに話す孫の守
ねむれないよるがとってもたいくつだてんごくのでんわばんごうしりたいな(七さい)	《ジュニアの部》 米子市 寺 沢 たかし	幼稚園一日はやく豆を撒く手毬髷結うてくれたはおっしょはん	まぎり絵の友を集める雪が降り 林 勇	今年 つ言の舌だってない。 島根県 田 中 ヒデ	新聞よりバーゲンちらし先に見る床の間のねずみ見ている穴ねずみ	藤井寺市 楠 昭	手を洗う少女セッケンをまず洗い害虫と思えば殺し易かろう	豊市 小 林 一	ネクタイを結んで今日も満員車容態を口あけさせて聞く歯科医	今治市 和 田	玉ねぎが泣かす夕べの台所張り込みの図星が冴える宵あかり	出雲市 小白金 房	書き初めに幸と書く太い筆針供養習い娘さんの詩がある

帖

橘高 薫風 選

演技力税務署を出て反省し 御自愛を祈ると友の計を知らす 大阪市 高 西 橋 森 千万子 花 村

断りを男英語で軽く言う 松原市

横顔に戻らぬ愛と知る別れ

堺市

爪先から静かに沈む冬の風呂 佐 藤

藤

子

此れまでと思う切符を買い続け

父のない履歴を母が刷っていた 111 崎

秋

女

されど母あり履歴書に母と書く バレンタイン手軽にチョコレ 笠岡市 ートもらい 遠

重患の尚失わぬ笑顔かな

吹雪五日さながら死闘修羅羅刹 吹雪五日米櫃だけは死守をする 青森市 藤 甲 吉

雑用のどれも大事な旅支度 百枚の質状だあれも泣いていな 米子市 木 Ŧ 代

> ずいぶんながい付合いがあるさつまいも 春大根お前も苦労したそうな 大阪市 出 智

水芭蕉野道に甘い灯をともす ころころとこけしの笑う雪の町 米子市 瑞 枝

行き止まり水菜畠を戻るなり 西宮市 H みつ子

十二階窓から送る友の影

あどけない仕草で首を横に振る

中だるみしただけでした酒の量 豊中市 中

定年になっても埋まるカレンダー

へそくりを勝手に見るなオンライン

賽銭の千円札は音がせぬ

京都市 松 Ш 杜 的

今治市 矢 野 佳 重

間違うても両手で握手などしない 近江八幡市 前 III 千賀子

白い花ほとけも寒に耐えている 弘前市 H 中

灰皿に積みあげられた世界観 なつかしい駅名やがて見える墓 米子市

二十一世紀影絵はずんべら坊になる 名古屋市 越 村 枯

和歌山市 福 本 英 子

IE. 坊

岡山県 居 耕 花

色に徹して余生楽しまん

美しい人だと花が言うだろか

米子市 寺 沢 みど里

11

荒

介

梢

天仰ぐ雪だるまをば作りけ 寝屋川市 n 柴

H

英壬子

幸

子

切れ味が良過ぎ痛みもしない嘘 和歌山市 唐津市 中 前 尾 H まゆ 広

逃げ道をなくし一本の樹にのぼる 八尾市 高 橋 夕

花

2

三月の窓にこころが還りくる 和歌山市 西 幸

聖母像のわたしを詰る御目元 西宮市 春 城 年 代

言うことがあるか埴輪のつぶらな目 富田林市 慶 子

風邪で寝て日頃聞こえぬ音を聞 吹田市 横 Ш 青 果

父と来た外食やはり寿司にする

病のリズム崩さぬ朝のパン 大阪市 Ŀ 田 柳 影

川西市 野 村 静 雄

艶やかに少し乱れるように酌ぐ 寝屋川市 4 松 かすみ

豆球で充分読めたラブレター

滅入るとき紙風船の皺深む 平田市 久 家 代仕男

寒い朝鉄鋼労連妥結する 島根県 小 砂 白

汀

松江市 福 間 芳

枝

一度返事するなと犬が叱られる

雪山で男は大声あげてくる 岡山県 原 理 恵

兵庫県 野々口 ゆう也

000 0000 0000	伊丹市 樫 谷 寿 馬 牡	陽だまりに仏の在す童唄	唐津市 松 高 多々子 レ	三羽まで数え雀に逃げられる	唐津市 仁 部 四 郎 昇	口に入れ時蘇るチョコレート	谷まさ	燃えるもの沈めて輝く古稀の顔	尼崎市 伊藤春子	漫画読む男笑わぬ髭がある	月原宵明	起承転結転という字はおもしろい	岩文衛	雪雲の動かぬあたり老母が居る	嶋 恵美子		吉川寿美		野あやめ	てっぺんに咲いて椿の人みしり	岡山市 川 端 柳 子 道	一日の思い残さず熱い風呂	寝屋川市 堀 江 光 子 谁	お互いの主張ゆずらぬ波頭	晴子	数珠たぐる亡母と語っているように	田鶴	入試すみ大きくはずむ春のまり	部さと美	
岡山県 公 本 元		*子市 菅 井 と	レッカーにぶらさがってる冬の雲	城	昇進の梯子は何時も揺れている	大阪市 川 原 章	ながいながい話の終りも近づきぬ	島根県 松 本 文	何もかもつまくゆきそう雪解ける	富田林市 藤 田 泰	太陽をにらめば涙すぐ乾く	島根県堀江正	朱の文字を墓に刻んで迷い出し	高知市 赤 川 菊	深ぶかと下げた頭がする謀反	森田	わたしへの挑戦筆を太くする	米子市 野 坂 な	仲違いどちらも明日を待っている	高知県 曽我部	道に落ち何時まで光る一円貨	高知市 北 川 竹	進呈の粗品が切れて客も切れ	和歌山市 桜 井 千	泥舟にのって素直に裁かれる	和歌山市 松 原 寿	金相場で儲けましたと四月馬鹿	吹田市 西川景	福助のような耳して浪費癖	田崎
工春の花まとり反威為楽とや	和歌山	とも子 友は友師は師と睦む牡丹雪	吹田市 茂	武庫坊 愛憎のしこりもいつか灰となる	大阪市 江	久 抱きあげて空の広さを見と分ち	島根県木	子 大陸を戦盲いじらしいほどに恋う	島根県 堀	子 ルンルンも国防色も同じ青春	唐津市 久	朗ジャズを聞く夫の顔に陰がない	守口市 結	野	高槻市 梁	カズエ カットグラスに琥珀の酒が美しい	島根県・榊	2	大阪市 中	裕燃えつきる自覚の炎かきたてる	広島市 望	萌	藤井寺市 赤	秀ニン月の寒さ身にしむ多喜二の忌	羽曳野市 田	子	大阪市 松	子赤旗を振った昔も年金者	大阪市 長	b
	山凡太		見よ志子		城修史		村はじめ)	江 芳 子		保正敏		城君		川吉	V 1	原秀		西兼治		月晴彦		木和子	心	中隆		尾 柳右子		岡周太	

戻りたい若さに妻が嫌と言う 東大阪市 市 場 東大阪市 市 場 東大阪市 市 場 高の気分のつもりへイタクシー 最高の気分のつもりへイタクシー 最高の気分のつもりへイタクシー 場高の気分のつもりへイタクシー 場高の気分のつもりへイタクシー 場高の気分のつもりへイタクシー 場門市 八 木 橋一つ渡ると故郷過疎のまま 大阪市東区馬場町3―13 大阪市東区馬場町3―13 大阪が送局 "さわやか広 大阪があり、 19 ラジオ第 発表 4月29日 (日) ラジオ第 発表 4月29日 (日) ラジオ第	※ 三市 上鈴木 春 枝 巻無く暮れて日記の乱れなし 関東市 行 天 千 代 効き日雪食べた事思いつつ 大阪市 上江冽 勝 子足もとの乱れ絵になる雪の景 富知県 小 沢 幸 泉 キリストの顔に涙がまた浮かび 出雲市 竹 治 ちかし優しさを子には十年後でやり 岡山県 嘉 数 兆代質 でルートレーン窓を閉して走りぬけ 吹田市 西 岡 豊中市 満 仲 きく子 をの海光と影のモノトーン 豊中市 満 仲 きく子 を笛が鳴れば駆け来る子ども達 まず れ 山 よし津 まず かけ から かし ない雑草にも春はくる 吹田市 要 谷 春 子 でルートレーン窓を閉して走りぬけ 吹田市 要 谷 春 子 でがられば駆け来る子ども達 まず れ 山 よし津 まず かけ お かし まず ないのに他人の裏を覗き見る 豊中市 満 仲 きく子 を留か鳴れば駆け来る子ども達 は よし津 まず かけ お ない 本日市 地 様 子 を まず から ない まだ かい といった いった から から から いった といった は いった といった といった から から は いった といった といった は しょう は は しょう は は しょう は は しょう は は しょう は は しょう は しょう は しょう は は は は は は は は は は は は は は は は は は は	田 田 正 古 大 吉 浦 長 直 八 八 八 八 八 八 八 大 大 吉 浦 長 大 一 野 塚 上 林 田 野 野 の の の の の の の の の の の の の	建国祭世紀のばせば桜散る 島取県 林 悲しくて笑い上戸の面被る 守口市 岸 日の恵み今日は小鳥も鳴いて居る 日の恵み今日は小鳥も鳴いて居る 田 一円でいいから欲しい夫の声 岡山東 小 大びて来た独楽だが僕に似合う妻 吹田市 井 上 懸かしい惰性ではない夫婦老い 愛媛県 八 塚 遭難者だけが笑っている写真 岡山県 小 林 ちびて来た独楽だが僕に似合う妻 吹田市 井 上 の面裏 八 塚 連難者だけが笑っている写真 岡山県 市 語 田 生きている証がしみる寒の水 大阪市 大 塚 万燈籠明りに人皆春想う 室屋里市 江 口 青年の背のびを笑う木の根っこっ 青年の背のびを笑う木の根っこっ
思春期の迷いためてる日記帳 桜井市 前 山松くもりを一番乗りのつくしんぼ 桜井市 前 山松 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	孫を抱く戦火くぐった過去がある 大阪市 川 口 弘 生おっさんと呼ばれ落ち込むパブの隅 大阪市 川 口 弘 失 エキスだけ飲ますテレビのコマーシャル	堕 熊 はつ 駄 生 絵	雪しんしん足跡を忘れて来 鳥取市 森 田耳少しとおく生煮え呑んでいる 鳥取市 森 田

橘高薫風宛(ハガキに3句) 豊中市中桜塚三丁目13―15

ZHK川柳募集

内 緒」選者橋高薫風

大阪放送局"さわやか広場。係 大阪市東区馬場町3-43NHK 4月10日 (ハガキに三句以内)

ルが、さわやか広場に変ります。 午前10時から 4月29日 (日) ラジオ第一放送

美

没食子

和歌山市 山 川 克

子

鳴門市 八 木 芳 水

美恵子

賀

美代

只士



足二本いともきれいに車降り

事に捉えた佳品で、句の構成、特に「足二本」 れるという。近頃の女のコは長身でスリムな の出だしに非凡なものがある。 プロポーションになったが、この足の美を美 真の男には男が惚れ、真の美人には女が惚

討ち死にの形山茶花朱をこぼす

教えられるものがある。 んならではの卓越した表現、その他の句にも 山茶花の散る様を、討ち死にとは、鱗魚さ 鱗魚

離れてみると妻がひたひた満ちてくる

芳仙

重なものであることを思い知らされる。 と、改めてその存在価値がかけ替えのない貴 気のごとき妻だが、いざ病気入院でもされる 無事平穏に暮らして居れば、水か空

温室を出れば翔べない春の蝶

鋭い。この風刺を大切にされたい。 まさに今の過保護時代の病める世相を衝いて 春に翔べない蝶に育てたのは一体誰なのか。

逃げられる距離にいるから石を投げ

も秘めているのが人間の一面であろう。 うろうろしている相手を、冷たい目でニヤリ ニヤリと面白そうに見ている嗜虐性を多少と 打ちようがない。しかもそれに悩まされて、 どこから出たか解らぬ中傷、デマには手の 借りものの白さへとても気を使い 人間の本質にズバリ迫る佳吟である。

合など借着することも間々ある筈である。 るものでないので、つい友人などから急ぐ場 白というニュアンスがあるから、めったに着 摺り減る程のものであろう。この白は式服の 感である。しかも借りものとあれば、神経も 白はまことにケッペキな色で、すこぶる敏

元旦の鏡の中の禿頭

ツハツ、諦観、自嘲、抱腹。 あまりの変り様にギョッー。そして、ハッハ のれも驚くほどの禿げ頭。予期してはいたが 身を清め、袷を正して、さて鏡を覗くと、お めでたい元朝である。せめて今朝だけでも 退職金耳よりな話ばかりくる

にはうといのが普通、 勤め人、特にきちょう面な人ほど金の運用 しかも退職金という、

> どう扱ってよいかとまどっているところを狙 まとまった金など持ったのは初めてのこと、 て夜となく昼となくうろつくのである。 って狼やジョーズ(ふか)どもが仮面をつけ 白鳥が赤に染まらず渡って来

どうしたことだ。赤が充満している筈のソビ のか、どうだ口惜しいか!と一矢。 こさぬとは、さすがにこれだけは手が出せぬ エトともあろうものが、うかつにも染めてよ シベリヤから渡って来る白鳥が純白なのは

参観のママさんガムを噛んでいる

だと、苦言を呈しているのがこの句。 れがおのれを見矢ってる証拠がこの句の通り 何しとる。大体、パパとかママとか呼ばせて いる親は寄るとさわると、こう貶すが、 その他で目に付いた句をあげてみました。 先生がなっとらん、学校が駄目、文部省は どこまでもついて行きたい背を送る

虚しさはやさしさばかり置いて逝き

掛けかえて大安さがしてみる暦

洗濯機ここの社宅になれた音

民子

税金で建てた役所が威圧する 羽津川公乃

熟年の男をためす花名刺

菊澤小松園氏を悼む



時昭59年2月22日 午後12時30分歿

西 尾

弔

辞

あなたは三年に近い闘病生活を耐えに耐え 謹んで、川柳塔社相談役故菊沢小松園さん

しすると、涙なくして申上げる言葉もありま て、春まだ浅き二月二十二日午後十二時半、 の御霊に哀しいお別れの言葉を申上げます。 水眠されました 歩でも歩きたかった、あなたの心情をお察 三年間の長い病床生活にベッドから下りて

せん。

となられました。 られたらと思うたのも束の間、遂に不帰の客 や娘さんのお手厚い看護にこのまま、よくな 再起の燭光も見ず、一時は車椅子で、奥さん とで病床につかれ、ベッドの人となり、遂に あなたは一昨々年五月、ふとした風邪がも それを想うと胸がつまります。 歩きたかったでしょう さぞかし歩きたかったでしょう。

泥棒の逃げた窓から首を出し

から、 ました。 夫婦もご一緒致しました。 が、あなた御夫妻で行かれる旅行には、私達 の人を明るくして、根っからの川柳人であり 剽軽で、頭の回転の早いジョークで常に周囲 白浜温泉や勝浦温泉や瀞八丁の内地の旅行 あなたとの旅行は数えたら限りありません というあなたの句がありますが、あなたは ハワイの海外の旅行もご一緒致しまし

> 更悔やんでおります。 ら、もっとお見舞を沢山しておいたらと、今 あなたが、こんなに早く逝かれるのだった

私も一句作りましたと付添さんが見せられた なおじいちゃんで気の毒な程ですというて、 最後でした。あの時、 昨年十二月二十九日にお見舞に上ったのが 付添さんが、大変素直

する程、綺麗な年輪のお顔でした。 あなたとの思い出は数限りなく、 その時、いぶし銀という言葉がぴったりと というのでした。 老いてなお素直な方よいぶし銀 山のよう

に湧いてきます。 それが、今ではみんな哀しい思い出につな

さいませ 表して致します。どうか心安らかにお眠り下 がってきました。 淋しい哀しいお別れを川柳塔同人一同を代

もつ一度、さようなら。 昭和五十九年二月二十四日 小松園さんさようなら。

川柳塔社主幹 西 尾 栞

忘れじな二月大師は哀しい日

先生と「たけはら」

山内静水

こんで戴いたものの、不肖の子であったこと 最初にお見舞に伺った時のことを思うと、す で車に乗せてもらっての見舞ではあったが、 も白柳先生の句碑除幕のため上阪した日であ り勝ちで、二回目お見舞に伺った日は奇しく でいたお方だった。 とっても掛替えのない大切な大切な父と仰い には厳しく訓導を受けていただけに、私達に ら五十五年五月までの長期間を、暖かく、時 ていた誌上作句教室を、昭和四十六年三月か やっぱり悲しい知らせは夢ではなかった。 往生を知らされた。かくて一夜が明けたが、 月二十二日夜半、栞主幹から小松園先生のご が悔まれてならない。 除幕式の模様を逐一ご報告申し上げて、よろ っかり生気を取り戻されていて、盛大だった った。除幕式終了後、柳友塩満敏氏のおかげ 思えば病床に就かれて三年余、お見舞も怠 先生には故清水白柳先生に教え導いて戴い 今月一日もおかげさまでと、床に入った二

二十四日の告別式には申訳なくも会を代表して私一人がお詣りしたが、菊花に囲まれたとのお顔は安らかと言うより、ご生前そのままの奇麗なお顔にお別れ出来たのが、せめての救いであった。

帰りの電車の都合で後髪を引かれる思いで

業に甘え車で大阪駅まで運んで戴いたが、道 葉に甘え車で大阪駅まで運んで戴いたが、道 再会出来たことも、柳縁浅からぬ両先生の奇 再会出来たことも、柳縁浅からぬ両先生の奇 小松園先生は、もう竹原には来て下さらな 小松園先生は、もう竹原には来て下さらないが、 ご洪恩に報ゆる道は只一つ、生かされている 限り川柳一筋に生き抜くことを誓います。 先生、私の座る蓮台をあけて待ってて下さ

合掌

小松園さんを偲ぶ

西 田 柳宏子

を心からお祈りします。

小松園さん。
小松園さん。
の声色を得意に、ざわめいている宴席で独りの声色を得意に、ざわめいている宴席で独りの声色を得意に、ざわめいている宴席で独りの声色を得意に、ざわめいている宴席で独り

プの中で万年青年と自他共に許していたスマ

白柳さん、満潮さん、雀踊子さん等グルー

列して小松園さんを偲ぶ一助にもと思う。

短冊、色紙を書いた小松園さん。 にみ、いつの間にか話題をリードしている小にみ、いつの間にか話題をリードしている小にみ、いつの間にか話題をリードしている小はった。

王子町の住居を白柳さんに新築してもらっ弁で、一ト言多い小松園さん。

能弁ではないが……柳話などでは咄々……

だった小松園さん。

晩年のベレー帽に少し猫背になり、ご商売

早朝からやって同宿の栞さんなど悩ませた小 た手指。それでいてヨガなど旅先の旅館でも 松園さん。軀が柔らかいのを自慢にしていた 柄長年針金と取り組んだ太短い、節高な曲っ 小松園さん……。

手造りの餅焼網、 も語りかけてくれるでしょう。 る想い出を引出して頂ければ幸いです。 していない思い出……皆さんが夫々にまつわ 本当に思いつくままの羅列で何等肉付けも 小松園さんの色紙、 湯豆腐用玉杓子がいつまで 短冊と共に小松園さん

若い頃の思い出

岩 本 雀踊子

さぞ小松園さんもつらかった事だろうと目頭 が熱くなる んの死を知らされた。三年余りの闘病生活、 一月二十三日夜電話で栞先生から小松園さ

の思いつきで白柳の清水次郎長、小松園の弁 柳の会をはじめる。ある年の句報に白柳さん 雀踊子外十名ほどで「若葉会」という名で川 支部として白柳、 白柳さんの故郷小松の「ねこ柳川柳社」の 小松園 満潮、友帆、 南柳

> やった。 天小僧、 で小松園さんが声色で弁天小僧の台詞をよく 雀踊子のターザン晩年川柳の旅など

ていることだろう。小松園さんやすらかに。 は白柳さんや南柳さんらと柳談に花を咲かせ 辞の小松園さんみずからの閉会を告げて今頃 た。その小松園さんも逝ってしまい、閉会の てくれ、ながいながいお付合いがつづいて来 小松園二人であった。それから何かと力づけ ていた私を川柳に引戻してくれたのも白柳と 戦争と子育て貧乏で川柳から二十年余り離れ に大和まで来てくれ、一晩宿で話し明かした。 軍応召の時には白柳さんと小松園さんが別れ よく入選されていた。昭和十七年七月私の海 ご存知のように小松園さんは物知りで達筆 色白の貴公子、どこの句会に出席しても

賞 席

題

あの世への旅は確かな足どりで 梅の香も待ち給わずに雲の峰 追悼句

野村太茂津

すぐそこの春待たずして巨星逝く など急きて君逝きませる雲の峰 紅梅も白梅も包うている浄土 愛惜の情 極楽でヨガの談義をしてるかも 閉会を見事飾ってゆく旅路 幽明を分かつとも 福本 堀端 中島 坂口 浦野 三男 正博

雪はその頃とぼけたように白く降る

作一郎

柳の恵み残して巨星逝く

尼崎 春 の川柳大会

2 3 昭和59年4月22日 日3時

ところ サンシビック尼崎 阪神尼崎駅より南西徒歩3分

題 刑

雨

光森 小出

灯

智子選

雲

灰

奥田 森田

白虎選

伊東

各題秀及び準秀句に呈賞 題 各題3句 締切2時

六百円(作品集呈 欠席投句拝辞

費

絶筆で残る質状をよみ返し やすらぎの雪しんしんと深くなり 天国の春を追いしや松の園 もう会えぬ面影心に刻み込む 主催 尼崎 Щ 柳 同好 野村 若柳 若宮 会 きみ

菊澤小松園50句

ピスト 丸か イヤヤ 顔 大 テンで涙 正 の冷 ように退社 H n ル の冴え かい 昭 のことに 手許 和 たさ肉親 を拭うほどに 天 女 きて手 夫婦 気 形 あ 0 を テン空 寄 入 M ル ただけのこと 0) 響 身づくろう 内 から # つけ 诵 n す 世 か

スト 婚 2 b 言 17 水 鳴 1] は てなお女には 0 決 " 3 な h ままに世 虫 7 ニュ 上と人 あ た体 お たり とは 何 前 下をゆ 間 定 1 ŋ 体 思 職 のう 間 間 知 0) 銭 あ 違 らず縋り 値 かい 10 段見 くり りあ な 込み H 帰 播 7

E

てし

独

酌

女

羽 6 櫃 ŋ

織

1+

るう

しろ 長

0

美

人

は は

0

履け 暇乞

か

足

0 ち 0

<

木

歌

友

h

き出

達

機 n 具 1 屋 死 ング 0 店曝 に化 今日 た虫 ズ しなる 辺 0 棹 が笑 n は L 緒 観 銭 出 Ž 世 0 要ら 82 1 掃 61 111 E Vi 出 か 3 \$2 n

b

ま たままに n

あ

る

と見えぬ

女とくぐる

きあ

お

か

す 80 洗

釣 金 浮

鐘 0 世 4

0

由

一来を聞

7

から鳴ら

6

n

役

陣

師

0

息

0

引き具

あ 絵 17

るうち

大阪

よい

ところ

漢俳

一新しい中国詩

田中正坊

「漢俳」についてふれている。 「漢俳」についてふれている。 と、昨年八月、『毎日新聞』が中れている」と、昨年八月、『毎日新聞』が中れている」と、昨年八月、『毎日新聞』が中国の雑誌『人民中国』に掲載された趙華氏の国の雑誌『人民中国』に掲載された趙華氏の上海市分会理事の朱実(瞿麦)が外友好協会上海市分会理事の朱実(瞿麦)が外友好協会上海市分会理事の朱実(瞿麦)が中国が大会で、「漢俳」についてふれている。

にけり」を「世間凡夫在 枯野頑石多」と十にけり」を「世間凡夫在 枯野頑石多」と十により、日本俳人協会訪中団、俳文学会訪中となり、日本俳人協会訪中団、俳文学会訪中となり、日本俳人協会訪中団、明文学会訪中で家の林林氏らが来日している。中国における俳句の研究はかなりすすんでおり、昨年七る俳句の研究はかなりすすんでおり、昨年七る俳句の研究はかなりすすんでおり、昨年七る作品を紹介し、付録に「古今俳句生作一たる作品を紹介し、付録に「古今俳句をあげると、東洋城の「世に人あり枯野頑石多」と十にけり」を「世間凡夫在 枯野頑石多」と十にけり」を「世間凡夫在 枯野頑石多」と十にけり」を「世間凡夫在 枯野頑石多」と十

題する「花色満天春 但願剪得一片雲

正不住的呼 瀬田的橋」と四・五・四の十 日本の短詩型文学である短歌・俳句の中国 引用された与謝野晶子の短歌と芭蕉・子規の引用された与謝野晶子の短歌と芭蕉・子規の引用された与謝野晶子の短歌と芭蕉・子規の引用されたりった。 そこでは、芭蕉の「五月韓句を訳している。 そこでは、芭蕉の中で語訳の歴史はさらに古く、鲁迅は厨川自村の中国学でまとめている。

されるや、 字一音がかならずしも意味をもたず、二音以 三字にまとめられている。 中国の『詩刊』誌や『人民日報』紙上に発表 中国式俳句、 五の定形で、 精神構造に目をむけるだけでなく、五・七・ した林林氏がはじめたのが、俳句の芸術性と こで戦前、早稲田大学に留学し、俳句を勉強 るが、俳句のもつ味わいは表現できない。そ 寂蟬声入岩石」と七字でおさまってしまう。 悲」、「閑かさや岩にしみいる蟬の声」も「静 味の内包量はずいぶんことなり、芭蕉の「び 上で一語となっている。したがって一字の意 の意味をもつが、多音節語の日本語では、 いと啼く尻声悲し夜の鹿」は「鹿鳴夜裏尾声 『詩刊』には、林林氏の「京都平安神宮」と 輪の美花」として大きな反響をまねいた。 これでおよその詩意はつたえることはでき 単音節語である中国語は、一字一音が一つ 「中国の文学界に新しく生まれた しかも漢詩としての脚韻をふむ つまり漢俳である。その習作が

> らんか」とでもなろうか。 もいて意訳すれば、「春の雲採りて衣をつく はなべ」など五句が掲載されている。この句、

漢詩は、古くは『詩経』から唐の李白・杜漢詩は、古くは『詩経』から唐の李白・杜成る詩であり、中国文学の女王として知識人に親しまれてきた。五言絶句・七言絶句のよに親しまれてきた。五言絶句・七言絶句のよに親しまれてきた。五言絶句・七言絶句のよに親しまれてきた。五言絶句・七言絶句のよいに、二十字・二十八字の短詩型もあり、日本でも七世紀の中ごろから明治時代まで、多本でも七世紀の中ごろから明治時代まで、多日では、中国でも日本でも、鑑賞はされても日本の伝統的な短詩型文学の一つである世行に刺激され、「漢俳」という新しいジャンルの詩となってよみがえったということができるだろう。

こととなれば、 と思うのである て正しい理解と認識を得られるにちがいない 民的な川柳は、 られていない。もしこれが中国に紹介される 源流とする川柳には、中国文学界の目はむけ 意味では、、人間詩』とみることができる。と 会をうたったものがよく知られており、 のもあるが、その多くは人間の心や人生・社 ころが、現状では俳句とおなじく俳諧をその もともと漢詩には、 自由な発想をもち、 漢俳を愛好する人たちによっ 自然の風景を詠んだも しかも庶 ある

香川酔々句集『光背』を読んで

大路 美幸

幸っ……別れるときは、母を失い、父と別れたときは、母を失い、父と別れたときは、母を失い、父と別れたときよりも悲しみは深かった。昭和五十八年九きよりも悲しみは深かった。昭和五十八年九月二十六日、遺句集となったそのゲラ刷りは月二十六日、遺句集となったそのゲラ刷りはられた。そのいきさつについては、西尾栞主られた。そのいきさつについては、西尾栞主がいる。

楽、獅子舞、修羅出土、など仏教又はそれよ名の「光背」、目次の女人高野、蛇皮線、催馬号に己が姿を予見したような句を発表した。の句は製本の段階で集録されているが、題号に己が姿を予見したような句を発表した。

猫の耳ピクリと動く花鋏サービス料分ったようで分らない

シャボン玉はぜ空間を無に還す

色即是空 流れの中に身をまかす

り至ることばを採用したのは、

香川酔々自身

小銭入れはたいてこけし連れ帰る 小銭入れはたいてこけし連れ帰る と連れて帰った。郷土玩具や、古良猫を見ると連れて帰った。郷土玩具や、古良猫を見ると連れて帰った。郷土玩具や、古良猫を見ると連れて帰った。

人間の壁をはずそう大ジョッキ酒好きの鬼が揃っている花野ギリギリに生きて詩心を持つ男

人間の壁をはずそう大ジョッキ 意味もなくマッチを灯す物思い 意味もなくマッチを灯す物思い 門柳のために閑職を選んだとうそぶく彼、 門柳のために閑職を選んだとうそぶく彼、 をに帰っても没の句が気になると思わずダイ をに帰っても没の句が気になると思わずダイ をに帰っても没の句が気になると思わずダイ ないを回した。「今夜の選ばなんや。アホと チャウカル」受話器を置いてマッチを灯した

真理があった。しかしそのことばの中に真理があった。しかしそのことばの中にとを言う男だった。しかしそのことばの中にとを言う男だった。しかしそのことばの中にとを言う男だった。しかしるのことばの中に

月明に打つべし華麗なる太鼓

俺の意志貫く俺の血が流れ 叩き売り見る織田作の懐手 業という賽の河原の石の数 業という賽の河原の石の数 しいと思うことは、例えそれが間違っていて しいと思うことは、例えそれが間違っていて

還らない父の迎え火浜で焚く母百句路郎・水府も母を恋い

長崎稲佐

ふるさとは遙か 外人墓地暮れる

れている人とは徹底してつき合った。 八つ当り出来ぬ仏の貌に会い み仏に女貧しき灯を贈る 火葬場の煙他人に見えてくる 吹車は奈良に住居を変えたこともあってか 地年は奈良に住居を変えたこともあってか 北の句や寺の句が多かった。後進の指導にも 力を尽した。しかし別れは早かった。どうか た尽した。しかし別れは早かった。どうか

光背」とちぎり絵

西川景子

あれは昨年六月、酔々先生が、大量の鼻血に驚かれた直後の事でした。 「この際思い切って句集を出そうと思う。 「この際思い切って句集を出そうと思う。 そこでお願いがあるのだが」と、句集のカッそこでお願いがあるのだが」と、句集のカットに、私のちぎり絵を取り入れたいので、協トに、私のちぎり絵を取り入れたいので、協力してほしいと言われたのです。私は即座に対している。

は今思いついた事ではない、以前から句集を

となく題名の「光背」にマッチしてると思わ

品を手にして、中央を行く雲水の後姿が、何

その内の一枚、晩秋の五十三次を描いた作

作る時は、カットにはちぎり絵を使おうと、 株めていたんだ」と、強く申されたのです。 私がそのわけはと聞きますと、先生は「去年 私がそのわけはと聞きますと、先生は「去年 私がそのわけはと聞きますと、先生は「去年 私がそのわけはと聞きますと、先生は「去年 をぎり絵の「おしどり」、それに引き続き作ってもらった「おひな様」、「菜の花」をみている いつか自分の句集を出す時には、絶対ちぎりいつか自分の句集を出す時には、絶対ちぎりいつか自分の句集を出す時には、絶対ちぎりいつか自分ので、きっと景子さんのちぎり絵も、句集の 中で映えると思うよ」と、遠くを見つめるようなまなざしで説明して下さったのです。 は先生のそんな熱意に絆されて、快く承諾したのでした。

それからの先生は、何かに憑かれたように 例年にない暑さと闘いながら、句集作りに専 念されていたようで、その疲れも手伝ったの か、お会いする度に目に見えてやせていかれ か、お会いする度に目に見えてやせていかれ をんなある日、カット用の花のちぎり絵を そんなある日、カット用の花のちぎり絵を 私の作品の中から選んでおられた先生が、見 数しにもこれを使いたいと、花以外のちぎり 絵を、二枚取り出されたのです。

知されておられたとしか思えてならないので知されておられたとしか思えてならないのでがよっています。それから二ヵ月足らずで、先生様子でした。それから二ヵ月足らずで、先生様子でした。それから二ヵ月足らずで、先生様子でした。それから二ヵ月足らずで、先生様子でしょうか。必はり先生はの誰が予測出来たでしょうか。やはり先生はの誰が予測出来たでしょうか。必んに「これはいい。これたのでしょうか。盛んに「これはいい。これたのでしょうか。盛んに「これはいい。これたのでしょうか。盛んに「これはいい。これたのでしょうか。

「光背」の中のちぎり絵、私には私なりの「光背」の中のちぎり絵、私には私なりのなれを、なだめたり、すかしたり、励ましたな私を、なだめたり、すかしたり、励ましたな私を、なだめたり、すかしたり、ないのです。

離々先生は私にとっては大恩人なのです。 その先生が突如として、五十三次ならぬ彼岸 くなりました。けれど私には「光背」を開く くなりました。けれど私には「光背」を開く と先生の声が聞えるのです。「頑張れよ」と。 として見えるのです。先生のいつものあの笑 顔が……。

懐かしい声が聞えてくる「光背」 景子のない、私の想い出そのものでもあるのです。 句集「光背」とちぎり絵、それはかけがえ

奥山 弥山人さんを 偲ぶ



斉 藤

三十四

て、

愕しました。先日、 と。病名は肝臓病でした。突然の知らせに驚 は二週間程で、 死去を知らされました。 の二月十二日の朝、 前日から病勢急変したとのこ 川柳句報を御届けに参り 東市民病院への入院 奥山弥山人さんの御

ようでした。 のは昭和五十二年秋で、故竹中会長の紹介の 応答なくて案じていました。 ましたが、御留守で再度電話しましたところ 奥山さんが東大阪川柳同好会に入会された 川柳の年季は相当なものと思われまし 年齢は七十歳ぐらいの上品な紳

入会早々の月例句会では天位入賞された

今日よりは四温に安き旅路かな

西尾

栞

窜

句

る句、 御愛用して頂いたことです。 当会の会長にと懇願しましたが辞退されまし 番印象と好感をいだいたのは、 は特別な交際はありませんでしたが、私が て去来します。毎月一回の句会のお付合いで た。が、その温顔は私の前に今なお彷彿とし た。人生経験豊富で物静かな態度、 七年余、句会には皆勤をつづけられていまし アタイの幾つかを交替で毎月の句会その他に 高潔な人格と温情は会員の信望厚く 私の作のル 人間味あ

られました。 多久志先生の紹介で55年5月川柳塔同人にな 奥山さんは大阪生れで現役時代は銀行にお 故若本多久志先生と御昵懇であったようで

葬送は誠に残念です。 りの方は少ないようでした。が、川柳同人句誌 ましたが、 勤めだったようでした。川柳塔同人になられ という喜寿の喜びに当る年にかなしき計報の には投句いただいていました。 月例句会には御出席なく 御冥福をお祈り致しま 行年七十七歲 顔見知

台

申 会

能」という謡や種々と趣味豊かな老先輩を得 ことを覚えています。 大変力強い人の入会を喜びました。 「天平の甍もつかぶ薪

遺 句

彼岸寺雪かきわけて急ぎ逝き 春温み弥陀が御前の句座急ぎ

桑原

奥

弥山

風はらみ金波に映える宝船

思いやりいたわりあって老夫婦 外は雪内に酒ありほたん鍋 雨やどり妻のパチンコつきはじめ 義太夫調の謡もある老人会

日中文芸セミナ 11 柳入門 教室 1

ところ 5 四月十・十七・二十四日 火曜日午後一時半~三時半

٢

日中文化センター 阪急梅田駅北口から北東一〇〇

極高 m·阪急北ビル4階 薫風

古今の名句鑑賞、

川柳のあゆみ

内講

丁五三〇 ・川柳のこころから作り方まで 一千円 (三回通し)

大阪市北区茶屋町一〇一六 日中友好協会大阪府連合会

電話 三七二一八一三一

課

武

右 近

中 舌 の 鋭 さ 刀 剣 に も 優 り 弁 舌 の 鋭 さ 刀 剣 に も 優 り ま舌は持つが一度も武器にせぬ 説得 へ 最 後 の 武器 と す る 涙 恋 で 負 け た 意識 が まだ残り ケ 棺 で 負 け た 意識 が まだ残り ラブレター今頃 妻の武器にせれ ー枚のメモライバルを陥す武器 に する 涙 恋 な まま けれ の メモライバルを陥す 武器 けた 立 響 と する 涙 恋 な まま けんの メモライバルを陥す 武器 けんの メモライバルを陥す 武器 けんの メモライバルを陥す 武器 けんの メモライバルを陥す こと と しかと書く まま かんしゅう こうしゅう は いっぱい かい こうしゅう いっぱい かい しょう は いっぱい かい しょう は いっぱい かい しょう は いっぱい かい しゅう は いっぱい かい しゅう は いっぱい かい また は いっぱい かい は いっぱい かい は いっぱい かい は いっぱい かい しょう は いっぱい かい は いっぱい は に は いっぱい は は いっぱい (嬌と話 心家は札 術武 東見 寸違 を武器に 涙を武 せて武器とする う力 売りまくり 武器になる する 赤木文雄 和子平々 代仕男 比呂志 軒 静 大楼 子風

針優 それなりの武器敢然と虫が死 泣く武器でミルクの時間知らされる 女ひとり生きる武器なら持って居る しさが武器とは誰も気がつかず の武器蜂は小さな城 に海が荒れて来る 守る 82 2 婦美子 可重〆

美

Ĺ

15

武

器

て

す

18

18

0

菜っ

葉

服

優

武器作る噂に海が荒れて来る 洗黙の何処かに武器が埋ってる 洗黙の何処かに武器が埋ってる 洗黙の何処かに武器が埋ってる 洗黙の何処かに武器が埋ってる 震の武器見えず聞えず逆わず しょう かい しょう はい 平和の 旗印言 論 を武器 に平和の旗印 があり しそう てる 道 つ絵郎 クタ子

保 母 き

色

0)

武器を神から与えられ

さんの

武

にもなった鯨

花武

0

て視野

狭くなる

う

0 から

木

綿

針

壇

1

\$ と却っ

包

2

棘の

武器があ

育三美志ひ

明男恵津で

冬将

重

迎

える

武

1=

綿

人

1

3

3.

2

ち

旅土産

娘に似たコケシよっている

軒太楼

期

父に似てきた

が不

快に

父そっ

くりな飲みっ

60

に似て

B

ラペ

ラとよく喋

似

理

英 子

選

像画

似過ぎて社長気に入らず 似てる知能をなすり合

に似る五

百

羅

漢

へ香をあ

n

子明住坊止彦

左利き

せず

公只弘

一士朗

あき子 実味言 無意識に書いても似てる父のくせ 餇 似 そっくりな声へデートの返事する 母 似 た手 物に少し似て つけ い顔 い主に似てるペットがほえたてる 10 似た老女の温 負 絵に腹を立ててるよく似 1 口刑事の勘が冴えてくる けた僕に似ている葱坊 がはに似 いたモンタージュ てきて い手に触れ 温い 居間 3 È 多々子 本蔭棒 カズエ 千景 肖像画 右母に 声までも似てきて義母と言い出器用な子どっちにも似ぬ左ば 母 宿 似連

た声

町と思うがちょった声に秘密喋っ

喋った電

と似すぎです

三弘泰

朗子さ

り父の

字に似た子の

便

似る勝気がつらくなってくる

の付け方亡妻に似てきた娘

れ添うて目許似てくる夫婦

ま 道晓

工武三百は商

点を武器にマイコン買わされる ずみから茶碗が武器となる事も

我が青春を踏

みにじり

ンピツを武器に生き抜く半生記

た男と見えぬ床に老い

与呂志 兼治郎

と癌防いで呉れる楯が

間戦の武器はチラ 武器持たぬ誓いの 関

はチラシの五色刷

虹倫

多賀子

武器 びたペン武器に世 取 だから 相に 和掴みた 挑 む記

った手

七面 女 -66 路

会

絶 7

ち 步

切

振

B 0

n

道 る鍬 0

白 な

い杖

京 克 枝

サリ髪流都地お都都

街で雪

母 馴

はまぶしい灯に迷い

雪の

ニュー

スを遠く聞

都

ーン都会の垢を海に捨て、会陽のない街がふえてくるへと割り込む切符握り締め

幸只木倫

会籍

会からトップモードで娘が戻り

代仕男 道三千代

とれ、星

都会消

えた娘を案じ

0 9

な

水で都会に住

80

X

老

42

峰

ついぶ

都

1

>

都会 1 슾

の水はにがかった

かった

郷や都

ıŁ 女

小 10

牙を隠れるな善

L 意

た都

0

スペンスドラマで迫まる都会の夜

カズエ

うず

<

都

てるから此処でも富士の名で呼ばれ

冬木ゆ

魚

父

0)

癖

2

0

ま

ま

父

0

歳

12

な

n

宵

明

服

かい

似

てる鼻が

似

7

V

3

新

生

児

あ

やの

8

1

娘

1

勝

気

て

絶

之

82

喧

会

両 JII 洋 17 選

望華大味 U 大都本年 ト 都 偽 田 畑 꽙 会の灯きれい過ぎたと土 名 会 捨 いに出した都会に娘 か 7 B て都会で地下の土を掘 平 気 へで住め 0 香 る大 処を取 40 7 が吹く 都会 生き 13 r) 恵美子 ゆう也 三五島 千佳泰 秀 働百ビ聳酸

平 士魚 灯 渡 0 n 下 鳥 都 12 鬼 会 3 0 天 風 を 使 \$ 置 10 V る 7

文

満津子 風 子々 大摩都憧酒東け憧栄顔 市れが西 んれ 光 たらんと造れて蝶は都 た仇都都 南 かつで 北わか 奈落か 会の闇 都か 0 花 それれ 会に生 を赦 0 都 灯がに都 会砂漠です す 都会の 会 0 UL 灯れす す 千美可元克寿キ 世 子 穂 住 江子 美 ミ

生いたちが似ている隙間かぜがき嫌いまでが似てくる夫婦箸がパパに似ているから出世おぼつかず似ていると女嗅いだり触ったり像に似たことがとても嫌いなあすなろう似たことがとても嫌いなあすなろう好見せる妻にうっかり似てならぬ給食で育って子らの舌が似る 大見せる妻にうっかり似てならぬ 付して 似 た 奴 ば か り 出 る 芋 畑 親に似て生れたくないブルドッグ似たことがとても嫌いなあすなろう 付している で の まが似る から 出 が に 似 た い る 猿の 私語 大気図は明日も似ている隙間かぜ

ゆ四 与佳正枯克宗公右 也郎志雲敏梢子光一近

似 父に似 不器

用

な母似で切れぬ花ばさみ

1

#

てるから好きですなんて失礼な

て世渡りが下手

世辞

近が下手

0

書く似顔にひげはちゃんとあり

座に

酔うて似

7

いる

靴

の多いこと

都 天 楼 0) 会 生の帰心が 付を 日も 1 万ド 舖 都 道 会 い空がない。 がの F 塵 を 吸 濡 篡 たかし 文子

関 万ルの立 次の 味の街 都 味方はしない都会の詩の夜景の下のスラム街街太陽燈がまた売れた行工に変しているのでのスラム街のビルを地下街みな繋ぎ 会 ルを地下に 暴 抜 1 で 口は 口は しな 水郎津

夢を 追 5 都会に 罠 から 仕 掛 け 6 n 宵 明

都 D 会 < 規不風

大 都 会 14 を 鬼 C L 7 か 之 す

-67

(海女の限界 高らかな喉笛よ) (校区外という限界を押しつける) 限界に喉笛ならし挑む海女 同 限界に喉笛ならし挑む海女 同	(守備範囲の限界知って吠えている) (限界なく飲んで肝炎もて余し) ・研はんい限定をして犬が吠え みつる ・研えに限りなく飲んだ酒を悔い ひろ子	(僧しみの限界家裁で判を押し) (手相見がわが身の不幸読み切れず) (手相見がわが身の不幸読み切れず) (鉄棒に顎がとどかぬ太鼓腹)	鉄棒に顎が上らぬ肥満体 高 明 (限界線サテ見つからず模索する) (限界線サテ見つからず模索する) 高 (限界線サテ見のからず模索する)	題 - 限 界 -	和步发室
(限界を越えず身のほど知っている)自尊心が限界と一騎討ち自尊心が限界と一騎討ちりほどを知って限界越えぬようりが限界とが開発と一騎討ち	限界で浮んだ顔に励まされ (わが知恵を信じ限界も信じてる) (精一杯励んで限界近づけず)	(限界を知る原船のいさきよさ) (限界の中程の輪でなごやかに 限界の中程の輪でなごやかに	(釣り合いの限界知って引きされる) 限界とかげ口を聞く三浪目 レフリーの目は限界を見逃さず) マリオネット保界を知る糸からむ (マリオネット糸の限界だけ踊り) 限界がきて風船はパンと破れ	到り合いがとれぬ限界遠慮する (科学者の夢は限界知らぬげに) 科学者の夢は限界知らぬげに)	限界が来ても捨てない求知心 (どもり出したぞ 限界に来たらしい (限界に来たか俄にどもり出し)
ま 同	久 同 子	爱	同 き 同 歌 子	等 同 柱	小 · · 紀 愛 雄
身体にも限界つくろい生きのびる(限界を知らないらしい母の愛)(限界を知らないらしい母の愛がある)でいるのである。	(限界を十年のばそう知恵しぼる) (限界を十年のばそう知恵しぼる) (限界を十年のばす工夫する	保界をのりきり明日の光見る 体力の限界万歩計に問い) (脚力の限界万歩計に問い)	(まれも時界ごれも時界で知り はかの限界特売場で知り は果てしなく続く さい字宙へのロマン果てしなく果てしなく) (宇宙へのロマン果てしなく果てしなく) (親切も限界越えた親切怖れられ は 1)を表すことをできます。これでは、 1)を表すった。 これでは、 1)を表する。 1)をままる。 1)を表する。 1)を表する。 1)を表する。 1)を表する。 1)をままる。 1)をままる。 1)をままる。 1)をままる。 1)をまる。 1)をままる。 1)をまる。 1)をままる。 1)をまる。 1)をままる。 1)をまる。 1)を	(大物も齢の限界には勝てず) (大物も齢の限界雪道に教えられ) (体力の限界雪道に教えられ)	大物も齢の限界逆えず (限界のほどよさ知った酒の味) (限界がわかった酒が旨くなり
声 一 子	よ 志 子	ふ同寿にみ	ち 同 ざくさ 同 ご 美	吉司子	サ ワ 子 同 し

	寿	限界の愛の嵐に負けておく	保夫	敗けたとは言わず体力の限界だよ
宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四題―刺激―4月20日締切(6月号発表)	司同	現界の齢免許証は書きかえず 年金の限界越えた物価高	司	(酉好きへ限界守れとはご無理)
	兼次郎	黒星の数限界を感じさせ	やすお	生命の限界伸ばす医の進歩
限界の二字切り捨てる愛一途	[ii]	もつ限界グラフが辿る下降線	9	(とことんの我慢のはてがまだ言えず
あなた知り限界に酔うシャボン玉 同	司	怒りの限界拳が震え出す	同	とことんの我慢限界まで来てよう言わず
	紀久子	子のためなら母は限界越えられる	理恵	長い春もつ限界とせかされる
<	同	棒グラフ限界かもの靴を履く		(定年と言われ限界とも言われ)
>	同	限界はまだまだ先の流す汗	妻子	限界は定年という名で呼ばれ
	山久	限界へかすかな光見えてくる		(見えそめた限界気力で押し流す)
■4月の常任理事会は1日(日)	同	限界線そろそろ下げる老いの知恵	同	見えて来た限界気力に蹴られてる
	同	お互いの限界知って共白髪	実	限界の囁き夕焼け美しい
企画中。詳細は追って発表の予定。	武水	コメカミがピクピク限界知っている		(限界を悟って余命をあたためる)
13	同	限界を悟り素直になった父	同	限界と知って余命を引きのばす
する信号作目(角ス丁)の同り打扇で、方	三男	限界だよと肝臓が喋り出し	芳水	限界を悟る男の身のこなし
★す動売山氏(熊本市)の司人住薦を了承。	同	限界の線を知らない子の遊び		(限界がありそう地球にも宇宙にも
氏より報告された。	あや子	宇宙遊泳夢の限界破られる	同	限界がある地球にも宇宙にも
河村瑞川氏の訃報(昨年12月2日没)が薫風	同	どうしたの君限界はまだまだよ	克子	限界と気付いてからの黙秘権
★哀しい知らせが重なるが路郎の弟子だった	幸泉	限界を越えて振り向く冬の街		(限界に来た多数党の低姿勢)
することに決まる(詳細は表紙裏に発表)。	同	奇麗どこもう限界で種が無い	同	多数党限界に来た低姿勢
園氏が亡くなられた。五月句会を追悼句会と	照子	捨て鉢か限界忘れグラス乾す	止止	勘忍の秒読みゼロで爆発し
★永らく入院療養中の本社相談役・薬澤小松		(買い上手値切る限界知っている)		(闘志満々限界なぞは知らぬげに)
〈諄題山に報告事項〉	同	買う方も値切る限界心得て	同	わが闘志限界なぞを知らぬげに
下力良· 尹李· 省生· 另女	柳右子	限界の息づかいする蛍光灯	昭治	限界を知らぬ僕です馬鹿みたい
1.18· 天美· 首臣· 电子		(限界へ八十翁の意気もえる)		(食養生の限界塩気夢に見る)
卯左子・与呂志・鬼遊・重人・	同	限界へ八十翁の焼く炎		(食養生の限界砂糖をなめたがり)
出席者=栗・薫風・水客・紫香・朝花・敏	勝美	限界へ挑む肘立て夢がある	同	食養生も
川林塔老常在玛事会(3月1日)		(脳味噌の限界私立で我慢する)	志津	限界を知ると肩の荷軽くなり
印答比	同	限界の頭脳そこいらの私立校		(心身の限界つくろい生きのびる)

柳塔社常任理事会(3月1日

柳 界 展

集録·板尾岳人

号)にて出発。 26分、会場へ。 4月9日立 阪発21時35分 観桜川柳大会へ4月7日大 江着6時24分。木次着8時 ■むらくも創刊35周年記念 11 (だいせん5 4月8日松 満春

月10日77回目の誕生日を迎 足は不自由ながら、ご無事 の療養生活を送っておられ 大手術を受けられ一ヵ年余 中島小石奥様は昨年2月 大体の日常生活が出 生々庵名誉会長も 3 年八十歳 が別れを惜しみました。 尾栞主幹他四十数名の同人 告別式が執り行なわれ、 され24日住吉区の一運寺で 園氏が2月22日午後12時30 帰阪21時頃の予定 分堺市の労災病院にて永眠 ■川柳塔社相談役菊沢小松 西

来るように恢復された。

えられ、

▽同人消息△

■鳥取川協新役員 で暮らしておられる。

川柳塔社同人関係

小林由多香

て逝去、行年九十一歳。 日大阪東成区の中本病院に に次の句碑が建てられた。 生路郎の門人で、去る52年 村氏は川柳雑誌時代の故麻 市民のため尽くされた。 ■河村瑞川氏が8年12月2 8月ふる里の菩提寺伝芳院 「鼻咽喉科医として大阪の 人と愛の人生見たり 河 建ち並んで、 にこやかに語りかけており 友達の句碑六十基が仲良く 小道の両側に、親愛なる柳 の多宝塔から桜園へ通じる 人であることを私は誇りと ■文化的である宝ものが存 しております。その蓮台寺 在している倉敷市児島の住 ▽お便り△ 散策の人達に

副会長

渡辺

常務理事

森田

露杖 熊生 洋々 独步

両川

11 11

奥谷

弘朗

11

石垣 清水

> 松下たつみ 月18日老衰のため96歳で死 去されました。謹悼 葬儀は8年12月4日豊中市 のご母堂岡田たけさんは2 ■藤村〆女さん(吹田市 刀根山の梅林寺で行われた

久恵峡見物 (バスにて)。 去。ご冥福を祈ります。 月15日老衰のため94歳で死 のご尊父松名定義さんは2 ■赤川菊野さん(高知県

問合せは大阪市大正区泉尾 塩満敏氏が指導に当られる 曜日開かれ、 3-9-16 (電06-55 14日から7月7日まで毎土 の川柳講習(前期)が4月 ■大阪市勤労婦人センター 4-5376) 本社常任理事

同所まで。

III 参加費 行く先 日 柳 で乗って残そう若桜線 59年4月22日 八頭郡若桜町 一〇〇〇円(鳥取~若桜間往復汽車 若桜線存続車中川柳大会 発表誌等含む

鳥取駅コンコースにて当日9時より開始 「ローカル ず 原辺崎 由多香 句 女 選選

題 当日、 各題2句 発車と同 す 時に2題発表

席

表 コース日程 彰 総合10位まで呈賞

鳥 9時58分(車中で作句 昼食、若桜町探訪 取 発~~~~~~ 10時50分

17時10分(車中で披講、 取 着 (18時12分 表彰式

桜 発~~~~~~

投句〆切 4月10日厳守

投句先 五〇〇円(切手で可 〒8911鳥取市東大路六四 鳥取 国鉄 小県川 ふうもん川柳 柳作 両川洋 家協 一々宛

会会

70

ます。

こび、川柳の醍醐味は続け 続きそうである。 川柳のある限り私の青春も ることにあると信じている 字に表現出来る無上のよろ ■人生の喜怒哀楽を十七文 NHKテレビローカル「今 です。2月7日朝8時から いる様子も楽しみのひとつ

されました。 2月1日から全国的に発行 で綴る「武蔵の里」の栞が 行で、絵入りはがきと切手 (白岩文衛・土居耕花

っております。

石垣

花子)

兼題―駆ける・気分・苦労 所·寺田町·高松会館 局の後援で大原郵趣会の発 ■宮本武蔵の里、大原郵便

川柳高知(曽我部佳風)

が放映されました。 生の「川柳と歩んだ60年

(堀江

い雪と寒さにちぢみ上って ■春とは名のみ、例年にな

新 同 X 紹

介

(八木 千代)

います。

ずむずと顔を出したがって ■深い深い雪の下に春がむ

日のアングル」で緑之助先 せて頂いております。 い句ですが投句して勉強さ ■八木千代選の毎日柳塘 (小さなひろば)につたな

すべき年を同人の仲間に入 れて頂き、とても幸運に思 ■川柳塔社還暦という記念 芳子) ずつ降っております。 でもありませんが毎日少し られたそうですね。 大阪でもめずらしく雪を見 島根程

の周囲にうず高くたまって も屋根からしましたが、家 ■近年に珍らしく雪おろし

ましたが、時々ぶつかって

■正朗も住居にも馴れてき

(本多 洋子)

▽句会案内△

越

田

み

0 子

水客・永楽・客遊子推薦

■南大阪川柳会 兼題=紫・香り・自由吟 所·西宮中央公民館 時・4月2日 (月) 13時 ■西宮北口川柳句会

有

働

芳

仙艺

·栞推薦

土手の美しさは、今年は何 時頃になりますやら 叱られ役をしています。桜 (堀江 芳子)

■川柳全国大会もうすぐ (寺沢みど里

ろうと一月の去るのをじっ と待っています。 います。三月には消えるだ 西村 所・東大阪市社会教育セン

時・4月28日(土)夕6時 ■東大阪川柳同好会 軽食

早苗) ター内 兼題=入学·先生·PTA ・クラス会

所·八尾神社内 時・4月10日(火)夕6時 兼題―啖呵・拝む・電池・ ■菜の花句会

時・4月19日(木)夕6時 時・4月26日(木)夕6時 ■南海電鉄川柳句会

夜市川柳 募集

第11回 群 締切 4月30日 磷 野 いさむ 選

投句先 ₹ 593 堺市堀上緑町二一九一 河内天笑方

堺 111 柳 会

兼題 = 遊園地・道・別注

本社地下食堂

所·南海会館内南海電鉄㈱

■富柳会

所,中央公民館 別館和室 時·4月19日 (木) 13時

■堺川柳会 時·4月16日 (月) 夕6時 兼題 | 鍵・知恵袋・無心

題=腹・花・斜め・新 所・堺青少年センター3F

西鄉会館 時・4月23日(月)夕6時 所・寺田町・高松会館 ■駒つなぎ川柳会

題=新進・突発・舌・余裕

健司·射月芳

本 Ξ 月 句 会

会場 午 なに 後 わ会館 六 時

状記をユーモア溢れる話術で披露される。 チの話をします」との前置きで業界仲間の行 屋とか魚屋、八百屋、 番いやなのは酒、次いでバクチ、そのバク 移りかわりは確実な足どりでやってくる。 定刻開会。おはなしは阿部柳太氏。 空気は冷たくとも空はもう春の気配。 寿司屋、豆腐屋といっ

敏・天笑

思慕ひとつ残して移る恋がある 汽車が出て父の背中に風移る

核心に移ると話術でそらされる まだ雪はあるが確かに春迫る

惚れているお方の癖がすぐ移る

阪市)、高田美代子(藤井寺市)の三氏。

三月の月間賞は林はつ絵さんが獲得された。

(受付―与呂志・重人)

初出席は桜井千秀(和歌山市)、東正義

大

松園氏の思い出でしめくくられた。

四段昇進の大事な最初の一番に敗けた時、

と。話は勝負事から将棋に移り、内藤九段が イラから別の刺激をバクチに求めるのだろう、 が、これは仕事のリズムが平凡で、そのイラ た生鮮食料品を商う商人はバクチ好きが多い

母さんのひと言で立直った話、最後は亡き小

み・光代・冬葉・只士・勝美・喜風・健司 出席者―与呂志・武庫坊・年代・柳太・き

規不風・鬼遊・柳伸・岳人・蕉露・古都路 紫香・重人・寿美・美代子・万里・登志代 泰子・狸村・満津子・道子・寿馬・糸葉・三 三男・太茂津・幸・節子・潮花・章久・滋雀 十四・覚然坊・智子・智慧子・薫風・水客

度・白水・弘生・白兎・史好・好一・武助・ 比呂志・栞・射月芳・雀踊子・英王子・楓楽 春蘭・みつ子・英子・郁栄・あいき・頂留子 山久・柳宏子・笛生・風童・はつ絵・いわゑ

凡九郎・悦郎・千秀・正義・形水・みつる・ 小路・洋子・寿子・吸江・金太・公一・萬的

紀 市 郁 選

鬼の面つけると移る鬼ごころ シベリヤの鶴はクシロの雪へ来る 移り気の選ぶネクタイ多すぎる 移り気な女ですぐに燃えあがる どう移動しても地球を逃げられ 時だけが移り本心また言えず 射月芳 比呂志 重潮岳

健三狸 司四村 人花人郎 移り香を残して足音遠ざかる 移り気へ滾る想いを切り捨てる 想い出を互いに抱いて家移る

来週は移る新居へ家族連れ 駅前の花屋の軒を四季移 手簞笥を移した後の青畳 温室で移り変りに鈍くなる

小天紫

中心の灯はもう孫の手に移り 移りゆく世に拗ねている父の靴 殻ぬけて弥陀の光を身に移す 優しさを言う移り気はゆるされる 人形も春の衣粧で移される

只き

み路 1:

はつ絵

郎

野焼きの火祈禱の小さな火を移し 移り住む鳩は温みを知っている 多情仏心目移り多き男かな 移り気な女きれいな嘘をつく 移り年の男の口数多すぎる

> 雀踊子 潮三十四花

移り気を笑う女も過去を持つ 転勤の過去は語らぬベレー帽 いい答え出そう新興地へ移る

青空に心移りを責められる 移り香に逢うた余韻をあたためる 移り香はうすむらさきに褪せてゆく 窓際に移ると人がよく見える 輪の中へ移ると男弱くなる ひとつ咲きひとつ枯れては時移る

乾杯のグラスに鬼が棲んでいる 柴田 英壬子 選

グラス

狸 村

72

水笛白道

傷心を癒やすか隅っこのグラス グルー 音頭取る今日のグラスにある未練 重ねてるグラスうれしい人になる 喜びのグラスははしゃぎ過ぎないか 男一匹骨をぬかれているグラス 伏せられたグラスよ俺をみつめるナ 乾杯のグラスの持てぬ医者通 喜怒哀楽グラスはいつも良き友で 乾杯のグラスが長い隅の愚痴 さりげなくグラスを置いてからのこと グラス越し見るのが嫌になる指輪 うれしいから妻もグラスを持ってくる あの夜のワイングラスが喋り出す 指切りをしたのはグラス空けてから 喋りだすグラスを見えぬとこに置く ひとり乾すグラスを誘う甘い曲 飛び散ったグラスに満足感は無 本音言うグラスは少し持ち変える 甘そうにグラスを干しているゴリラ 美しい罠へグラスは炎えつきる オペラグラス妻の機嫌を見ていたり 憂さを注ぐグラスは素朴なものがよい 大正のグラスに似合うカルピスよ 三月のグラスが和む花便り グラス傾けて野心を温める つぶやきが溜まるグラスの底の底 のないグラスへ火の粉ふりかかる の良いグラス白魚の指にあり プのグラスはいつも踊り出す 美代子 雀踊子 凡九郎 満津子 比呂志 章 みつる 悦 年 重 英 健 寿 弘 笛 郎 生代 葉 司 路 名案が出て先決が立往生 内幕を知っているから先に決め 足元の石をけるのが先決よ ライバルの鼻たたくのが先決だ 先決の才に溺れた佗住まい 浅はかな先決だった日記帳 しあわせなグラスいつでも濡れてい その話子供が先に決めている ぶつかって見るのが先決寒い朝 議論より鈴つける役先決で 先決を悔いる娘へいい話 先決はパンだとに角生きてい 先決の処理が遅くて社が揺れる 先決は金だと言えず口籠る ハングリーの根性持つのが先決だ ソプラノを静めることが先決で 仕込むよりやる気あるかが先決で

かりそめの愛をみつめているグラス のっぴきのならぬグラスが向い合う サングラスちぐはぐな心見せられる 知り初めも別れもグラス酒が満ち グラス透して運命線が伸びている 大将のグラスが欲しい鬼ばかり 女ひとりやや辛口のグラスあけ 傾けるグラス一気にくる慕情 グラスの中で男を溺れさす ハネムーンワイングラスに赤と白 いわゑ客 英壬子 規不風 みつ子 年 雀踊子 章重

代

今日生きることからドヤの朝を出る

西 山

松題

選

金 武庫坊 文 和柳 太 秋子伸

公太只光三一津士代男 只光 在 香

> 先決は金の力と知る落ち目 先決を女の愛が泡にする 春風が返事を先に決めてく

る

先決は祖母に甘えてみることだ 先決は名を売ることだコマーシャル 先決問題さえ決まらない根の深さ 登志代 みつ子

久

太 笑

武庫坊

雀

先決へ妥協の線は崩さない 先決は慰謝料離婚出来ません 形見わけきめねば後がはかどらず

水

葉 集

若

先決へ悔いを残しためし茶碗

先決は酒もたばこも止めてほ 先決を急ぐ受話器に罠がある 割り前をはっきり先に決めておく 人材を育てる事からはじめよう

Ш 柳塔 大阪市 一月号より) 田 柳

影

淋しさに負けたの が居る 寄席 0 中

素

眼帯の下から乙女何を見た 修羅を経た帯にいくさの弾丸のあと 角帯に京都のうたを持つ男 喪の帯の柄までとやかく言う他人 切り札を帯に挾んでいる女 あの時の帯を覚えていた夫 胎動がうれしく伝わる岩田帯 包帯のいらない傷の疼く春 執念の帯が流れる日高川 帯ぼんとたたいて鏡へ出来上り 妻という帯のかたさで笑えない ゆきますと金襴緞子の帯が泣く 紙人形の帯がぬれてる紙の雪 夢芝居帯がいまにも解けそうな 帯かけてもうほどけない玉手箱 認知まだ受け入れられぬ岩田帯 切札は賛否を決めてからのこと 先決は自分の箸で食べる事 辛抱をするのが先決だと思う 先決の路線が何処かで曲ってる 凍ってるうちに補償をもらわねば 帯締めて淑女に替るお茶お花 着物にも馴れて調和の帯選び そうなんや君の心が先決さ 先決が私のノラをもてあます 先ず生きるあとはボツボツ考える 枚手に入るかが先決だ 板 尾 岳 人 武庫坊 鬼 英壬子 年 健 九郎 司 川下へ流れて行った白い帯 それぞれのいくさを唄う帯の位置 黒を着た紙人形の帯に罠 帯切ると万円札に羽根が生え 観光のカメラだらりの帯を追い 帯むすぶまえに丼中華そば 悔しさにじっと耐えてる帯の芯 耳の痛い話へ帯がきつすぎる 帯ポンと叩きいくさの顔にする 喪服の帯から長い女旅 あの帯を忘れはしない雪おんな 自叙伝に帯をゆるめたことはない 冗談を言うてはならぬ袋帯 帯結ぶ手がまっ先に春を知る 博多帯女将は過去を締めて生き 喪の人が皆んな帰って帯が鳴る 帯の位置三面鏡で良しとする 帯を解く女が休みなく喋り 帯止めの渋さが憎い大年増 帯に短したすきに長し預金帳 帯しめて花嫁さんが出来上り 小さ目に帯を結んで逢う電話 帯ぽんと叩き出陣の構えとす 縄の帯しめて与作は山に生き 帯きつくしめて女将はいくさする すり切れそうな帯も掟の渦に耐 帯締めが似合う悲しい形見分け ストリッパーあっけらかんと帯を解き 本の帯がドラマを繰り返す

子郎游 む らくも創 念観桜川柳大会 FI

35 周

年

之

只寿悦鬼

どんたく 英壬子 好 伸 日 おはなし 題 木次町青少年センター 4月8日日

午前11時開場

一階

糸 史

橘

高

風

柳 敏

緑之助

子

黒川 山根 紫吻選 紫香選

本庄 鬼遊選 快哉選

水笛

客

小西 雄々選

一句・席題あり

リズム

各題一

参加賞 各題秀の句選者短冊 副賞呈

美代子 頂留子

賞

円封入 欠席投句の方・四月五日迄投句料五〇〇 二千円(おひる、小宴、他含む 円封入、本会宛お送り下さい

会

13 島根県木次町里方八七八一三

雀踊子

T699

F

むらくも川柳会

岳 A

児島 与呂志

じっくりと縁を待ってる遅い春 九回があってじっくり構えてる すきやきの匂いじっくり腰すえる じっくりと聞いて片方担がされ じっくりととろ火で炊いた母の味 じっくりと聞けば理に合う妻の愚痴 じっくりと煮込んだ味は母のもの 柳宏子 司 水

冬眠の熊でじっくり春を待つ やるだけはやってじっくり構えてる じっくりと聞いたら何でもない話 機嫌よい時にじっくり話する じっくりと話せば通じる糸電話 置きざりにされてじっくりペンを取る じっくりと十年単位積みあげる はつ絵 蕉 風 形

ライバルの出方じっくり待つ呼吸 じっくりと企み抜いた二の矢持つ じっくりと考えました別れます じっくりと話せば時計に目をそらし じっくりと構えてる間に落ちこぼれ じっくりと読経のなかで座に耐える じっくりと考え返対派にまわる じっくりと構えていつもどじを踏 和解してじっくり飲んだ手の温み あいき 悦笛 萬 光 冬 子離れで目覚めた女の自立心 自立するバネを鍛えている野心

待つことに馴れてじっくり策を練る じっくりとじっくり男思考する じっくりと話せば解けたわだかまり じっくりと訊けば理屈のない喧 じっくりと鰯を焼いている夫婦 じっくりと話せば何でもない話 じっくりと私を見つめている夜更け 倖せはじっくり話せる友があり じっくりと考え抜いたあとのこと じっくりと考えてると腹が立つ じっくりと父の無言が攻めて来る じっくりと出来ずみの虫に春が来る 好 弘 寿 一 生 馬 与呂志 雀踊子 満津子 吸 太茂津 春 蘭

大 坂 形 水 選

自立したはずの蛙にある尻尾

自立して明日の灯台見えてくる

忙しい妻でじっくり愛されぬ

規不風

じっくりと話せば赤い血が流れ

じっくりと見てやろう晩成かも知れず

やどかりはいつか自立の夢をみる 単立ちゆく小鳥へ拍手惜しみなく いつまでも自立は出来ぬ北の窓 自立した子に何時までも子守唄 自立した女は別れ言いにくる 自立して違う角度で親をみる 自立した日から悪女になりました 自立した名刺に過去が伏せてある アメリカの庇護から自立できますか 紺色のスーツ自立へ胸を張る 父母を抜け殼として自立する みの虫の子が自立する技を撰り 自立するつもりか雛が翔びたがる みつ子士 滋金笛雀太生 健 どんたく 可 葉

> 薄氷の上に自立の城がある 脱サラの自立の夢をこわくみる 自立したらしい白足袋よく動 歯車の一つで自立できぬまま ほめるだけほめて自立へ貸さぬ金 三歳児の自立靴下はけました 荷車のうたが心にある自立 自立するおたまじゃくしに春がくる 定退の日から自立の市場かご 自立する道は峠に続いてる 自立して涙腺持たぬ女となり 女ひとりへ風が自立を弄ぶ

> > き

健

司

露

規不風

励ましてやろう自立の障害児 自立した話喝采をしてあげる 自立して表札すこし重くなる 末っ子が自立する日の走馬燈 喜んで居れぬ自立の弟子が増え 自立した女化粧が冴えてくる 自立して山の高さがわかりかけ

新しい地図をもらって自立する 温室の中で自立を考える 自立する男を送る無人駅 自立する心を悪友からもらう 自立する女おんなに徹しきる

射月芳

禄を離れよんどころない独り立ち 子だくさん放っておいても自立する (清記 はつ絵 郁 敏

美

射月芳



作品は雅号も含めて20字まで。 締切毎月末。必ず原稿用紙使用 必ず原稿用紙使用のこと。 整理·板尾岳人

北川柳会 野呂

アンテナを無数に持って地獄耳 名鐘の余韻を残す大晦日 人生の岐路で易者の灯をさがす 残り飯軒先に置きスズメ呼ぶ 良い話計りを耳に貯めて置く 陽だまりで無事を喜ぶ老いの冬 り火を鬼に取られてなるものか た星竜 だ し 斗子

斗子和

閏年猫も奇声をあげて居り

此れ見よとチト大型のイヤリング 残り布とは見えぬさえた出来 歳を積む生けとし生きる一人なり 子の咳へ母の耳だけ起きて居る 嫁に行く話へ根雪融けはじめ 残業をして得た金のありがたさ 魔女と言うバレーに残る言葉あり テルミ 婦美子 重静悟

閏年子宝希う嫁の念

家総ぐるみ稼ぐ閏年

サークル檸檬

文明にシルクロードの遠い道 耳もとの美人の言葉が嬉しそう

言を聞き分ける耳いつの間に

退職金耳よりな話ばかり来る 白米に化けた晴れ着の残りぎれ

> 時々は妻の愚痴聞く雪の夜 福寿草正月ですねと土を割 耳垢の掃除が好きな膝枕 耳よりな話に悪友ついて来る 福耳が自慢の妻と痩せて居る 銀世界自然はかくも美しき 年老いて残りの命もやし度い 留守番がホーム炬燵に守られ ちょっと耳貸して重荷を背負わされ お菓子でもまんまんさんの次に食べ 3 三弘山茂午好泰十一四生久郎郎古世

年寄りに興味の薄い閏年 三次会馬の合うのが残留す 耳の遠い神様もあり戎さん ハワイ川柳ウイロー社

晩舟報

香夢女

閏年知らぬ若妻気にかけず 誕生日四年に一度で若返えり プロポーズチャンス逃すなお嬢さん 女より進んで結婚閏年 高張秀公拝 原 子賀山女山

御先祖の名残りの家紋うけついで

閏年一日多く働こう 瑞雲に乗って初夢子の閏 今年こそ頑張りますとオー 甲子の閏年だが儲かるか カレンダー飛躍の年と記したり ルミス 虹 晓 三 万 十里 宵 舟 四 歩

花柄の鍋にじゃがいも素っ気なし 美緒報

古女房鍋の底見て物思う 鍋囲む温さ多くの箸がある

料理囲む顔ぶれ又同じ

鍋つつく仲に通じる言葉あ 紙鍋で静かに煮える春の彩 妻の留守鍋みりゃ寒さ猶つの 中娘 駒つなぎ川柳会 味がしずんでる

今日子

満津子

その出会い温め続けている写経 駒つなぎ川柳会 里 ドラマにはならぬ出会いだ妻と俺 終止符を打つと余白におどされる 完結のない猿芝居の主役

アキラ

柳宏子

小路報

午好泰正

出会いから握手する癖直らない 三畳で寝て一流の夢を見る たたき合う肩に一流二流などはない 完結でない休戦という夫婦

罪深き運命線を持つ出会い 飯盒の底まで虜囚飢えている 完結のあとのポーズを考える 完結を急いで母は夜なべする 腹の底見せると僕の負けになる ピリオッド打って野心作のペン

持って来た荷物は持って去ぬらし 傑作な出会い有料トイレット 笑い袋の底に涙が溜ってる 止り木のおんなが荷物を質におく 一流の陰で偽物甘い汁 一流が転ぶとニュースの種になる 流を自負して人生すねて居る

転落へ導く出会いだってある 夫婦して提げると荷物軽くなる どじな男がどじな終りに鳴くカラス

白俊真健

出会いから味方と思う掌のぬくみ

どん底がなにさ地球は回ってる

兎夫砂司子好信子人

凡史善街重 柳右子 千代三 凡九郎 晴

規不風

肩の荷を下した頃に黄昏れる 宅急で送るとみやげ買わされる 引出しの底に勲章錆びていた あれこれと女は大きい荷を作り 一流でないから温い風がある 流の料理が舌になじまない

ストレスをいつも一流ためている

弘 歩 郎 生楽 風花が舞うと地蔵の眼と出会う 胃カメラに覗かれている腹の底 ポリバケツの底は人情味に欠ける 苦労人ばかりと出会う父の靴 十二月荷物が重く重くなる 流の時計狂うて見たくなる 冊買うのに底の方をとり

悦康 郎郎

58年度各地柳壇賞

八木千代さんに決る

児 島

与呂

志

砂山のもろさを知らぬ少女たち

境を作っているとは思いたくないと深く心 ものに近づくのは少女ではない女かも知れ に残す句だと思います。 いたのかも知れない恐さ。それが見える環 く少女は本当の砂山のもろさを知って近づ きれいな心でもろさを知りながら美しい しかし知らないで美しいものに近づ 八木

> うに。 ます。 今後共よろしく佳句をお送り下さいますよ 各地句会の報告も増えて来ました。

〈佳句十句〉

此の狭いところであちこち向いた屋根 錦着て帰る駅まで消えていた 嘘半分その半分に騙される 子に追われなぎさの蟹は縦に這 60 奥田みつ子 時広一 北山越山 原田芳泉 路

忙しいわりに書くことない日記 古くさいと言ってた知恵を借りにくる 関口幸子 松浦大鷹

支払いをするのにこんなに並ばされ 温もりを一枚葉書からもらう 種を播くやさしい土があるかぎり 彼岸から絵具も明るい色となり 浦野和子 西出楓楽 行吉照路

▽各地柳壇賞の表彰を4月7日本社句会で 毎月の選者の皆様有難うございました。 行います。

味や匂いを感じて戴けていると思っており

さまが、

この欄のお世話される各地の川柳会の皆

各地柳壇でそれぞれの句会の色や

雀踊子水 底なしに明るい妻でだまされる 流の顔で美容院から帰る

四報

億という現金拾ったのも本当 福様もお色気が好き福娘 是以上お色気出すと法に触れ 老いて尚色気たっぷり三味の席 斉藤三十

拾得の千円届けて笑われる 匿名の手紙で届く万円札 十円の価値感パチンコでチンじゃらり

十二月汗ふくひまもない現金 現金で面をはられて年の暮 ロボットの手さばきで読む札の東 現金な男が聞き耳たてている

年の瀬をぼやき乍らもやっと越え あの人はほっとけぼやくのが趣味や 札束へ少し傾くヤジロベー 現金な女の嘘に仕込杖 札束へ男の意地がくずれかけ 羽根のある現金だけを持っている 雀踊子 みつ子 三十四 白 白 公

屯

音痴だと母に言われてやっぱりね じいちゃんがまってるぼくの冬休み クリスマスうそでもサンタ来てほしい かみしばいみんなでつくってたのしいよ保育所はるみ うえのはがぬけたしたのはもぬけた 胴巻きの聖徳太子汗をかき 公害がふえて山河も泣いている クリスマスよろこんでるはケーキ屋さん また雨がいやだと思う朝を出る 柳たけはら 保育所あきみ 小四美 小二純 火仁 少一方 小四亜貴子 菁居報 子昭保

頂留子 覚然坊 郎

現金な奴が善人かも知れぬ

用き上手になれない母の待ちぼうけーオのほっぺ真赤に冬の陽よ 気がつけば良き道連れの妻がいて事終え充電しなおすコップ酒のもかも背中が語っている無口 慰めは サラ金の期限が人を鬼にする 節 太陽の色でもめてる夫婦仲 お元日禁酒 したたかな欲頂点を知らぬなり 無器用な手だけどパチンコだけはする 偏差値制点とり虫にはさせな 半生を眺めて飽きぬ海の上 もし母がいたら綿入れ届く頃 富士仰ぐこの子と歩む道ぞけ 元旦の日記は夢で溢れそう 日記だけ 分は 、章を時々思う鍋 トカー をさす三十路に赤き砂時計 b ノルンつ れた一 川柳はびきの 母 顔 深い万年青の青といる 0 の見えない鬼がくる 私 の命の線描く がバックミラーを離れな ばよくぞ支えてくれ てとこかな期末試験す の孫が酌いでくれ 輪一輪匂う百合 0 駒の蓋 わし む 妻 NG. 北大干 令 敏報 浄一有淑美貞笑節か 佐 美路人子雄子子夫こ シゲヨ 比呂子 愛紀恵子 敏 寿を祝す友情 出揃った花芽へ夢をふくらます 初夢を見たいと言って酔いつぶれ 悪童のパパに悪童の子が育ち初夢はひと彩足りぬ虹の橋 初夢に見たい物が多すぎる心までぬくもる鍋物口に合う 本当の笑顔下さい孤児たちに 夕餉の灯囲む笑顔で無事に暮 ほんのりと紅ひいて見る初鏡 喜寿の宴禿と白髪の君と僕 三世代生きて迎えた喜寿の春 喜寿の旅これから廻す独楽探 すこやかに米寿へ続け詩の道 長寿法聞けば私は酒が好き 許す気の笑顔時々空を見る 下書きにまだ悩んでる線を引く サラ金の爪隣まで伸びていた サラ金の取り立て映画で見た様な 初夢を目覚し時計に邪魔され 子の歳も事件連続幕が開き 声明に庶民何度もだまされ 抛物線その先端にいた絵凧 山茶花の赤老人でさえ燃える 一ヶ日 揃いの子等それぞれの職に就 たさを寿ぐ喜寿と還暦と も聞き流 0 むらくも川柳会 孫の余韻を抱 中で進路を見失う して日 舞扇 マ好日 3 ,正線朗 之報 子朗助 谷 喜昭白隆 代子水一 多賀子 はじ みつる みどり 良 義 秀蚊峰 司 80 願い事秘は正月は孫の 初朗 寿か涙でゆれるお立ち酒やき芋へ亡母の温みを思 伸びる芽を貯めて雑草雪の下 お守りを受けて一気に胸はずむ 0 年始客笑顔 初春祝う向うに飢 母 お守りを胸にしのばせ受験生お年玉貰える叔母が来て笑顔 幸 喜寿の坂あせらず歩む詩 寿のめでたく揃う 元朝や初心に返える神の前 初春の風いっぱいに凧上る助詠に新年寿ぐ老いの松寿か涙でゆれるお立ち酒 喜寿の春傘寿までもと神 喜寿米寿 風花の舞い雪の参道 米寿の宴ならぶ笑顔 若水を掬んで心 K からのお守り肌身離さずに せな喜寿子や孫に囲まれる を見ず陽も見ず過す喜寿の春 めでとう笑顔 一稀と喜寿重なり サイン笑顔 80 相合傘につもる雪 ます の笑顔 からやろうとそ機嫌 に長寿番付の中に居た 伸びた寿命に趣味が生き でとそをくみ交し 百寿までもと夢を追う の初詣 が揃うお 0 あし 初句会 ポー えた国思う 初詣 の福 いでたい 神ば ズ取 垣

老夫婦 義比呂 マサコ 百静は清翠 代子代祥星 三ゆ福一喜子子郎 ふさえ 八重子 さくら マツヨ 滝 林藤吉竹 寿 子路 子野乃

出いい 0

道

元

根

越

好きだった亡母の茶碗に箸を立てほんとうらしい嘘をけらけら笑う骨 秋の日の情事を雲に盗まれる 盛装の美人も走る発車ベル 朝風呂もよし訣れの寒椿 猫年のない因縁を聞くねずみ 姑となる盃を受けている 献盃の目は口ほどに意見吐き 冬の陽の刈田子供の声高い すいすいと法をくぐって行く悪魔 すいすいと通った入試の夢が覚め すいすいと得意に歌う満二才 合掌の心に迷い解けてくる 本番を待つ天神様の梅匂う 嚙られた餅も目出度いエトがしら 焼酒の人気で子からねたまれる 初便り敷居の高い不義理詫び もついいかい誰も答えぬ冬の坂 裏切りは持たぬ水仙白く咲く シクラメン次々咲いて冬の部屋 細る身と知らずいばった雪だるま 盃をグラスに変えてから本音 盃を重ねて女は愚痴を言い 埋れ火を又かき立てる憎い 煮直したおせちですます妻の昼 年が明けて夫婦 がまへ若水たぎる春の音 にた川柳会 ない話がはずむ湯治客 の気がゆるみ 早苗報 操 花 武佳春狸 華

富志子 希久志 さよ子 助 定年になっても仕事追ってくれ 霜の白さ新聞少年知っている 大ぴらに飲めるからいい秋祭り 自由席男の座るものときめ 糸電話内緒話が皆聞こえ 青い空嘘がないから尚青 化粧せぬ女で男騙さない 福の神庶民の貌で親しまれ 満月の夜道で借金取りに逢 過去を掘る女へ鍬を一つ貸 人妻と開いてならぬ地図もある 七人の敵のひとりから果し状 変り者ぐらいで粗忽にくめない 冬の山二月の寒にたきびする 二日酔い心得なさいと叱られる とこさ迷路抜け出て来たネズミ 知らずにパンを焼き 雀踊子

寝返えれば夫不在の長い夜 川澄んで昔にかえる稚魚の群 Ħ

難聴は耳より目

口働かす

もの言えば唇凍る田中さん 口紅を少し濃い目の誕生日

カラオケでナツメロ唄い若さ見せ 遇然の出会い余生に張りが出来 愛の灯をともし続けるむつかしさ く会まだまだ行けると自信つけ 住み みね子月 サワ子 永哲秋越悲柏礎実 月楽子信山子秋石男 香鷹

初日の出拝み心の箍を締め

鬼を打つ豆トラックに積んでいる

口下手の僕に囀る妻が居て

川柳塔からつ

あの人が口ほどに手が動けたら 口答え孫がだんだん覚えて来 青菜漬旅の馳走に飽いた口

聞こえないドラマロ元にらめっこ

元がためらっている金のこと 手口非常口にもなって母

П

家相見も成る程と言う家に

聴障川柳

豊作報

鉛筆を彼も研いでる冬の夜 捨て鉢になってはならぬ皿廻 ポンコツに急にはならぬ医の進歩 遅がけの年賀の挨拶隣の娘

情報化社会田舎を直撃す 責任が無いだけ孫を可愛がり 大事故も大臣が視てけりがつき

武器持った武者人形はもついらぬ

口ほどに体が動かぬ情けなさ 口約束カスガイだけは入れて置き その日から私は無口になりました キッスしようと口を寄せ来る三歳児 責任があるから憎まれ口を言う 父の日の無口に酒が歩み寄り スピーチを無口の父が買わされる 口下手の夫におしゃべり妻が添う 口先のうまさお世辞がすけて見え

51.

朗

17

人の口戸の立てられぬ聞合せ 少年の手帖に裏口などはない 漫才師すべる口ほど金になり 智一鉄豊行文承み涙とたた早和鼓みか 子晄火野江古平る夢江おみ苗江草

この世から武器のなくなる日を数え 四正素久仁郎敏石於 多々子 高広虹 豊春睦紫 明幸汀 作一美

- 79

そくりは畳の下を夫知らず の酒場に松本清張が眼鏡拭く 夫出船おんな島守り消防手 打吹川柳会

朴義

反対の意見も聞いてよい仲間 仲間とは時には偽善であることも 子の仲間親が知ったらぞっとする 仲間割れたかが女のことなぞで 反核の仲間地球を手でつなぎ 野良犬は仲間意識で結びつき 吹きだまり仲間同士の肩を寄せ まだ暇は出せぬ作業衣洗 の灯を燃やす仲間で若く わせる いる 宗規朗 ゆり子 おさむ

この仲間逢いに雪道やって来る 三人になると一人がはじかれる 仲間でも金の事から水がもれ 気の合った男へ細い道がある 打明けた秘密仲間に裏切られ 夫婦とは死んでも続く良い仲間 獲物分けしてから先の仲間割れ 精農の仲間支える土性骨 ペンネーム初対面から打ち解ける 久しぶり会った仲間も酒量落ち

志づ子

舎経康興梅

寿満湖

喜美子

耳打ちのことばは短い方がよい 夫婦で耳うちするは貧しい時である の家内に耳打ちをして何ごとや 聞ける耳なら開けておく 妹尾 春江報 声掬

に似た福娘から笹を受け

|結の剣より強いペン仲間

弘、柳

西宮北口川柳会

山里に テレビでは政見放送野次れない 福笹をかつぐ貴方はピエロだナ 戎さんの帰り娘と来るお好み屋 育戎飲めるだろうとついてゆく テレビドラマの女不貞で美しい いか焼きに心がうつる宵えびす 全国ネット恐いと思う日のテレ コマーシャル待ってトイレに駆けてゆ アトリエに十日戎の風はな テレビがついた日の感激

1

á

黒着てもさてさて品の無いお アンデスの氷河茶の間に映し出す 民族が写りテレビのなまぐさい 脇役がわたしに似てる夜のテレビ 生中継狭い地球に和が欲しい

奈婦紀 々子雄

呑み仲間また病室で鉢合せ

上品に 上品なお方と食べて身につかず 上品な言葉でちくり刺してくる 上品な顔でずけずけ言う女将 上品にしてれば乗れぬラッシュアワー どう見ても上品でないピカソの絵 上品な人のあくびを見てしまう やきいもを食べてもにじむ上品さ 上品な笑いはオホホだけですむ 上品にしてはおれない湯屋の火事 上品な家庭で積木崩れだし 振っては神の鈴鳴らぬ

冬い勝子ゑ紀

兵翠坊

紀

織姫の絹と生きてる半世 嫁ぐ子に絹一枚と流す汗 パフたたく鏡期待に弾んでる 岩田帯巻いて大きくなる期

上品な人まで値切る大晦日 名園の琴に合わせて茶の点前

上品に坐れば足がすぐしび

上品に化けても影は従いてくる

上品な言葉でいわ

しなど値切り

山茶花の白さ私へ問いかける 脱皮してもしても玉ねぎ芯が無 太陽と仲よくしたい布団干す 時刻表眺めてしばし旅をする 負け犬と見られたくない日の多弁 ちびた靴せっせと磨く妻の めでたさは今年 も殖えた祝 朝 Va

保園文

九郎

結局は遠まわりして父の道 粗大ゴミの夫がボーナスもろてくる 人はみな寂しい過去を持っている 減量の妻の居ぬ間に餅を焼く 振袖に氏神様も気がつかず カラオケの街氷雨さざんか細雪

定

三が日庄助さまのお通りじゃ 逝かれては困る女房を叱りつけ

人様は嫌いますけど干 なめくじが蛞蝓を生むはてしなく 目薬をさして朝から用がなし 井上

しげお 恵美子

求杜みつ子的子

期待せず期 公約へ期待した程働かず 期待する年 角栄をねずみ小僧がねらいだし 添書きのねずみ二匹が疎遠詫び 子に期待無理を承知の親心 ねずみでもミッキーマウスは人気者 ちょかちょかとこまめに動くねずみ年 へネクタイしめなおす して買う宝くじ 天謙末醉堕水紫 しげお たるま

はつ絵

あき子

金みつる 本蔭棒 司 雄川

待

す伊花道右 れ升村子近 東洋 美眉郁 男

-80

足踏みをすれば明日が逃げそうで 故郷を持たぬ借家の夜は冷える 繭の精晴着の中で眠ります 一生を絹にたくしてマユは死ぬ絹ごしが大好き父ちゃん総入歯知名度が綿をシルクに見せる術 票を捧げる人は胸に秘め 色気が匂う絹 0 女

大切な人かも知れず嘘を言う 割引いて聞 柳ささやま くとおもろい裏話

与重君洛 志人枝酔

喪に服す敷居に涙落ちこぼれ 越えられぬ高い敷居が一つある 我が家の敷居は低くしてお 河原みのる報 房宗くにの子珠の 可房宗

子ねずみのふっと覗いた餅のかげ ねずみ齢不思議に猫を可愛がり どぶねずみ走って幸を見失い 繰り返すたびに小さなホラが増え 繰り返す愚痴に雀も来なくなり 靖みのか 子る きしる

繰り返す言葉に真理が覗かれる 繰り返す暦が皺を持って来る 建て売りの値踏み敷居を踏んでみる

エキオ

住

朝

んせる る幸報之助報 素胡次郎 貞和素

びっくりとさせる子連れの里帰り 呵々大笑頼りになりそな男です 笑顔など出来ぬひと日を頼る神 真底の笑いは妻が持って逝き 今ここで笑うと裏切者になる 人の世へ試練に堪える白ねずみ っくりはもう慣れました物価高 の絵に先ずはびっくり 百合子 子朗

ずも川柳会

出稼ぎの父が杵持つ鏡餅 黄な粉餅母の慕情があぐら 礼服のポケットから出た探しもの 手袋をはずせぬ義手がぶら下 探してもまだ見つからぬ青い 袋の 1 郷愁へ餅ふくれ出し 汚れ気にせぬ熟 ス転ばぬ先の杖を抱く とかく がり

のない風

へ振り

向く

地下

0

街

庫

和花武年

村 坊 一つ咲いたと呼びに来るの玩具で遊ぶ子供部屋

42

置

くみ

かん

比道鉄喜晃伸

人枝酔志子心酔山子

お雑煮が待ったをかけた喉仏 企みは語らず手袋白でいる 年齢だなあ探す眼鏡は鼻の上 雑踏で小柄な妻とはぐれた日 右左父の軍手はいとわない 面影を五百羅漢へ探す亡母 マイペース守りともかく完走す 符を解きつつ探す母の海

贈りもの届くとすぐに値ぶみする 鶴を撮る凍てつく寒さ苦にならず 根気ようマニアが鶴の動き待つ 声 の絵に希望たくして便 将軍鶴の一声にぶりが 京都塔の会 を天に残して鶴が飛ぶ り書 松川

> 白渓子 笛巨

珠詩

包み紙立派すぎて気がとがめ 傷心を包んで呉れる母の胸 行き届く女の情が怖くなり 忘れ物届けて犬にほえられる つき饀包む手が待ち遠 わぬ仏の瞳に包まれ 6 n 水飛 客

陽代芽江穂子的子

薄情に別れる夜の包みもの

代仕男 ちかし 多賀子 独草 九正流桜 **圭詩朗** 満 老 仙 fr. 山茶花が一 あるだけの 季節 パチンコに捨てる程なる憂さであり 青になる渡る歩道を右ひだり 平凡に暮してますと幸せそう 笑い皺消してようやく我になる 草野球並み連立の顔ならぶ 火種などなくとも風呂が沸いて 肥取りも治兵衛もしていた頬かむり 貝のふた開けて悠々自適する

かあゆ川柳会

小砂

白汀報

春は

江絵友

いる

明

反抗期ですと言ってる舌打ちが 佳

句 地 10 選 前月号 から

杜的報 緑之助

夜 厄 ぼ 柏 不 を出 凡 ろ いたくな犬にしといて叱ってる 食 介 渡りとってもうまい日銭 い 手 1 なはなし ぼろの心 新た欠けた茶碗を捨てに行く で神 弾 3 生 て男に帰 \$ 頃 3 1 る ŧ い は本 希 受話器が を 0 T 望 つなぐ友と飲 る基地 耳 男 E を そば立たせ 開 たどり着 の 里 けて置 重うなり 千 心があ 鳥 です 小 足 1 1 t る かすみ 凡 江 英壬子 九郎 雀 葉

もつ もう一つ消すに消されぬ火種抱き 坂らしい坂に出会わぬ不幸せ 火種には水をかけかけ嫁姑 いじけない心でゆっくり世を渡 鶯の初音を左の耳で聞き この坂を上れば見える万華鏡 下り坂となって人生の灯がよめる あの橋を渡らなかった悔いもあり 渡るべき渡らざるべきヤジロベー 渡り切る誓を秘めた角かくし 渡り切るまで消えるな母の虹 のふりして聞くも処生術 は脚色されて風に乗る 度炎えたい火種だ埋めておく る **善**句報 とめ子 しづ江 歳 女

白美はるみ 恵清鈴民輝 美 子泉江子水 子 手放しで伸びた寿命を喜べず 背伸びした分だけ天が遠くなる 初耳が家族会議になる波紋 肩書で閻 忠告は神の怒号として受ける 知ってても初耳だよと言う狡さ わが想い天へ伸びよと蝦蟇の口 大物も肩書外せば唯 、芽は裏切らぬ彩をもつ 魔の庁は税を取り の人

肩書という物指しで幅利かす 初耳にすこし騒いだ火消し壺 物置きのジャガイモがもう春を告げ 天国へ行ける肩書ならもらう 柳わかやま

福を穫く熊手を母が買うて来る 多い方へ傾くエゴを詰れない 雪に手を触れて妻にも若い声 働いた手だなと思う初対面 スタートへ戻れぬ哀しい進化論 手招きの方にやさしい鬼がいる 定期券の中に生きて行くリズム

雀踊子

太的

初耳はいい

事だけをききとどめ

文寿ゆー り 子朗子尚

忠告は素直に受けた試練です

独千秋観紫荒瑞満秋宗弘雄碧 步代女洋泉介枝春人光朗々水

スタートのライバルとなら飲める酒 遺児という名でスタートが早くなる 干英紫寿緑公栄 寿 子子香子良子子 太茂津 子

忠告は聞こえぬ霞ヶ関

は地球が灰になる話

の兎の目に涙 の窓 地球儀の裏で飢えてる伸び盛り 花の芽を犬が土足で搔き散らす 木の芽ピカと僕の命に火をともす

かつみ

スタートの子へ子離れの決意する

青信号の視野でスタート切る怖さ

スタートで興奮してる本命馬

秋

石花菜

己暗示かけて生活のリズム組む のリズムになくてはならぬ笛

伸びた男に芯が無い

完走がゴー

ルの芝で伸びている

句楽風

初耳もテレビが慣らす無感動 肩書は無けれど髭が物を言 伸びる児のふくらむ夢は大きすぎ 初耳は紬の似合う女の罪 そんな仲初耳だわと電波のせ

Vi

寿満湖

策はもう見抜かれている懐手

スタートでつまずいて得たど根性

香川家より ました。 金

手引かれて妻のリズムへ歩を合わす 傾いて来そう男が燃えあがる 娘が三人傾きそうな荷がかかり 傾いていても地蔵は拝まれる 札束の重さへ傾く弱さ見る 梅一輪ずつのリズムで春が来る 傾けぬ宿命背負う芯柱 あの人に傾斜してゆく身が恐 愛の灯が傾く方に君がいる リズミカル点滴生きる灯に甦る 寝ころべば土手にも春のリズム聞き 狂いない時計 つくリズムに女の飢えがある のリズム憎い日も Vi

紅美女 虎 登武正照 代雄博子代郎 お陰様で で句 集 光背」完売致

皆様のご協力ありがとうござ

香

美

代

子

拝受致しました。 封

三男報

柳 塔

社

欠点をいじくり合って嫁姑 逆らった風がいのちの奴凧 夕暮れのいのち短かし月見草 家が傾くほどに愛したいあなた傾いた医院が好きで下駄を履く 欠点を背中でつつく妻が 欠点が親しみをます 銃口の前で欠点さらけ出す 欠点も長所に見えて惚れた仲 流行歌安い命をもて遊ぶ 命がけの恋ぬかみそに漬けてある ひとときのいのちを燃や 上品な指におさまる贋ダイヤ 許してる顔と子供はふんでいる 心配もほどほどにする生き上手 節高の指に指輪のない誇り 曖昧な言葉に心配増すばかり あきらめて許してやれる時が来る 結婚の指輪に四六時監視され 左様なら咳をしながら停車場 点滴へ無駄に光っている指 無になろうなろうスタート台へゆく インタビュー小さい指輪の主 未亡人指輪に悩み訴える の人の欠点口より手が早い いても大黒柱 地に出ても真直ぐ伸びる竹 が少し 柳塔まつえ の意地がある 初対面 流し雛 婦作家 恒松 中西兼治郎報 叮紅報 みつこ人 登志美 みの子 子 兼治郎 寿美子 薫 いつを 敏 文 敏 果紀正 希雄枝 新潟三区やはり割り込み駄目だった 冬眠の閨で唱える般若経 割り込んでやおら一本喫いつける すきみせぬ夫婦に猫も割り込めず 権力を持つと割り込み癖がつく 割り込まれ妥協の線が崩れ出 政界の甘みへ蟻のように群れ 甘い水働き蟻を駄目にする サラエボで日本の読みは甘か 原稿が冬眠ばかりする作家 冬眠の耳をくすぐる童 売上げを笑顔で覗くまねき猫 身の廃車ネジー本を捲きなおす 廃車した車庫で子供ら遊んでる 戒めに廃車を曝す事故現場 車なら廃車停年朝を出る 廃車してそれから足が強くなり 空室に誤解残して去ったひと 借り主が決ったらしい部屋の音 空室を一寸借りたい二人づれ 空室がふえて家主の低い腰 産声の娘へひと部屋空けておく いい程で居るのに割り込む馬の骨 一輪差しへ甘い言葉が活けてある 逢うてきた煙草が甘い輪をつくる 淋しくて甘い味方を呼び戻す へ春のノックが遠すぎる が時たま気づく冬の音 が長くなりそうこの へ腑抜けの風が吹くば 寒波

まさ子 正登志代 輝正大金狂英 IF. 太虎

がは血

のつながりを信じ合う

射月芳

頂留子

どん底でせっぱ詰った二枚舌

<

い母 の肩

ベンチャラ用の舌はソフトに出来て

マ子

の肩から入る縄のれ

いと知っている家庭

渓水報

水

当選の舌は議会で黙り込み

これも愛減塩減糖舌が知 寝に帰るだけの教授の家庭論 緑之助

きみえ

売上げが減って晩 売上げ 鈴つける役なら自慢など出来ぬ 嫁自慢姑自慢で仲が良し 自慢話で咲かせた花はすぐに枯れ 略歴の中に自慢を潜ませる 福笹の売上げ不況もつらなわれ 二人よれば孫の自慢となって老い が落ちて血 茶碗

か

代仕男 童

0 た

千与正壮 荒秀 根 一江樹介子

菜の花句会

江樹介子子苗々

もう一つの家庭はもたない方がよい 此の舌がうろうろさせる虹の街愛の輪をつないで春の風に遇う いかり肩身分を欺しちゃいけません 親がいる家庭夢見る施設の子 猫舌の私にうどん長すぎる 父の座に猫が坐っている家庭 舌打ちをたしかに聞いた妻の部屋 つながれた紐の長さの円を画 家庭的夫で窓の椅子に居る 事故知らす電話が普通の音で鳴 つなぐ輪の中にはぐれた子が座り < 鬼遊報 みつる 昭 雀踊子 武庫坊 年三右幸 司 幸 伸 男近生

凡九郎 薫十大富紀弘国 子郎輪子之生彰

多叮鶴千 賀子紅丸代

孤呂二

児江

日めくりをめくって思案する師 無造作に高いカレンダー投げ込まれ 暦換え連休を見てプラン練る 帰路に着くトラック夫と仰ぐ富士 見たこともない富士山を誉めそやし 鈍行に乗り換え富士の裾野ゆ 新春を富士と寿ぐ国に生き ガス抜いたアドバルーンのしおらしさ 指揮棒の動きが描くシンフォニー 決心の深さまばたき一つせず 消費者の心動かすコマーシャル 動かない虫へ北風容赦なく つながれて猿は悲 三枚の舌をもってるとは知らず 小さくなったなあと思う 休刊日手持無沙汰で日が暮れる よく似合う色で淋しい顔になる クラス会美人も老けたと安心し 好きだから友へ一線引いておく 心配が消え食べることねむること 命ばかり延びて福祉は縮みそう カレンダーの余白のメモで感づか 広重も写楽も富士が好きでした 富士登山先達の声鈴の音 ガス漏れをすぐに見抜いた鼻のよさ がどうあろうとも君と僕 胸に秘めたる事ひとつ ート動かす見事な口説ぶり つれと知るや君 しい芸をする 妻の肩 1 走 n 千秀報 泰子報 志津子 子 千周秀穂 定行 秀武桂政 千香子 富志子 久美 敏静輝爱小孝 静 子男男夫春 仲直りするか浅漬うまい朝 雪しぐれ訪ねる人なし尼の寺 訪れる人あり福寿草が咲く 灯をみんなつけて心の友を待つ 良縁をカバンに父の友が来る 長男が泣くと重たい父の石 泣くことも武器につかう詐欺女 多情仏心その泣き顔は魔女である 泣き事を聞かされ金は払わされ 虎落笛愛がほしいと泣いている 悲しいと泣ける他人がうらやまし 負け犬を番犬に飼う石の門 泣く程に春の光がなつかしい 見栄はった寒さ一人になってから 観念をした見栄素顔とり戻す 見栄でない私の素顔に春の風 見栄はってみても心は晴れ 沢庵に民話の味が染みている 漬物に世帯の重みつけ加え 糠漬に母には勝てぬ茄子の色 漬物は人との出会い夢みてる 漬物が女の枷を知っている 味を出す味方に漬物石がある 漬物は姑から嫁と娘につがれ 旅に出て漬物を買う京の街 アンケート痴漢に会った見栄もあり 切抜きを見つめて過去をふりかえる 一夜漬ころころ変る人心 かけにや呼んでくれそな筈はない 南大阪川柳会 僕反対の投書 する ません Vi 滋雀報 富美子 今日子 凡九郎 浩一郎 栄泰美森山 与幸慶千 志一子代 トシエ 岳喜花文美き 澄 美佐子 美 11111 勇 郎子代子久 人代梢次緒ぬ 内輪もめ一人利口に立ち廻り 幼稚園お利口さんの顔揃う 損をして得とる利口を身につける 都会にも底辺があり僕がいる 録画する分だけ悲しみ倍になる 期待した録画に私の顔が無い嘘のないままの姿がある録画 練習をさぼった悔いが大きすぎ 出る杭にけっしてならぬ利口 頭打つたびに利口になるだろう 切なくてやがて悲しくなるノー 期待した録画に私の顔が無 郷愁の録画の中のつるし柿 あやされて一歩一歩の歩き初め 練習の涙を知っているビデオ 漫才の練習まじめな顔でする 素振り百回徐々に自信がついて来る 白い粉の恐怖ルートは闇の中 やばいけど大きな儲けあるル 名月のルートに塔の影二つ 信じ合う心のルート探り合う どこにどうしるしあるのか蟻の ルート辿ると元凶は僕だった お世辞にも利口と言えぬ子をほめる ねずみ算利口な主婦がひっかかり 人物は小さいが目先はきくらしい ルート塗り変える歴史を掘り起こす 秒へ一日かけた録画どり すじのルートにもつれてゆく夫婦 間を利口と猿は思わな 来訪部屋を片付け 堺川柳会 河内 道

文善

柳宏子

砂

雀

章凡

久

頂留子

佑

秋

慶信寿雅

三治美風秋信

月子報

郎痴

弘千

雀踊子

節

子

公柳

一伸

好

泣き別れ赤い椿の散る道で お払いを受けると背筋しゃ 廃止線レールに霜が解けぬまま 旅の宿夕陽へ別れいうて発つ 髭剃って今日を闘う顔になり さよならを先に伸ばした胸算用 逃亡のもつれもつれし点と線 妻にしか分らぬ箱が棚にある くじの箱人を無邪気と思うなよ 都会の森で少女が白い鳩になる 孫にまだびっくり箱は隠しとく ドジを踏むたびしたたかになる男 子のノート夢がたんまり詰めてある 恵まれた器量で道を踏みはずし 思い出を埋めた地面を踏みしめる 光線に浮いているのは黄泉の塵 ○付けた葉書に迷う行楽費 マジックの箱は疑うものでない 大都会どれも生きねばならぬ顔 踏み外すこともあったと自慢きく 空白のノートへ本音埋めておく 空箱を捨てる決心せまられる 箱風呂に安堵の座禅組んでいる 発で仕止めたボタン鍋が煮え 発の弾丸ではじまる物語 発屋出てきてサイン決まらな 尼崎いくしま川柳会 ノートを父は持て余す の隅に借金を忘れてず んとする 角野かず子報 薫 智 凡九郎 成 与呂志 草甘山素

久 灯

平.

美智子 はじ芽 伊

特訓の檄がとんでる霜の朝

水仙郷波のしぶきを花に聞 塵籠に祭りの色が溢れてる 塵箱に捨てたゴミにも主義がある 若禿も白髪もすべて親ゆずり 曽孫抱く戦火潜った過去がある 手さぐりの袱紗さばきで初茶の湯

明日

はない修羅場を思う 尾浜川柳会

朝の箸 占曲

佳 夢 表 動 香

買出しで運んだ米で児は育ち 恢復期だんだん箸が軽くなる

いわを

豆作の蔵に米満ち踊りの輪

武年邦 坊代晴 紀美女 風 さよならを言えば引寄せられそうで 事もなげ惜しい命が散り急ぐ 猫のヒゲ引っぱり老妻拗ねて 野仏の頭 猪食えば昔の傷が疼き出 風流な雪がわたしの足奪う 前掛けの下から貰った温かさ 六十で耳順 匂わない女になって強い酒 でとけた別れ霜 わぬへそ曲 でゆずられる

飼猫の行方をさがす女文字霜踏んで早出の人の白い息 鬼の面つければ孫の豆つぶて 浮浪者のベンチに霜が降りてくる る

寒いのはお互いさんじゃと電話切る 春か静梨良弘シ清玉歌君晴堕一郁年春佳かよ ね 江子江枝征生ズ太子子子駄郎栄代子秋子お

散る花を惜しんでそっと押花に 用意した入学金があくびする 霜どけの路地になつかし紙芝居

風

世話好きで席温める暇がない雪をみて木彫の熊の眼が光る 貸衣裳で結構ですと現代っ子 犬も食わぬ喧嘩を子供 一
皺に冬が住む いが食べ

ふかし芋まだかまだかと蓋をとりほほえみで女は過去に蓋をする 食べ盛りもう米びつをからにする えべっさん人が多くて福足りぬ 春を呼ぶ野点の席に雪が舞い亡父の席まだ埋められぬ掘炬

くたびれて魂入れるコップ酒父と娘の和解に一役買った猫 久米仙人いまは天女も肌を見 健やかな赤と黒との夫婦箸 怒り心頭派手に茶碗の破れる音 泣き虫でないのに顔に泣きぼくろ あきまへんなと申告に行く商人 九死に一生母は見事に生きかえり アルバムの中に黄色い風が棲む取り越し苦労が帯を解かせない 身に余る穴を女は掘りたがり 人情に脆い男のコップ酒 幸せな茶の間みかんの艶を盛る 落し蓋午蒡ほどよく煮えており 雪やんで湯村の宿に山の月 野良仕事薬缶の蓋でお茶をのみ バムの中に黄色い風が棲む 川柳はびきの n 新礼江勝

敏 牧 光 貞 清 報 郎 重 吉 太 よしつぐ 吐胡来村 弘歌武す貞義佳昌 庫 治子坊み男男秋子 敏 吉子美見

噫小染大阪弁と笑顔消え サイレンが叩き起した出初式 釜風呂で砂の時計に仕切られる ままごとの道具持参で孫が来る 初舞台少しふるえる扇持 この寒さ真 遠い日の貧 蜆取り春を一緒に掬いあげ 蜆とる双手に寒い冬が棲む 朝帰り蜆売りゆく先斗町 蜆貝亡母のしぐさで洗ってる 農薬の恐怖に蜆身をひそめ ごちそうは何も無いがと蜆汁 好き放題一日暮れる佗住居 雪しんしん更けて冷たい夜具の衿 妻病んで厨の寒さよく分かり 寒そうな影が私につきまとう 誕生日忘れられてる寒い風 月明り路地に寒さがたまってる ふるさとの病母案じる寒い日々 古傷を撫で合う寒い過去がある 寒行の太鼓が夜の底に消え 真冬日がつづいて比叡に雪消えず 大阪に来てしんじ湖の砂を吐 を病めばはるばる母の蜆貝 汁まだ身があるかとかきまぜる かけもせわしくバスの補助席 分の豆撒かす孫遠く住み 子の描く絵に見る寒い 西宮北口川柳会 面目に冬眠考える しい記憶蜆汁 き 妹尾 栗春 橋義 あき子 平 婦美子

はつ絵 よ志子 喜代子 子 3 足跡が頼りトボトボ雪の朝 流感にきくキンカンが色づ 底力出せば小火も消 裸木の緑ためてる底力 寒マラソンあかんたれ 志望校へパスして見せた底力 なで肩の男が背負う旅一 腕相撲孫の力みに負けてやり 戦後復興日本人の底力 底力ベニヤ板 雪かきに思わぬ人の底 事故死した夫へ示す レストランの真ん中にいる誕生 が寒さをの とは知らなんだ せて 世る妻 車 庫に入る

昭

たわむれの恋に約束揺れて 招待の切符で欠伸嚙んでいる 白菜を二つに切った冬の白 の子走りぬ いる かず à 東洋男 日の出 きよ子 千世子 キミ 郎

水上津 みつ子 恵美子 光眉 園 芽女

右杜

近的

ボクの父

母を殴ったことがない

少しずつしゃべりたくなる春の庭 金持ちに金があつまる悪いクセ

青空にシーソー

明日が重くなる

飼い猫に男は鈴をつけたがる 泣きごとは言わずに春を待つ鏡 落ちるだけ落ちて椿にある色気 紀 伸 定

雄

温泉で女同士の素顔見 湯煙に雪もとけてる有馬 夢千代のブーム愛しやお湯 の蟹とセットで来た温泉 0

武

庫坊

湯

温泉が出て騒がしい村となり 柳友とはいる温泉なお温い 温泉をコースに入れて練る旅路 混浴の温泉旅程に組み入れる 秀吉にあやかりしっぽり有馬 露天風呂湯気を通して皆きれ 国訛り知らぬ同士の露天風 の湯 10

この次は二人で来たい有馬の湯 恋人でなかったらしい割勘で 過ぎし恋尼僧のうしろ静かなり お湯が湧く故郷は深い雪の中 廃線の跡に初恋かすんでる

好きな人居るから出社の靴 失恋の女から貰う旅便り 結末は悲しいウー 見合いして恋して今日はフルムーン 清姫の系図で女燃え盛る もう一歩進めば恋が叶うたに 初恋を秘めたまんまの玉手箱 追えば逃げにげれば寄せる恋の 人妻も密かに恋をしています マンリブの ははず 恋 波 む

きつね雨恋の悲しみまだ癒えぬ

信桂春よ紫萬伊は正千代 三香江津香的郎絵博子 紀美女 三男 太茂津代 栄信桂春 美 子子香江 杜和英礼 笑正光 女子代

恋やさし野辺の花から匂いだす 戻れない恋ならいっそ燃えつきよう

b

3

和歌山·西宮有馬吟行 間が見える山 使いわける手帳を二冊持っている 風の音今は他人が住む生家 グッドバイ半ぱな恋はしたくない 屋根の雪どさりと落ちて街暮れる

郁 年水

どうにもならぬ恋が男の背に溜まる

打ちの恋峰打ちで勝負する

底冷えへ犬に湯タンポ忘れぬ子

のバ

ス 黒川

出生は大阪ですとやや力む その日から文箱に溜まる恋の彩 戦略に目つぶしされた青春よ 戦略の通りに動く兵が居ず 戦略のなかにこぼれる笑みがある 先生と呼ばれ地元の無理を聞 戦略とわかっていても銭の罠 孫の戦略やさしさからは逃げられ 戦略は洞ヶ峠へ来て変る みやげ待つ地元に母と恩師いる 人脈と金脈地元だけ頼り 地下室で練る戦略が恐くなる 戦略として香水を使い分け ニュータウン地元の牛や鶏と 負け犬が地元で風のぬくさ知る 岡目八目地元に強い風当り 戦略に長けた男の非情な眼 戦略のないまま景気に左右され 戦略を練り直しとくクリスマス 戦略は狸寝入りと決めている 戦略と知って素直に従いて行く 根回しが利いて戦略動き出す 名将と言われ逃げるが勝と言い 井のかわず地元の良さが分らない 飛行雲熱い想いが今届 女房の戦略に乗る無事な日々 道祖神地元の人の顔に似る 鉄刀の出土地元が活気づき プニングまでは戦略考えず 略で買われた土地今高値 12 柳宏子 あいき 三千子 英壬子 頂留子 成 よしひろ まさお よし子 女

> 戦略の一つに妻も飲みはじめ こんにちはと言うたら大根くれはった 祭だけ氏子になった青ハッピ 戦略へ思わぬ運が左右する 戦略の裏に札束積んであり ローカル線地元の声がはじけそう 減税をうたって票を読んでいる ひらめきの戦略冴える太い眉 肩書の癖が地元でなじめな 六法を開き戦略立て直す 住み馴れて此所も都か河内弁 戦略を練るセールスの靴光る 肩たたく孫の戦略読めてくる 分譲に地元潤おう便利よさ 輪旗をめざせ地元の英雄に Va 覚然坊 てまり かすみ あやめ シマ子 淳 まさ乃 朗

余るほど買って腐らせ高くつき 晩酌を余分につけただけ稼ぎ 羨ましい隣は余る梳き鋏 人生の余白を埋める旅つづく 棋友来ず雪居の暇を持て余し 余る米だが増収に汗流し 意識せぬ老い大らかにぼけている 類焼は免れました水浸し やっと寝た子へ救急車遠慮せず 戦略へ代打代走フルに出し 自閉症すらすらしゃべる夢で覚め すらすらと絵を書く孫の眼がきれい すらすらと来た人生に愛が満ち 子の意見老いては一歩ゆずる気に うみなり川柳会 小林由多香報 富美湖 天 Œ 子生女郎 女 停年のない海に夢本を読む この町に慣れて故郷遠くなり 年明ける汽笛が山の向うから お雑煮も夫婦きりの三が日 メルヘンに入りこんだよう卒寿春 自販器の冷たい貌に馴らされ お年玉買いたいものがある四歳 手の中で父の脈が消えてゆく 水仙の香りほのかにお茶を点つ 四捨五入すれば中流かもしれず お正月着付けて親馬鹿だと思う

3

ささやかな希みへ無理に無理を言う

立春大吉風もつすみどり 新しいマップシューズがはりきらせ バカ一人いて世の中がおもしろい 川柳をやってよかった年度賞 雪だるま大きなゆめをもっている 立ち止まるまい古傷が痛むから 進学ガイド借りて心の準備する ばあちゃんが教えてくれた仏さま ボランティア私も一つ協力し お正月たのしみなのはおとし玉 シーズンがくればつりざおもえてくる おしょうがつきものきましたきれいです おしょうがつきものもういやしんどいよ 一月の易者言いたいことを言うておる 川柳たけはら 保育所あきみ 保育所はるみ 小四美 **公** 生 紀 中二希世子 **北恵** 子 小四亜貴子 北千惠子 保昭昭

温室でむりやり春の顔にされ

美佐雄路 淑節笑房静 比呂子 鈍

-87

募 集・

JII

柳

塔

句

西

尾

栞

選

塔

選

煙

選

愛 水 JII

課

題

月

号発 10

表

4月

H

締

切

七

月

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。 水煙抄欄の投句は 列 題 煙 む 4 吟 帖 抄 (各題5句以内 3句 10 句 里 天 都 橘 一般誌友の方です。 田正 倉 高 T. 求 紫 能 董 風 香

生梢 芽 選 選 選

クー ★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。 ★愛染帖·課題吟 返 味 事 へは同人・誌友を限らず 神 Ш 夏 磯 大道 選 選 選

号発表 (3句 10 (各題5句以 10 句 句 里 橘 西 计 (5月 内 高 JII 尾 15 H 紫 文 薫 締 切 栞 4 風

4月の常任理事会は1日(日)

選 選 選

昭昭 〒545 和和 - 4 年分 年 五五 印発編 分 刷 行事 九九年年 所人兼 六 千 藤 中 四 Ξ 月 月 原島 百 百

定 大阪市阿倍野区三明町二-一〇-行所 価 替口座大阪8-三三六八番 ウエムラ第2ビル202号室 電話 五 JII 百 (日本)六二九十 円 柳 童 蓬 円 円 六九 料50 送 送 太 H 日 心 印刷 料 共 共 社 社郎

本社 4 月句会

会 席

題

当日発表

日 会 時

> な 几

会 日

館

寺

12

南

月

七

士.

午

後

六時

題

五百円

題

突 円 破

おはなし

地下鉄谷町九丁 6 自石 772 黒 近近 4 鉄上本 辻 1 町 4 町下 19 4

1

番

各題三句以内厳守 Ш 太茂津 あい 射月 * 選 選 選 選

笠 宮 宮

原 尾

びくびく

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円 同封のこと。

> JII 柳 塔 社

5月の兼題は表紙裏に発表

5月の本社句会は7日(月)

記 筋

念 務

0)

金受 3

領 てい 当

証

その

他 て、 鬼

0

事

かい

斬 集

時 します。

遅 代

れることになり、

洣 会

かけ

ご諒承下さ

10

惑をお 暦 かい

肉 柳

痛 句

で養

生

n 担

ます

0 村人

還

Ш

塔

会

室

0

者

高

游

氏

お

詫 U

柳

塔 社

れだったが、 中を自負してい ならなくなっ だろう。安らかに 便 いたか に 年に近い た小松園 いの上のきお演中

の初七座よと百の

興

は折 H か、暗 いるのは 淋は自 たとき、たとき、

心で世で彫 旅道年のま あきのはの中天 世の当り、新進と入り、新進という。 一姿を写. が 当当 当 が 主 れ た 重う 太か伸雀の と 当時そ 当時そ 戸いらみ来に かよ がの松作心財け A知っていたが、 お人柄のおだや おして頂いた 驚いた なみ私が 姓るを た舞台姿、 力が潜んで 人間牌 返さず 必さず 感じ

346 446

はご世の句。 はやし客には見 はやし客には見 はでしる。 属 る Tが復活に は二世の として盛 秋以来 盛っれなっ 保和友氏の文 やひらく。 柳五・七・五 柳 をする。いかを煮た鍋のまま食草に、湯削りのまま食草に、湯削りのまま食草に、湯削りのまま食草に、湯削りのまま食草に、湯削りのまった。 編集後記のあとして、 無川紫香の豆切集のことが出て、 というく これ を読む。 久近の文に、 黒川紫香の豆切集のことが出て 起えて に感銘をういが、感動な

簡か川て上歳移ト▼ でなる。 なたをも少若。 伯の フカ・マ 相の る棚 会年の 会年の のあと、 数 髪い、れる。 一葉作の作家を偲びれる。一川柳を作らなられた、日本のことを書いれる。一川柳を養しれる。一川柳を養しなられた、 にも華やかな舞台 を放けるとくそく

柳カマヤに 異はの消知 めの小無え

形の情熱によって が、もののあわれた。 が、もののよれた。 が、もののよれた。 が、もののあわれた。 が、もののあわれた。 が、もののあわれた。 が、もののものが、 が、もののあわれた。 が、もののは、 昭和めた。 が、 はあく。 でいる。 でい。 でいる。 でい。 でいる。 で 勿がだ、風雪であれり言葉 体加いの数はなったの柳澤 だ松ななわて の 氏 いたが、指数における いったことでない。 で積み重ねてゆばい。一つの石ではい。一つの石ではい。 一つの石でみで勝に思ってみでいまで石で が勝に思ってみでみがらながらながらながらながらながらながらながらながらながらながらながらながらない。 野郎、白柳、 小松園さん 小松園さん にいた頃で、 の以和貴荘 の以和貴荘

中国 かき おは、 人柄 にきび

あしあ選慮作あらい われ を 全ずかなたらが未だに がなく没らあに 国の句に

で、だから下手な句を見たすると下手な句を見るからすると下手な句を見るから手になると言われている。 い睡だり は何故かというと強なると言われていると言われてみると新してくるものがの場面が行詰ったときはない。 『その時』 とんぐり何点なると言われていると言われていると言われていると言われていると言われていると言われていると言われていると言われていると言われていると言われていると言われていると強いというと強いませんだけばいた。 でいい 何を 読んでったから下手な句を見るから がまた したい はる

福をした

五百円(送料五十円)

〒五三〇・大阪市北区中之島 自由課題・秀句には掲載紙贈呈 明示すること」。投稿随時

ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

俳 短 歌 選者

佐 掲載日)

々

信

投稿規定

はがき一枚に三句(首)以内(川柳・俳句・短歌と

句

掲載日) 毎週水・土曜日

]1]

柳

選者

橘

高

薫

風

掲載日) 毎週火・金曜日 E 日刊

稿 欄 案 内

この夏、おいしさひとりじめ

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン

高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドージカ店 近鉄(アペノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)

> サン・ストア(中之島・淀屋橋各店) 京阪モール 新川売店

南海難波駅構店 泉北高島屋

国鉄大阪駅店





雑誌 05703-4